

魂^{まふい}の島から



講話集

魂まふいの島から

第二十七回神道講演全国研修大会・沖縄大会

目次

御挨拶

序

記念講演「沖縄の神社」

はじめの第一歩

宮良ルリ著「私のひめゆり戦記」を読んで

大社

男里南組やぐら入魂式

神道—カンナガラノミチ—

あなたの笑顔を

夏越の大祓

沖縄県護国神社の由緒について

盗られるな尖閣諸島

祇園祭について

宝物

神社本庁総長

波上宮 宮司

波上宮 宮司

田中 恆清

末安 大孝

末安 大孝 1

畠田 明彦 12

多田 利子 17

佐伯 正則 23

菅野 洋子 29

鈴木 烈 33

佐々木 美津子 39

與那嶺 健 44

高良 奈緒矢 50

石塚 智康 54

花房 正典 60

二ノ宮 雅子 65

新緑の候に思ふこと

旧暦の話

沖縄県護国神社の由緒について

御嶽の神々と信仰

日本人の命の絆

遺骨の尊厳（日本人の靈魂観）

天草招魂祭

乃木將軍御殉死壺百年祭を迎えて

宮古神社の由緒

國恩祭

日本の心

波上宮由緒

みたま祭

吉田松陰先生語録より「いま、天下の大患は」

塩崎昇

田場聡

木村健吾

井澤真人

西尾酒子

佐上博

田代壽興

松吉宣和

奥原隆良

宮城豊

宮本優子

山崎勝男

佐古建彦

寺本正徳

69

75

80

84

88

94

99

103

108

111

115

121

125

130

魂氣張る春が来た

伝える命、伝わる命（陸前高田の希望の一本松より）

祖訓を嗣ぐ

「瞼の母」お母さんの匂い

ぬくもり

犠牲の心と英雄

日本民族の教へ―祖先崇拜・自然崇拜―

私と沖縄―鎮魂慰霊の奉仕の日々―

沖縄のおじい、おばあと日本人のDNA

稽古照今

沖縄の島守島田^{むらた}叡

神道講演構成法

沖縄大会の記録

神道講演全国協議会役員名簿

波多野 學

村 瀬 佳 子

山 下 裕 嗣

河 本 文 夫

原 茂 子

佐 古 一 洌

村 田 和 之

大 野 康 孝

鈴 木 明 子

中木屋 豊

小 野 日 隆

全国大会の歩み

あとがき

沖縄大会実行委員長 村田和之

220 218

御挨拶

神社本庁総長 田 中 恆 清

第二十七回神道講演全国研修大会・沖縄大会の開催にあたり、一言御挨拶申し上げます。

神道講演全国協議会の皆様には、常日頃より神社本庁の諸施策に対し、格別の御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

貴会は、長きに亙り、神道講演を通じて斯道の興隆に御尽力戴いた石井寿夫先生・佐古幸嬰先生の貴い御志を継承発展させる場として、昭和四十六年より本研修会を開催されてきました。爾来、多数の参加者を得て研修を重ね、互に研鑽された成果を、各奉仕神社での社頭講話を始めとした教化活動において実践されてをりますことは、斯界にとりまして洵に心強い限りであり、深く敬意を表する次第でございます。

さて三月十一日に発生した東日本大地震は、多くの神社や氏子地域に甚大な被害を齎しました。被災された方々に、改めて御見舞ひ申し上げます。復興に向けて国民が心一つに取り組んでゐるこの時にこそ、君民一体の国柄をはじめ、日本人が悠久の歴史の中で培って

きた敬神崇祖の心や、自然に対する畏敬の念などを、氏子崇敬者・参拝者を始め、幅広く伝へてゆく神道講演、社頭講話は益々重要性を増すものと確信致してをります。

どうか皆様には、教化活動の第一線に立つとの自覚のもと、本研修大会の成果を広く斯界に伝へ、国民精神の昂揚を以つて、斯道の興隆と我が国の発展を図るため、尚一層の御尽力を賜りますやう、切に願ひ申上げます。

結びにあたり、貴会の愈々の御隆昌と、参加各位の益々の御活躍と御健勝を祈念致しまして、御挨拶と致します。

序

来年には、祖国復帰四十周年を迎えますこの沖縄で、第二十七回となります「神道講演全国研修大会」が開催されますことは時宜を得たものであり、まず以て御関係各位に深く敬意を表する次第であります。

遠路のところ多数の御参加を得て熱心なる研修がなされましたこと、また、この大会を主管されます神道講演全国協議会の村田和之会長、同佐古一洵副会長、両先生御自ら事務局の皆様と共に諸準備をなさるお姿に接し、ここに本研修の心根を強く感じ、感入のものがございました。

本研修に於ける全参加者の講演が、ここに一冊の小本として発刊されますが、講演・講話の事例集としまして、更に教化事例としても参考になるものであろうかと思ひます。特に若い神職の心の動き、とまどいも含め年配者がどう受けとめ、どう指導すべきかと云った事すら考えさせられる論集でもあろうかと思ひます。

この様々に語るところから多くを学んでいただけるとすれば、本研修にご尽力いただい

た御当局皆様の労に応え、更には斯道の発展に寄与することに繋がるものと確信いたしております。

沖縄大会会長・波上宮宮司 末 安 大 孝

(平成二十三年六月)



第27回 神道講演全国研修大会 沖縄大会

平成23年6月12日～14日 波上宮

第二十七回

神道講演全国研修大会・沖縄大会

とき 平成二十三年六月十二日～十四日
ところ 波上宮

沖縄の神社

波上宮宮司 末 安 大 孝

全国各地よりこの沖縄の地へお越し頂き、心から歓迎申し上げます。大雑把になろうかと存じますが、「沖縄のご紹介」と云う思いで、身近なことからお話させて頂きます。

沖縄と云えば、南国で琉球王朝が在った処、米軍基地の島、という様なイメージが強いのではないかと思います。実の所私もそうでした。赴任が決まると、妻は「沖縄って？ 何処？」と全国地図を拡げて見るや、沖縄は糸の切れ端の様に点で描かれており、「此処ですか？」と驚嘆の一言。当時は水不足が深刻でしたし、更に神社傍に辻町という昔乍らの遊郭街があり、そこで高校生が暴力団の流れ弾に当たって死亡するという事件もあり、物騒な所というイメージが強く「大丈夫ですか？」と心配する始末でありました。平成二年十二月に着任するや、平成三年、厳島神社が一部倒壊するという、あの超大型台風に遭遇。沖縄では風速七、八十メートルを記録したとされました。その台風で、私は社宅から五十三時間一歩も出れず、一睡も出来ずでした。何故かといいますと、もの凄い風雨が窓

ガラスに吹き付け、今にも割れんばかりに撓ってくる。何時弾けて雨風が吹き込んで来るか判らず、窓ガラスと睨めっこ。漸く風が収まり、すぐに神社へ駆け付けますと、社殿床にはバケツや洗面器、缶カンに至るまで敷き詰められ、彼方此方で雨漏りと云うんです。スラブ屋根にヒビが入ると原因箇所が判明し難く、事態を役員に報告すると共に、何の準備もありませんが、そろそろ戦後の本格的造営をなささいとの神様の思召しと解し、ご造営を手掛けることと致しました。結果、平成五年に社殿造営が成就し、平成六年の大祭日に奉祝祭を斎行致しました。この時期はバブル崩壊の頃で、大きな転換期でもありませんが、安里八幡宮も造営が叶い、平成十一年には末吉宮の拝殿が復元復興され、沖宮の数次に亘る整備、十七年には普天満宮の全大造営が完工致し、二十二年六月には宮古神社が移転造営を成就するなど、夫々に県内神社の御神徳発揚に邁進されて居りますことは、何よりも嬉しく存じております。

それでは、レジメの「はじめに」沖繩のことばからまいります。

私、沖繩に参り、やはり氣になったのは沖繩の方言・言葉でした。ある日、新聞を見ると「テーゲー主義は止めましょう」と書いてある。「テーゲー」に聞き覚えがあり、意味を聞けば「大概に、大雑把な」との答えです。私の故郷・佐賀でも実は「テーゲー」と云う

言葉を使います。幼少の頃、悪戯をしますと「テーゲーにせんね!」とよく怒られました。「もう大概にしときなさい」の意味で同じなのです。私は親しみを持つ切っ掛けになり、非常に興味を持った次第であります。方言は大体聞き取れましても、喋るとなるとイントネーションがとても難しいんですね。喋ると云う事自体で言えば、母音の問題が一番の鍵となります。母音「あいうえお」の下二つ「え」と「お」は沖縄では発音しにくく、「え」が「い」に、「お」は「う」に置き換えられ、「あいう」三つが主な母音となります。例えば、沖縄信仰の土台となるのが「ウタキ信仰」と言っても過言ではありませんが、そのウタキは「おたけ」が元になります。これで見ますと、「おたけ」の「お」は「う」に、「た」はそのまま、「け」は発音できませんので「き」となり、「うたき」となる訳です。また「首里」で云うと、「り」というのは^リりりりりい^グと言いますと、母音か子音が分からない様になり、沖縄で「り」は子音寄りで「い」と発音し、首里は「しゅい」となります。これも本格的な「うちなーぐち」で「うちなーんちゅ（沖縄の人）」に発音して貰いますと更に微妙に違うと思います。

『しゅ』が「す」の発音に近くなり「すい」となります。（新垣宮司の助言）ありがとうございます。兎に角、大変興味を持ちました。

時間が余り無く次に参りますが、沖繩で「おもろさうし」という古謡があります。

これが色々の面に出ており、文字・言葉が非常に面白いと思うのです。「楠の木はこので、大和舟こので、大和旅のぼて、山城（やまと）旅のぼて、玉（曲玉）（かわら）買いにのぼて、手持（てもち）買いにのぼて」これは古謡の一端で相当に古い歌であります、意識の「楠木で作って、大和舟作って」を見ればお解りの通り、大和詞と決してかけ離れておらず、発音が変る位で、言葉の基本は変わらないのです。更に興味深いのは、下段の歌「勝連はなおにぎやたとある大和の鎌倉にたとある」を見ますと、「勝連の賑わいを大和の鎌倉に比べ、鎌倉と同じ様だ」と詠んでいる事です。もう一つ解る事は、昔の人は、遠く離れた所へそう簡単に行けないと思いますが、頻繁に動いています。私達が歴史やその土地を見るにしても、先人が非常にダイナミックに動いていた事を認識すべきかと思えます。今では飛行機で一つ飛びですが、昔はこの沖繩から鹿児島まで早船を出すことも度々で、この沖繩列島は古い時代から中国への渡海の道であったことが伺えます。

次の「おもろ語の共通語、他の沖繩語も含めて」に掲載の言葉も古く、平安・室町がその儘沖繩に來た感があります。最近では余り使わない言葉で「あたためー」「はまりよー」や薩摩が入って來てからの「ちばりよー」の言葉もあります。また、母は「あんまー」「あ

ばー」と言いますが、東北・岩手辺りに「あばー」の言葉で残っていると聞きました。何れも古語がそのまま使われており、沖繩に於ける発音の違いで少し聞き間違い、違う言葉に聞こえるものかと思います。

次の話題ですが、折口先生が大正十年に来島されますが、その前年には柳田先生が来られ、「ここ沖繩には神道の原点が全て残っている。」と言われたそうです。当神社庁副庁長の先代宮司・新垣義志さんは、私が鹿児島島の参事であった頃、「鹿児島には、古神道は生きてないのか？」と良く言われたのですが、沖繩に来てその意味が良く理解できました。沖繩の信仰では、先程「ウタキ信仰」が素地になると申しましたけれども、神社さん〴〵お寺さん〴〵からカー（井泉）まで、大和で言い換えれば〴〵お地藏さん〴〵も〴〵社寺〴〵も大事にするように、全てが大切にされています。

「沖繩の年中行事との比較」一覧に「若水取り」「初起し」〴〵とうしびー祝い〴〵や〴〵ヒヌカ〇ン御迎え〴〵などがあり、七日の節句、小正月など殆ど大和と同じで、多少収穫時期の違いで、時期のずれがある程度です。それを理解し比較して頂きますと非常に分かり易いと思います。琉球王国で、各地のウタキとか、マツリゴトの由来を編集したものが「由来記」であり、編纂された『琉球國由来記 卷五』『城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀』の編纂委員

の跋文は、我々神職も心しておかねばならない言葉かと思ひます。「天子ハ天地ヲ祭り、諸侯ハ封内ノ山川ヲ祭ル。古ノ礼、缺クベカラズ。然リトイヘドモ神ヲ祭ルニハ誠ヲモツテ本トナス。モシ誠立タズバ祭ハ觀ルニ足ラズ。故ニ言フ、神ヲ祭ルニハ（神）キマスガ如クセヨ、ト。アヘテ敬セザランヤ。云々」とあります。この心持ちを忠実に守つておられる。各ウガン（御願）の人達が、普天満宮でもどちらでも、拝殿前に座つてお参りをなさいます。ここ沖繩では立つてお参りをする事はなく、座つてくぐもった姿で、大切な祈りの言葉を称えお参りされています。『年中祭祀の小祿間切』は、その様子とお供物の記録で、ミフーダ、ウンサク（御神酒）などがあり、その祭の状況が大体お解り頂けると思ひます。沖繩の丁重なお参り、篤実なお方々、その生活と姿勢が見えてきます。

次に「琉球八社」ですが、波上宮が一三六八年の御鎮座と伝えられますが、文献等に記述が無いことから、学者は、鎮座年は不詳とした方がいと云われます。しかし護国寺が一三六八年開山と伝えられていますから、その儘が正しいかと思つております。何故かと申しますと、由来記などにも寺の開山年は見えますが、神社の鎮座年は無い場合が多いんです。末吉宮や宮古神社も由来記の中に記載があり、それには、必ず守り神を祭つてから、寺を開山する。これが権現信仰の姿なのです。それで別当寺としてその神々にお仕えする。

宮古の由来記にも経緯があり、薩摩の了承があつて由来の再刊がなされる折、当時、宮古に神主が居らず住職がその由来を王府に提出しております。その結果、お寺中心の記述であつた為、首里の編纂委員がそれを訂正し、熊野権現を祀る権現堂が勧請され、然る後に祥雲寺が建つたとしております。やはり、王府の編纂委員は、その位の弁え、良識は持つていたと云う事の証明でございます。末吉宮でも、祀る山に鏡と面が見つかり両方を祀りました。しかる後に、万寿寺を建てたと記述されていきます。何れにしても、宮寺（みやてら）の姿ですから、波上宮と護国寺との鎮座・開山の年数が離れるといった事はない訳です。守り神を祀つた然る後にお寺が建つ、そう云つた信仰の基本を考えますと、鎮座年数が解つて参ります。この事を念頭に置き、他の琉球八社について申し上げたく存じます。

琉球王府による官社である波上宮、普天満宮、沖宮、末吉宮、八幡宮、識名宮、天久宮、金武宮の内、八幡宮だけが八幡さんの神様であり、他は全て熊野の御祭神でございます。波上宮が第一の宮として尊崇され、正月には国王始め諸官三百余名の参拝があり、また普天満宮でも同じ様に、九月にお参りされるなど、儀式には多々変遷があり、財政状況もあつてか、御代参や末吉宮での年末のお籠りなどがみられます。この琉球八社が中心となりますが、この他に、伊勢の神様が祀られる浮島神社、琉球國の産業中興の祖といわれる三

大人が祀られる世持神社、他にも、沖縄神社、護国神社などがあります。

昭和四十五年頃から、本土復帰が具体化して参りまして、その時期に合わせ、神社本庁が調査に入っております。先程の「ウタキ」ですが、これは大正年間に一村一社という気運のもと、村々の御嶽などに神社を造る予定で、調査によると二百七十ヶ所程の「ウタキ」があった訳ですが、この大半がそのままに鳥居が残り、いつでも神社に出来る様になっております。私共にも、何処まで沖縄の神社を復興するかという問題になるのですが、二百七十ヶ所の神社化を、もし復活したとして、全て各村々、各地域でのウタキであり村営で守っていたりします。実際に神主が介在して、というような意識でもなければ習慣でもなく、色々の難しさがあり、そのままになってきました。今、宮古神社の御造営で立派な社殿が出来ましたけれども、廻りに御嶽が数ヶ所あり、神社で面倒を見てほしいとの相談を受け、その土地建物が全て神社に寄付され、神社で守ることとなりました。その様な形では可能ですが、神主を置いてという事は出来ない。神社復興もその辺りで止まり、長年に亘り旧慣例で参っているウタキは御嶽として護持すべきとの事で、今日に至っております。明らかに神社であった所は、何とか復興し守っているのが現状です。ノロや神人（かみんちゅ）の人達がいらして、琉球王国も大和の皇室と同じく皇室から出られた

女性方、また此処でいえば王家から出られた方が「聞得大君（きこえおおきみ）」と云つて齋王のお役目をなされます。その引継ぎは、聖地「齋場（せーふあ）御嶽」というところでなされ、聞得大君の下にはお三方の大阿母（おおあも）志良礼（しられ）（首里の三間切を轄掌）を配し、その下に各地方を統括する「大阿母（おおあも）」がつき、更にそれを支える高位のノロ、三十三君とも云われる神女が仕え、更にその下に大勢のノロが辞令を受け就任していました。女神主さん、今でも健在で「神人の流れでございます」とか、「祖先が大阿母志良礼でございます」ということでお見えになります。数少なくはなりましたが、ずっと続いているのですね。昔この体制で正・五・九月に祈祷があり、禪宗系のお寺が禪家衆、真言宗系が聖家衆、神主が祝部（はふり）衆と云われたそうですが、この三衆が首里城の庫裡に上がつて祈祷を行つております。この祈祷が終ると、聞得大君（きこえおおきみ）が首里城内の御嶽を始として祈祷を行っています。その後、全琉球王国一斉に祈祷が行われています。諸島に至るまでノロたちが神事を行った、これが琉球王国なのです。所謂、祭祀王国であつたという事に他ならず、将しくこれが沖縄の姿だった訳であります。西暦一六〇九年、薩摩が入り、少し様子が変わりますが、薩摩は貿易の為に異国政策を執り、服装まで規正し、その立札があつたといひます。今、中国も何かと因縁を申し立て

ているようですが、琉球王国は祭祀王国、丁重なる祭祀が行われて来たということであり
ます。王府も一般の家庭でも、ヒヌカン（火之神）を始め、身近な神々から王国が祀る
神々、仏に至るまで丁重に大事にしてきたと申せましょう。問題なのは、先の大戦があり
ました折に、皇民化教育に因って犠牲が増えたという人達の主張が一般化しまして、皇民
化の最たるところが神社であると、大変な誤解を受け、この波上宮も度々火を付けられ
ております。波上宮の御造営では、バットで殴つても割れない様に強化硝子を用いました。
秋田の護国神社では、上から侵入し火を付けられました。その様な事もありますので、全
部鉄扉で囲つてあります。先程申しました様に、近年は温厚なる土地柄に戻つたように思
つております。

最後に「その他の事」を申し述べ、終らせていただきます。

靖国神社の御祭神に関わる裁判があつておりますけれども、当県の様な小さな神社庁で
は大変です。小さい乍らも他宗教との協力は二十年になります。八月十五日に「祈りと平
和の集い」を致しますが、他の事々にも協力し合っています。また地域振興の面では、地
域・町内会に対する一体的な配慮がなされており、普天満宮・沖宮でも同様ですが、地元
の人達が率先して手伝いに来てくれる、こうしたことを大事にしております。波上宮の大

祭で申しますと、ご造営前の頃は祭りに御神輿が出たぐらいでしたが、平成のご造営に合わせて大祭の改革を致しました。その会合の折、町内会長皆様に申しました事は、「神社というものは神主の物ではない。神主はご奉仕をしている訳で、あなた方皆のものなんです」と。えっ？という顔をしておられましたけど、まあそうなのです。それをずっと、ご先祖様が受け継いできたんです、と。分かっていただきますと、ヨシ！やろう！と。この沖繩には氏子とか檀家というものがありません。一辺倒に本土の神社と一緒にされますと駄目ですネ。何事も、徐々に、その成果を上げていこうという方針でございます。これが沖繩神社界の現状でもあります。

ご静聴を感謝致します。この研修が実り多いものでありますよう祈念申し上げ、終わらせていただきます。

平成二十三年六月十二日

はじめの第一歩

畠田明彦

皆さんは今までの人生で「いじめ」に遭った事がありますか？反対に人をいじめた事がありますか？私はどちらもはつきりと自覚しているものではありません。ただ、大学時代の合気道部で、先輩からしごかれた事、反対に後輩をしごいた事が「いじめ」の被害者、加害者と言うなら、どちらも「経験者」になります。

さて、現在深刻化している虐め問題、少し私の考えを述べてみたいと思います。

皆さんの中で「鏡の法則」と言う本、或いはネットのブログを読まれた方はいますか？コーチングのプロとして活躍されている野口嘉則さんのミリオンセラーです。

簡潔にストーリーを紹介します。

○

いじめに遭っているにも拘わらず、心を開いてその辛さや寂しさを語ってくれない小学生の息子を持つ主婦A子は、夫の先輩であり心理学に詳しい経営コンサルタントB氏に相談します。彼から「現実にかかる出来事は一つの『結果』であり、そこには必ず「原因」

がある。あなたの人生の現実、あなたの心を映し出す鏡だと考えてみて下さい。子どもがいじめられていると言う結果には、あなたが大切にすべき、感謝すべき人を責めていると言う原因があります」と告げられます。その人とは夫であり、自分の父親でありました。まずB氏は、二十年以上どうしても許す事が出来ず、心を開く事ができなかった疎ましい父親に電話し、感謝の言葉を伝えるよう進言します。躊躇しつつA子は父親に電話をしました。思いも寄らぬA子の言葉に父親は泣き崩れてしまいます。やがてA子は、父親の深い愛情と、娘から拒否される辛さ、何もしてやれない辛さを理解します。そして自分が今、その父と同じ立場にあり、同じ辛さを味わっている事に気付きます。また同時に、父親へのスタンスが投影され、教養がない、尊敬できないと軽蔑してきた夫に対しても、感謝の気持ちを持てるようになります。

「人生で起こるどんな問題も、何か大切なことを気付かせてくれるために起こるのです。つまり偶然起こるのではなく、起こるべくして必然的に起こるのです。という事は、自分に解決できない問題は決して起こらないのです。前向きで愛のある取り組みが、後で恩恵をもたらすのです」とB氏は諭しました。

自分がそうであったように、息子も親からの手助けや説教より、「信頼」が欲しかったの

です。この母子の相互理解により、何時しか「いじめ」は解消されました。



さて、この涙するお話しにもたくさん批判があります。中にはユング深層心理学を持ち出し、シンクロニシティ（意味ある偶然の一致）の誤用と難しい批判をする人もいます。うですが、いじめに対する具体的解決が描かれていないと言いう意見が多いようです。確かにその辺が物足りないと言いう意見はわかります。そこで小中学生に限定した「いじめ」について考えて行きたいと思います。

当たり前の話ですが、「いじめ」には虐める者と虐められる者がいます。「虐められる方にも悪い所があるから虐められるんだ」とよく言われますが、それは間違いです。虐められている者に落ち度や悪い所、様々な原因があつたとしても、「虐める行為」に正当性はないからです。つまり「いじめ」をなくすには、虐める者をなくさなければなりません。加害者をなくせば、被害者もなくなります。

では、人はなぜ人を虐めるのか。「いじめ」の構造や実態をここで述べると時間がかかるので省略しますが、ストレスや妬みの発散、支配欲等、精神的に満たされない部分を補うための屈折した行為が「いじめ」です。つまりその根底にあるのは、精神バランスを保つ

ための自己防衛本能です。これを取り除くことはできません。精神破綻者は別にして、これを制御する「理性」、理性を作り出す「教育」が重要なのです。

まずは学校教育ですが、ゆとり教育や個性化教育によって、生徒の自由や自主性が強調され、教師が強い指導力を発揮できないのが現状です。自主性と言う名のもと、未熟な生徒による教室内の秩序が、横並びの対等関係（ネットワーク構造）から、縦並びの上下関係（ヒエラルキー構造）に変化し、そこで反って発言の「自由」が脅かされ、「いじめ」が生じるのです。自主性も大切ですが、やはり教師のリーダーシップが重要となってくるのです。しかし行き過ぎた指導は「体罰」として処分されるので、教師も思う存分指導ができない。少し言い方が悪いですが、「言葉」で理解できない者は「体」で覚えるしかないのです。悪い事を悪い事と体で覚えさせる。大切な事です。何も暴力を肯定している訳ではありません。腕立て伏せなりランニングなり、生徒の体力を考慮して「罰」として与えれば良いのです。もちろん限度を超えてはいけませんが、「体罰」は必要です。

次に家庭教育です。先程のお話の中に「あなたの心を映し出す鏡」と言う表現がありました。これがポイントです。三種の神器の一つであり、「真実」を映し出す鏡は、我々日本人にとって神そのものと言っても過言ではありません。そして親の姿を見て育った子ども

は親を映す鏡です。鏡に向かつて姿を正す。神様に向かつて心を正す。そのような素直な気持ちで子どもに向かう事が大切だと思います。子どもがいじめの加害者か被害者かを見抜く「心の目」は、この素直さによつて養われます。真摯に向き合う親の態度は子どもとの間に強い信頼関係を築きます。あとは「逃げない」「押さえつけない」「諦めない」で根気よく論ずのみです。この努力が第一歩です。外に解決策を求めるのではなく、この一歩を踏み出す事が解決への道を開くのです。

最後に、今お話した家庭教育の第一歩は直ぐにでも踏み出せます。しかし、学校教育の改善は非常に困難なのが現状です。「教育勅語」を柱とする教育、それを実行できる教師の育成、その教師が強い指導力を発揮できる環境。この実現にもやはりはじめの第一歩が必要です。我々一人一人がこの問題を考え始める、それが第一歩だと私は思います。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

宮良ルリ著「私のひめゆり戦記」を読んで

多田利子

この美しい沖縄で、研修できますことを大変嬉しく思います。この地で研修受けるにあたりまして一冊の本を読みました。その本は「私のひめゆり戦記」という、宮良ルリさん（以下、ルリさんと呼ばせていただきます。）が書かれた本です。ルリさんは「ひめゆりの塔の祈念資料館」で館長をしていらつしやいましたが、現在は退職され、今は学芸員として拝観される皆さん方にお話しをされていらつしやるそうです。

実は、昨日「ひめゆりの塔祈念館」へ行つて参りました。ルリさんにはお目にかかれませんでした。が、生き残られたお一人の学芸員さんにお話しをお聞きすることができました。穏やかなお顔をされ、優しいお声で多くの友を失った悲しみをお話しされました。そして最後に「あの戦争が一日でも早く終わつておれば、友達は死なずにすんだのに。」と涙ながらに語ってくれました。

今日はこの本を通して生きるということ、そして命について皆様と一緒に考えていきたい

いと思います。

ルリさんは、あの戦争を体験され、多くの友を失い、また凄まじい経験をされました。この本は命の尊さについて血のにじむような思いが綴られています。

昭和二十年六月十九日、今からちょうど六十六年前ですね。アメリカ軍からひめゆりの塔の壕にガス弾が放り込まれ、職員、生徒四十八名中たった五人の生徒だけが奇跡的に生き残りました。その中の一人がルリさんです。

ルリさんは石垣島で生まれました。私は石垣島へは行ったことはありませんが、自然の美しい所だそうですね。皆さんは行かれたことがありますか。一度ルリさんの故郷へ行ってみたいと思います。

ルリさんは、十四歳の春に石垣島から沖縄本島へ出て来られ、沖縄女子師範学校に入学されました。その学校でのことや寮生活のことが楽しそうに書かれています。きっと今の女子学生達と同じように楽しかったに違いありません。でもその楽しい寮生活は戦争が進むにつれ変わって行きました。ルリさんも十五歳になり、学校生活も勉強どころではなくなってきたのです。学校にまで爆弾が落ちるようになったのです。

爆弾が落ちるとはどのような状態なのだろう。私は戦後生まれなので戦争は知りません。

戦争映画か写真でしか見たことがありません。とても言葉には表せないくらい怖くて恐ろしいだろうなあと思います。そんなにすごい中で親元から離れて十五歳の少女が生きて行く、そのことだけでも大変なことです。

その戦禍の中、ルリさん達女学生は負傷した兵隊さん達の世話をするようになったのです。兵隊さん達の世話は本を読んでいるだけでも目を背けたくなるような話ばかりでした。十五歳の少女に、美しい花の盛りの少女たちに、よくできたなあと思います。でもこれが戦争なんですよ。この時代は沖繩だけでなく日本中が大変な時で、私などがいくら考え想像してもわからないだろうと思います。このように、戦争を経験された方が年々少なくなってきましたが、決して忘れてはいけません。この戦争によってたくさんの方々が亡くなりました。そして六十年以上たつて今の私達の時代があるのですから。

いよいよ最後の時がきました。アメリカ兵が「この壕の中に住民はいませんか。兵隊さんはいませんか。いたら出て来なさい。無駄な抵抗はやめて出て来なさい。男の人は裸になって、女の人はハンカチを持って出て来なさい。出て来ないとこの壕は爆破します。いいですか。」と日本語で繰り返し呼びかけているのです。しかし誰ひとり出る人はいません。この時ルリさんは、こんなジメジメした洞窟の中より太陽がサンサンと降り注ぐ青空

の下で新鮮な空気をおもいきり吸い、お水を腹いっぱい飲んで死にたいと思ったそうです。そして小鳥のように飛べたらと願ったそうです。

・・・・十五歳の女の子ですよ！

間もなく壕の中はものすごい音と共に真っ白い煙が立ちこめ、辺りはまさに生き地獄です。「ガスだー、ガスだー」という声。「水はどこ、水は・・・・」と叫ぶ声。「お父さーん」「お母さーん」「助けてー、苦しいよー」「先生、苦しいよー！殺して！殺して！」ルリさんはこの地獄のような中でも「こんな所で死んでたまるか。生きるんだ。絶対に死なない。こんな洞窟の中で死んでたまるものか。生きるんだ」と自分に言い聞かせていたそうです。・・・・

そして、ルリさんはいつの間にか意識を失い、ガス弾が投げ込まれて三日目に助けられたそうです。すごいですね。十五歳の女の子にどこからこの強さが出てくるのかわかりませんが、きつと故郷の美しい山々や海を思いお父さん、お母さんに会うまでは死んでたまるものかと、強い心でいたのですね。激しい戦禍をくぐりぬけ、壕から壕へ移動をし、食べる物も無く、飲み水といったら濁った泥まじりの水を飲んで、なお最後の最後まで生きるということ、生きようとするその生命の強さを感じずにはいられません。

話は変わりますが、私にも十五歳の孫がいます。今高校一年生の女の子です。ルリさんが凄まじい体験をされたまさに同じ年令です。孫は毎日楽しそうに学校へ行き、ヒップホップという今どきのダンスクラブに入り、高校生活をエンジョイしています。十五歳のピチピチした肌に、しわひとつない綺麗な手、黒々とした長い髪、若さではちきれんばかりです。学校やクラブの様子を楽しそうに、コロコロと笑いながら話をしてくれます。その様子を見ているだけでこちらでも楽しくなります。「私にもこんな頃があったのかな・・・」もちろん遠い昔ですがありました。花の十五歳の頃が。ここにいらつしやる皆さん方にも十五歳の頃が確実にありましたね。遠い昔の方も近い方もいらつしやいますね。

もし、あつてはならないことですが、六十年前のようなことが起きたら、戦争を知らない私達や孫達の世代はどうするでしょうか。何不自由無く過ごしている今の若い人達。最近の若い人達、特に十代の男の子のファッション、見かけた方も多いと思います。ズボンをおしりのところまで下げて、見せパンというパンツをはくのがかっこいいと思っている男の子達。こんな男の子達を見たら「ズボン、ずってるで！」と言いたくなります。この男の子達がズボンをウエストではき、身を正してお国の為、親や兄弟の為に戦うことができるのでしょうか。皆さん方も考えてみて下さい。また毎日のニュースの中では、一番安

全なはずの家庭の中で親が子供を虐待し、子供が親に暴力をふるい、死に至ることもあります。残念なことです。ルリさんの時代には考えられなかったことだと思います。

でも、何があってもルリさんのように、最後の最後まであきらめずに強く生きるということ、命を大切にするということだけは、どんなことがあってもいつの世にも一番大切なことではないでしょうか。命の尊さについて学校の授業や、また家庭の中で話をするということがいかに大切なことか。また子供達に命の尊さについて繰り返し繰り返し話をすることが、家庭内での悲しい事件を少しでも少なくすることにつながって行くのではないのでしょうか。そして私達神職においても、お宮詣りの時やお参りに来られる若いお父さんお母さん達に、神様のご神徳と共に命の尊さについてお話できたらと思っております。

ご静聴有り難うございました。

(大阪府 素盞鳴尊神社 禰宜)

大社

佐伯正則

これをもちまして「素盞鳴神社」の春季例祭滞りなく終了しました。

御祭神、御宮の神様は皆様御承知の様に「素盞鳴尊」と申されます。尊はご自身の御結婚の際にこう、歌に詠んでおられます。

八雲立つ出雲八重垣妻籠みに 八重垣作るその八重垣を

幾重にも垣を廻らして妻である貴女を守りますと言う誓いの歌です。この歌が五七五七七の三十一文字であることから、和歌の嚆矢、最初とされております。又、尊は縁結びで有名な出雲大社の御祭神「大國主大神」大黒様のお父さんの神であるとされている事から、「素盞鳴神社」も縁結びの神社としても位置付けられております。ところが私の長男、二十代目が三十を越しても結婚せず、これでは御宮の御神徳も地に堕ちるのではないかと案じておりましたがこの度、良き伴侶に巡りあい、親として有り難く又、御宮を預かりし者として多いに安堵している所であります。その節は大変お世話になりました。

今日は当神社の御子様の御宮「出雲大社」について少しお話しさせていただきます。出雲大社は神社の中でも特立した地位を占め正式には「いずもおおやしる」と称します。又、①創建年代は四世紀前半、伊勢の神宮よりも、やや早い時期と云われております。又、十月は通常「神無月」とも呼びますが、出雲地方だけは神が存在すると書き「神在月」と旅館のカレンダーにも記されており、歴史とロマンに溢れた里であります。

少し横道にそれますが、大社付近の土産物屋さんには必ず大黒様・恵比寿様、一対の彫り物が並んでおり、必ず大黒様が左、向かって右であり、恵比寿様は右、向かって左に位置されております。これはどう云う事かと申しますと、恵比寿様は大黒様のお子さんの神様であるからです。元々、東洋では「左貴思想」、左の方が右より上位と云う考えがあり、大黒様は上位の左、恵比寿様は下位の右に位置されるわけです。仏教の世界でも例えば「浄土真宗」の仏壇では阿弥陀様が最上位の真ん中、左は開祖の「親鸞聖人」下位の右には中興の祖であり「白骨の御文章」で有名な「蓮如上人」となっております。当然神の道、神道関係の大会では国旗は左、氏子団体旗は右となっております。

しかし、国の関係機関では逆になり、例えば、「全国みどりの愛護のつどい」では、右に国旗、下位の左には県の旗、県旗となっております。西洋では右を左より上位とする為、

②昭和五年に国際的慣例に従いました。

話しは本筋に戻りますと明治二十三年、この大社に新任の外人教師が参拝を願い出ました。「ラファディオ・ハーン」日本名は耳なし芳一を著した「小泉八雲」です。当時の宮司には日本人でさえも容易に近づく事は許されませんでした。その宮司が昇殿参拝さえも許したのでした。感激したハーンは出雲の事、大社の事を本に著しました。その本が後に出雲大社を救う事にあいなります。

彼はその後、東京大学で教鞭を取り、作家生活に裏打ちされた平明な講義に、後任の教授となったあの③「夏目漱石」がハーンと自分を比較して劣等感に苛まれたそうです。日本をこよなく愛したハーンは帰化しました。その八雲を④西洋の人達は「ハーンは土人に成り下がった」と酷評しました。しかし果してそうでありましょうか。

作家の新田次郎氏と藤原ていさんのお子さんで数学者の藤原正彦さんが著した「国家の品格」が現在百六十万部を超える大ベストセラーとなっています。氏はその中で江戸時代末期、国民の識字率、文字が読める割合が五十%を超えていたと書いておられます。

全国に寺小屋が無数にあり、藩の学校があり、江戸だけでも千数百校と云われ、瓦版、即ち「よみうり」を読んでおり、これを社名にした新聞社が現在、全国一の発行部数を誇

っています。当時、最も近代的なロンドンでも二十パーセントです。明治の時に西洋文明による近代化をいち早く消化出来たのも、この基礎教養があったからこそです。他のアジア諸国、アフリカの国々も近代化を目指しましたが、うまくいきませんでした。国民の教養の差がここにあります。

又、精神面においては宣教師の⑤フランシスコザビエルは日本人感をこう、本国に伝えています。「西洋人と違って日本人は貧しい事を恥ずかしがらない。武士は町人より貧しいのに尊敬されている。」貧富と貴賤は無関係というのは今も日本に残る麗しき事、美風です。それに比べ欧米では自分達の我欲を満足させんが為に人間として最も恥ずべき行為、人が人を売り買いする「奴隷制度」を維持し、奴隷が開放されたのはつい最近、明治維新直前の事です。

日本と西洋と、どちらが「野蛮人」でありましょうか。時は流れて昭和二十年、連合国軍は「日本爆撃計画」を作成し、その中には出雲大社も入っていました。しかし、たまたま八雲の著書を読んだ、⑥軍に影響力のあるランドン・ウォーナー博士という方が大社をリストから外してくれました。目に見えない大きな力が働いたのかも知れません。

これに比し日本防衛の最前線である沖縄故に島の形が変わるくらい爆撃を受け、尊い人

命が数多く失われました。私達は戦後の日本は沖縄の御蔭の上に成り立っている事を片時も忘れてはなりません。

この終戦の年に昭和天皇は、こう歌に詠んでおられます。

身はいかになるともいくさどめけり　ただたふれゆく民をおもひて

最近マッカーサー回顧録が新たに米国で発見され、その回顧録の一部を紹介して祭の言葉とします。

私は天皇が面会を申し込んだ時、自身の命乞いに来るのだと思った。だからわざとラフな恰好で応対した。しかし事實は逆であった。私は自分のラフな恰好を恥じ、自身に嫌悪感を憶えた。

こう記されているそうです。

典拠

①、「神道とはなにか」安蘇谷正彦　著

②、「神道いろは」神社新報社より

③、④、「小泉八雲没後百年その神道理解の現代的意義」平川祐弘　著

神社新報社より

⑤、「新編日本史」原書房

⑥、「ヘルンの足跡を訪ねて」高成玲子 著

北日本新聞社より

(富山県 素盞鳴神社 宮司)

男里南組やぐら入魂式

菅野 洋子

これを持ちまして、南組やぐら入魂式を滞りなくお納め申し上げます。

三年前、やぐら新調委員会が発足致しましてまずは寄付集めから始まり、様々なご苦勞を経て、目出度くこの日を迎えられましたこと、心よりお祝いを申し上げます。役員の皆様には感慨も一入と拝察いたします。

さて、南組やぐらは明治十五年以来、実に百三十年振りに井上工務店により新調されました。

私は今日初めて間じかに拝見いたしました。彫刻の立派なこと。ケヤキの香りと共に美しく細やかな彫刻に驚き圧倒されました。

その彫り物の題材として、当男神社の御祭神、五瀬命・神武天皇も彫られていますので、少し由緒をお話させていただきます。

神倭伊波礼毘古命、後の神武天皇と皇兄の五瀬命が国家統治を東方に求めて日向を出発

され、河内の国で長髓彦との戦いによって五瀬命が手に傷を負われ、紀元前三年五月八日、男里の浜に到着されました。当時の村人が傷の手当てをしたことから男神社の創建となり、現在も延々と続いています右座・左座は皆さんもご存知のとおりです。

その後ご一行は、男里を出発されましたが、五瀬命は紀の国竈山で亡くなります。神倭伊波毘古命は熊野から大和を目指して進まれるわけですが、数々の危難が待ち受けて、苦戦しながらも八咫鳥の導きによつて橿原の地で第一代天皇の地位に就かれたのです。

その五瀬命・神武天皇と八咫鳥をはじめ他の彫刻は、二見が浦の夫婦岩・神功皇后応神天皇平産す・弁慶、藤原一騎打ち・素盞鳴命の八岐大蛇退治・天の岩戸・楠公父子 桜井の驛・新田義貞 稲村が崎刀剣の場・野見宿禰 当麻の蹴速と対決・鬼神に勝る巴御前・敦盛呼び戻す熊谷次郎直実・安宅関 勧進帳・醍醐の花見・小栗栖 明智光秀の最期・加藤清正 新野武蔵守との一騎討ち・伴団衛門 榎井の戦い・薄田隼人 徳川本陣討ち入り・敦盛を舞う信長・清洲会議 秀吉登城・本能寺の変・秀吉本陣佐久間の乱入・木村重成 単騎部下を救い出す・真田幸村 徳川本陣討ち入り・石川五右衛門香炉盗り・長短槍試合・藤吉郎初陣 伊藤日向守を討つ・風雲桶狭間 今川義元の最期・賤ヶ嶽の合戦 福島正則一番槍・木村重成 片桐且元長柄堤の決別・後藤又兵衛の勇戦・登竜門 六六変じ

て九九となる・雷神・風神・四獣神・源頼光 酒吞童子退治・大木を引く坂田金時と非常に豪華です。

私などは、硬いケヤキにこれほど細かい彫刻をするのは高度な技術もさることながら、さぞや力と根気の要る事でしようと感じさせられます。

木下彫刻工芸さんには約二十人の彫師がいるのだそうです。岸和田のだんじりは今や全国的に有名となりましたし、ブームになっていきますから、伝統を守っていくために多くの技術師を抱えているのは当然かもしれません、嬉しい気持ちになります。

だんじりと、やぐらも元は祇園祭が発祥なのだそうですが、その違いは、だんじりはこまが四輪で屋根に人が乗ることが出来るほど大きくてしかも彫刻も立派です。一方やぐらはこまが二輪で梶台があり、後ろに太鼓があるのが特徴です。

また同じやぐらでも、走る阪南やぐらに対して泉南やぐらは優雅に練り歩くのを基本としているようで、祭り囃子も共通のものもあるようですが泉南、また男里独自の祭り囃子もあって、他所の多くが失いかけている伝統的なものを色濃く残していると評価をされています。

毎週、集会場で行われる祭り囃子の稽古に、小学生が熱心に通い、お祭りにはやぐらの

後について笛を吹く子、太鼓をたたく子を見ると、郷土芸能が確実に保存継承されていることを実感しますし、若中や若頭の青年団を卒業した年長の若者たちは、やぐらを曳く青年団を支え、子供達が安全に楽しめるようにと、黙々と準備や片づけをしている姿を見ると、村のまつりの中に一つの共同体を見ることが出来ます。

先の未曾有の大震災の後、失われかけていた絆を取り戻すことが、被災者の復興の力になるといわれました。

男里の人達の「祭り」に対する思い、絆は他所のどこにも負けないと私は自負しています。

さて、いよいよ十月の例祭には北組やぐらと共にこの新しい南組やぐらが登場します。仕事の都合でこの村を離れた人達も、年に一度のお祭りにはふるさとに帰ってきます。村中が年に一度氏神様に仕えまつり、その喜びを共にする日です。

このやぐらをはじめ伝統行事を継承していくために、男里郷土芸能保存会をはじめ本日お集まりの皆さんの更なるご活躍をお祈り申し上げましてご挨拶とさせていただきます。

(大阪府 男神社 宮司)

神道―カンナガラノミチ―

鈴木 烈

今回、私がお話させていたたく内容は、自分の体験・経験を元に神道について感じた事、学んだ事を中心に神道のすばらしさをお話させていただきたいと思いますので、宜しくお願い申し上げます。

私は、大学卒業前まで神職という職業は代々受け継がれていく、すなはち、杜家しかないものだと思っていました。出身地が三重県という事もあり、子供の頃から伊勢神宮にお参りに行ったり、初詣には氏神様へのお参りには必ず行っておりましたが、神社との関わりというものは、身近にはそのような程度でした。

私を神道また、神職の道へ目指そうと思わせてくれたキッカケは、大学生でやり始めた「合気道」という武道でした。

合気道は不世出の天才武道家植芝盛平先生が、日本古来の各流各派の武術の精髓を取り入れ、それに先生独自の工夫を加えて、近代武道として集大成された武道です。その根幹

には、「大東流合気術」があると言われています。合気術は世に知られぬ門外不出の極秘技でありましたが、明治になって、武田惣角先生が初めて一般に公開して、ようやく世に知られるようになりました。その弟子が植芝盛平先生で、数々の求道辛酸の道を経て一大開眼され和の武道、合気道を確立されたと言われています。植芝先生は、「合気道は、天地自然と融合し、その則に従って行う和の武道である。」と説かれています。合気道には、自然の動きに逆らうような無理な動き、無駄な動きはありません。相手が引けばその動きを遮らずそれに従い相手の体勢を崩すように誘導していきます。常に相手と同化していこうとする性格こそ、合気道が和の武道と言われ、他人と協調していこうとする精神にも繋がっています。

合気道には勝ち負けがありません。日々鍛錬によって人を人間本来の姿に立ち返らせ、自然に即応した人間を作ることが目的とされ、稽古を積み重ねれば技が冴えるばかりか、その人の持つて生まれた魅力をも引き出す事が出来ると言われています。

自然との一体化、融合するという理念を合気道から学び、茨城県笠間市に合気道神社があるくらいですから、神道と合気道には通ずるところを感じたので、この世界に飛び込んできた訳でございます。

この自然との一体化、融合するという考え方は神道にとって大事な事だと考えます。神道は今でさえ宗教として粹にくくられています。私は日本古来からある日本の文化的なものであり、自然を媒介として、神と人が結ばれた日本固有の民族の「心」だと考えています。

神道には、祖霊崇拜が強いため、古いものほど尊ばれ、日本は「八百万の神々」としてすべてのものに神様が宿ると考えられています。日本の神というのも、その存在の仕方、機能も自由多彩です。それは、唯一絶対神のいないことによる自由さと開放性といってもいいのではないのでしょうか。

キリスト教は、ナザレのイエスを救世主とし、新約聖書を基準とし、アガペーを説く宗教。イスラム教はアッラーフを信仰し、ムハンマドを通じて人々に下したとされるクルアーン二の教えを説く宗教。

ユダヤ教はヤハウェを神とし、メシアを中心とする宗教。すべて一神教、唯一神に対し、神道は多神教なのです。

神道は天地開闢のあと、永遠に進歩発展していく世界観があります。神を祀ることを忘れぬ限り、永遠に繁栄します。「人は祖に基づき、祖は神に基づく」と言われ、人の祖先の

また祖先そのまた祖先は、神様であり、人は神の子、喜びの子であると考えられています。労働も出産も神道では喜びであり、神道の神々はどんどん子供を産み、神が神を生んでどんどん増えていくと考えられています。

それに対し、キリスト教などの世界観には、最後の審判があるように、始まりと終わりががあります。アダムとイブの罪ゆえに罰として労働の苦しみを男性に、出産の苦しみを女性に与えられたと考えられています。又、罪や穢れは褌祓いで清めれば問題ないとされるのに対し、一生原罪を背負って生きていかなくてはならないキリスト教とは違うところです。

仏教も五感で捉える現実を「仮」のものであるように、終末思想があります。中国の思想を例えるなら、泥水で澱んだ所にどんな綺麗な花が咲いても、その花は汚いものだという考え方なのに対し、どんなに澱んだ所でも、咲く花は綺麗ではないか。その花そのものをほめなければならぬという考え方が日本の思想なのであります。

そういった考え方を持っていたのが本居宣長であり、人間は塩や醤油やいろんな物を味わう事で初めて砂糖の甘さがわかる。古事記や日本書紀から学び、日本古来の「大和心」を発見したと言われています。西行法師も伊勢神宮に訪れた際、胸を打たれ「何事のおは

しますかしらねどもかたじけなさになみだこぼるる」と歌を詠んでいます。すなはち、大和心Ⅱ神道だと私は感じています。

建造物をとってみても、ギリシャのパルテノン神殿、イタリアのコロッセウムなどは、自然に打ち勝とうとする考え方なので、石やコンクリートで出来ている対自然なのに対し、二十年に一度行われる式年遷宮のように自然と共に生きるといふものの考え方、甦りの精神の考え方は即自然なのであります。

今回の東北・東日本大震災での甚大なる被害を受けましたが、暴動はほぼ見受けられませんでした。ニュースなどで他国の映像を見ていますと、スーパーマーケットから商品を盗んだり、銀行からお金を盗んだり、人を殺したりといった暴動が必ず見受けられます。こういったことが起こりにくいのも、日本人である感謝の気持ち、この世に生きているのではなく、生かされているのだという気持ちである「大和心」があるからだと思えます。

植芝先生は、「天地自然には天地自然の気がある。天地自然の氣に自分の氣を合わせて一体となり、自然の運行に逆らわないで自然の流れのままに従い、相手の動きに自分を同化させて相手を制す。」と言っておられます。自然と一体になることで己が持っている以上の

力が出せるのです。それだけ自然というものは偉大であるということなのです。

日本古来から伝わる「和」の精神、「神道」という日本人の「大和心」の原点を忘れかけられている今、私は見直すべきではないかと強く心の中で思っているのです。

私をこの世界に導いてくれた合気道は、老若男女問わず出来る武道です。皆様も始めていただいたら何か新しい世界観が生まれるのではないのでしょうか。

(京都府 松尾大社 権禰直)

あなたの笑顔を

佐々木美津子

三月十一日午後二時四十六分に発生した激しい横揺れの地震、突然家の中の本が、お人形が、屋根の瓦が音をたてて落ちたのです。

何分経ったでしょうか、神社の様子を見に外に出たその時です。「津波だ、津波が来ました。皆さん高台に逃げて下さい。三メートル、いやそれ以上の波・・・」と言ったきり放送が切れたのです。高さ十メートル以上の黒い波が音を立てて襲い、湾内の養殖施設や漁船をのみこみ陸地に駆け上がった波は、木造の家屋を次々となぎ倒し山の中程まで上り、波が引いた市街地には、がれきだけが残り、道路は寸断され、地区の町がそれぞれに孤立し、想像を絶する壊滅状態に誰もが言葉を失ったのです。まさかここまで・・・まさかここまででは来ないだろうと五十年前のチリ津波を経験した人々は、誰しもがそう思ったに違いありません。あのときの津波をもとに防波堤を高くし、時々起こる地震、津波を防いできた防波堤を信じ、心のどこかに油断が生じていたのです。陸前高田市の中心部をはじめ海沿

いの町が壊滅的に破壊し、死者不明者二千二百一名と・・・まして海から六キロメートルも離れた我町矢作まで津波が来るなんて誰が想像したでしょうか。

あの大地震の日は寒く夕方雪の散らつく岩手県でした。幸い津波の被害が少なかった我町に三時間も掛けて山越え避難してきた隣町の人々、ただ一本残った橋を頼りに避難して来た人々、着のみのまま、そして水に濡れたままの人々、年離れた母の手を引き、そして背には幼な子を背負い・・・、またたく間に小学校の体育館は避難してきた人々でいっぱいになりました。電気が消え暖をとることも出来ず寒さと恐ろしさで震える人が多く、家にある毛布やタオルそしてセーター、ズボン靴下で身を包ませ、米や野菜を持ちよりその夜から炊き出しをはじめたのです。

泣き叫ぶ幼な子に「おいしいおにぎり食べてね。」となくさめ寒さに震えるおじいちゃんには温かいみそ汁を・・・くる日もくる日も避難所を行ったり来たり、食事作りや老人の世話等を。私自身、当神社の総代さんはじめ氏子さんの家が流されたり床上浸水で被害にあわれた方々、氏子さんが亡くなったり、ましてや多くの教え子、知人、友人が亡くなりどうすることも出来ず、これでいいのだろうか、これでいいのだろうかと途方にくれる毎日でした。悩みの多い日を送ってりました。そんな時です。大阪の原先生からはがきが

十日目に届いたのです。びっくりしました。

ご無事でしょうか・・・

あなたの笑顔で頑張つて下さい・・・

神様が守って下さいますよ。

どうか届きますようにと、書き添えて、

うれしかったです。飛びはねる程うれしかったです。遠くから心配してくれる人が居ると思うと勇気がわいてきました。そうだ私に出来ること、それは被災し傷ついている人々が今日よりも明日、明日よりも明後日と、日毎に明るくなるように幸せになれるように、笑顔で一人一人のお話を聞き、少しでも心の悩みや恐怖を取り除き、少しでも明るくしてあげたい、と翌日から被害の多かった高田、米崎地区の避難所へ足を運びました。がれきの中を・・・胸の痛くなるような街の中を

「先生ご無事で」と手を握るおばあさん

「お父さんが帰らないの」と胸の中で泣きくずれる女の子

一緒に逃げて来たのにすぐ後ろで波にさらわれたご主人のこと

避難していた屋上のすぐ下を妻と子供が流れていくのを見ていただけで助けることが出来なかったと泣く教え子

流れてきた板につかまり助かったという青年

紙一重で『生』と『死』をわけた津波・・・

逃げまどう人々の様子が・・・。

母をそして父を亡くした幼な子

妻や夫を、そして職場の同僚、友を

水門を閉めに行った消防団員

避難誘導した警察や地域のリーダー

尊い命を奪った津波

大事な大事な財産を全てのみ込んだ津波

夢であってほしい夢であってほしいと思うけれど・・・そんな悲しみの中、三百五十年も
の間高田の街や田畑を守ってきた七万本の松の木、大津波後奇跡的に助かった一本の松その
の生命力と幸運に感動し復興のシンボルとして被災者を勇気づけています。

又、北は北海道、南は沖縄と全国から多くの救援資金、物資を頂きました。警察、消防、

自衛隊をはじめ多くのボランティアの方々が、悪臭とがれきの中、太陽の照り輝く日、どしゃぶりの雨の中、一生懸命に働くその姿に勇氣と感動を頂きました。

医療チームのお医者さん看護師の方々は治療に心のケアに優しく接して下さいました。

東日本大震災において日本全国の方々から強い絆と真心を頂き感謝の気持ちでいっぱいです。

天皇皇后両陛下様が被災地を見舞われ励ましのお言葉をかけて歩かれますお姿、

「被災した人々が決して希望を捨てることなく、身体を大切に明日からの日々を生き抜いてくれるように」とおっしゃった天皇陛下様のお言葉をしっかりと受け止めて復興を目指し一歩一歩力強く歩んでいきたいと思っています。

(岩手県 天照御祖神社 宮司)

夏越の大祓

與 那 嶺 健

皆さんこんにちは、沖縄県宜野湾市に鎮座します、普天満宮に奉職しております與那嶺健と申します。

普天満宮は別称普天満権現、琉球八社のひとつで創建はその昔、普天満の洞窟に琉球古神道神を祀ったことに始まり、一四五〇年頃、熊野権現を合祀したと伝えられております。現在普天満宮では年間七十六回の祭祀がとりおこなわれておりますが、六月三十日に斎行される夏越の大祓についてお話させていただきます。

皆様ご承知の事かと思いますが、まず大祓とは大宝二年大宝律令によって宮中の正式な年中行事に定められ、官僚が集って大祓詞を奉読、国民の罪穢れを祓ったことにはじまり、一時は行われなくなりましたが、江戸時代に再開され、明治四年、明治新政府により「大祓」の旧儀の再興が命じられ、現在のように全国の神社で行われるようになったようであります。日々の生活の中で気付かぬうちに心身についた罪穢れを祓い清めて、無病息災を

祈り、祓主の宣読する大祓詞をお受け頂き、また人形の形代に息を吹きかけ、罪穢れを負つてもらい、さらに切麻により心身を祓い清める神事で、神職八名にて奉仕しております。引き続き斎行される茅輪神事とは、神代の昔、素戔鳴尊が南海の方へお出かけになる時、土民の蘇民将来、巨旦将来という兄弟に宿を求めたら、弟の巨旦将来は裕福な身であつたにも拘らず宿を拒んだのに対して、貧しい身であつた兄の蘇民将来は尊を粟柄で以つて座を設け、粟飯を饗して御待遇もうしあげました、その後、年を経て尊は再び蘇民将来の家を訪ね「もし天下に悪疫が流行したなら茅を以つて輪を作り、これを腰につけておけば免れるであろう」と教え給いました、この故事に基づき蘇民将来と書いてこれを門口に張れば災厄を免れると言う信仰が生まれ、茅輪を作り和歌を唱えながらくぐりぬける祓の神事となつており、唱える和歌は

一、水無月の夏越の祓する人は千歳の命のぶというなり

一、思う事みなつきねとて麻の葉をきりにきりても祓いつるかな

一、千早振る神の御前に祓せば祈れる事の叶わぬはなし

一、蘇民将来、蘇民将来

この和歌と唱え言葉を繰り返し唱えながら茅輪を廻ります。

くぐり方は

先ず正面から一礼しまして、茅輪をくぐりぬけ左へ廻り、

次いで正面よりくぐり抜け右へ廻り、

次いで正面よりくぐり抜け左へ廻り所定の場所にもどり、引き続き洞窟へ向かいます。茅輪は神職自ら茅を刈り込み直径二メートルの茅輪を自ら製作して、古儀に則り神事は執り行われております。

洞窟くぐり神事とは、奥宮が鎮座します「普天満宮洞穴」全長二八〇メートルの洞窟へ参入、奥宮参拝の後、裏山へ通じる洞口よりくぐり抜けることによつて身が清められ、普天満宮の大神様の御神徳を頂き祈願が成就すると伝えられ、また神様の胎内をくぐりぬけ、再生、生まれ変わりを意味するの神事であります、現在では六月三十日の大祓式でのみ洞内をくぐる事ができます。

全ての神事を終えますと、多くの皆様が競つて茅輪から茅を抜き取り、数本の茅を結び作る、沖縄独特の厄祓い御守り「サン」を自ら作り持ち帰っております。

以上の次第で式は進行されており、全ての参列者が神事を終えるには約一時間ほど時間を要し、参列者増加に伴い、撤下品授与係り、駐車場整理係、式後の清掃係、また音響設

備等を専門業者、または臨時奉仕者の協力を頂き、滞る事無く式が行えるように対応しております。

多くの皆様の御参列を頂く大祓式ですが、以前は三十人程の参列者のみで斎行されていた時期もあり、どのような推移を辿って現在のように多くの皆様の御参列をいただく大祓になってきたかを説明させていただきます。

それではまず参列者数、申し込み件数等の推移状況を説明させていただきます。

平成元年 約三十人程、

平成十年 二二〇名、

平成十五年 五七四名、

平成二十年 参列七〇九名、申し込み五九六件、新規申し込み一七二名

平成二十二年 九四三名、申し込み件数七七七件、新規申し込み二八二件

の参列となっております。

補足をさせていただきますと、平成十年には、これまでの大祓に加え、新に茅輪神事、洞窟くぐりを斎行されております。平成十七年、御社殿造営工事期間中で、大祓のみと縮小して斎行された為、その年に限り参列者は減少しましたが、翌年には御社殿御造営、周

辺整備を終え、多くの皆様へ対応出来るようになっております。

平成二十二年には、申し込み件数で七七七件、そのうち事前申し込みまたは郵送での申し込み件数は二七〇件、申込者数で三〇〇人以上の申し込みを戴いております。

各年ごとの新規申し込み者数は、全体の割合から約三割ほどで推移しており七割近くの方が前年度も式へ参列戴いた崇敬者の皆様となっております。

年毎に参列者増加してきた要因とは、故実に基づき厳かに肅々と行われる神事で罪穢れを祓い清め無病息災を祈り、また昨今ではパワースポット、力のみなざる場所からパワー、または癒しを頂くとして全国様々な場所が取り上げられ話題になっておりますが、古来より琉球古神道神を祀ったことに始まる普天満宮洞窟をくぐりぬける神事により、神様の胎内をくぐり、再生され生まれ変わり、御神徳を頂く、すなわち昨今の流行の言葉でもうしあげますとパワーを頂く、または癒しを頂くということが広く受け入れられた事など、様々な要因が重なり、多くの皆様の御参列をいただくようになったのではないでしうか。今後の課題としては、まず参列者スペース、駐車場共に飽和状態の為、対応策を検討、雑踏での事故防止、雨天時の対応策等の問題も抱えておりますが、より多くの皆様にご利用からも御参列して戴き普天満宮の大神様の御神徳により皆様の無病息災、日々健やかに笑顔

の絶えない生活をおくっていただけるよう神明奉仕に励んでいきたいと思ひます。
これをもちまして「普天満宮、夏越の大祓」の紹介とさせていただきます。

(沖縄県 普天満宮 権禰宜)

沖縄県護国神社の由緒について

高 良 奈 緒 矢

当神社はもと招魂社と称し昭和十一年に建立され日清日露戦争以降の国難に殉ぜられた御英霊をお祀りしており昭和十五年七月一日、内務省令を以て沖縄県護国神社となった。しかし、昭和二十年四月沖縄に対する米軍の上陸戦闘のために戦災を被り社務所を残し本殿、拝殿が焼失してしまい、昭和三十四年に「靖國神社奉賛会沖縄地方本部」により仮社殿が建立される前は米軍の統治下という特殊な事情（当時米国の陸軍中将が琉球高等弁務官であったことなど）また、境内地自体が那覇市の所有地にされてしまっており、返還も容易ではなかったこと等、数々の問題があり、なかなか復興できないままであった。

ちなみに仮社殿が建立されたこの時点では賃借契約であり正式返還は昭和五十六年のことであった。

そうした厳しい事情の中でも、沖縄県民の神社復興への思いは強く、琉球政府が自治法違反として拒否した奉納金の献金を那覇市の担当課長が粘り強く交渉を続け補助金を降ろ

させたことや、当時、地元オリオンビールの会長の具志堅氏に至っては具志堅グループとして三万三千ドルを寄付したこと（正確な数字は出せないが現在価値で約一億五千万相当になる）その他にも沢山の企業が奉賛金を奉納し、そして何より一世帯五セント募金として県内の各家庭、また一セント募金として沖縄県の全小中学校生徒が神社復興の為の募金活動に協力するほどであった。

復興後の例大祭には琉球政府主席（県知事） 立法院議長（県会議長）等当時の沖縄の要人が例大祭に参列するほどに本土復帰前までは沖縄県の慰霊の中心であった。

そして、県外からも多くの奉納金があり、全国県知事会、各県のご遺族の方々、神社本庁など、日本全国から現在価値で約一億円の奉納があった。

そう思った思いが実り昭和四十年四月に現在の本殿、拝殿が完成した。

沖縄県の本土復帰が昭和四十七年であるから、この時はまだアメリカの統治下であり、日本国憲法が適用されない為、神社名（団体名）も、昭和三十二年の靖国神社奉賛会沖縄地方本部から発展し、昭和三十五年には財団法人沖縄戦没者慰霊奉賛会（後の平和祈念財団）となり、それが分離し昭和三十七年には社団法人沖縄県護国神社復興期成会を設立。また昭和四十二年にはそれを解散し、財団法人沖縄県護国神社奉賛会となるといったよう

に、何度も名称が変わってきた。

正式に沖縄県護国神社となったのは、復帰後の昭和四十八年沖縄県知事より宗教法人の認証を受けてからのことである。

御祭神は各県の護国神社と同じように、郷土関係靖國の御英靈を始め、先の大戦にて郷土の為敢然と立ち向かわれた郷土出身軍人軍属、また当神社の特徴的などころになるが、沖縄方面作戦に於いて殉ぜられた本土出身の御英靈を合祀するほか、戦争の犠牲となられた一般住民、遭難学童及び文官関係戦没者の御靈をお祀り申しあげており、合せて十七万七千九百十二柱にもなる。先の大戦で県民の四分の一がお亡くなりになって居る為、現県民の親類の誰かは祀られているはずだろう。

しかし、現在は政教分離の影響で、神社復興当初とは違い、多くの県民は平和記念公園が沖縄の慰霊の中心と考えており当神社に参拝される方であっても御祭神がわからないという人も多い。

それにも関わらず、正月の初詣の参拝者は毎年増えており、平成二十三年度は二十五万人にもなった。これも御英靈のお力であり、遺族である沖縄県民が無意識の内に呼ばれているのではと感じている。

そうした中で、当神社は平成二十二年十二月、沖縄の企業、ご遺族、崇敬者の方々、各県の皆様方のご協力により、御創建七十五年記念事業の一環として、多くの参拝者が多目的に利用できる、新社務所を竣工した。更なる御神徳の発揚の為ご参拝される方々に、沖縄県護国神社のことを知ってもらい参拝される方々とのつながりを強くして行けるよう、努力していきたい。

(沖縄県 沖縄県護国神社 権瀬宜補)

盗られるな尖閣諸島

石 塚 智 康

「尖閣諸島は日本固有の領土である」

去る三月十一日午後二時四十六分に発生しました、東北地方太平洋沖大地震、大津波により被災された方、また原発事故で避難を強いられている多くの方々に心からお見舞いを申し上げます。

又未曾有の災害により犠牲となられた方々には哀悼の意を表し、ご遺族の上に慰めがありますようお願いいたします。

祈年祭に併せて、一刻も早い復興祈願祭を執り行ったところです。

さて、ここ南の島沖縄の地です。

震災以前から政府の対応に心配と立腹とが混ざっていることをお話し、皆様にも理解と共感を抱いていただきたいと思います。

昨年九月七日、沖縄尖閣諸島久場島沖の領海を侵犯した中国漁船が、取り締まりにあた

つた海上保安庁の巡視船に体当たりして故意に追突行為を繰り返して、公務執行妨害で船長が逮捕されたことは皆様記憶に新しいことと思います。

これに対し、中国政府は船長の無条件釈放を要求し、理不尽な圧力を掛けてきたため、日本政府は那覇地方検察庁に丸投げして、取調べ中の船長を処分保留のまま釈放しました。このことは尖閣諸島及び周辺海域の領有権を主張し出してきた中国に対して、日本が尖閣諸島の領有権を放棄したとも受け止められる誤認のメッセージを、世界中に発したに等しいことです。

そしてこのことに至った事実を日本政府は、誰一人として責任を取ろうとせず知らん顔をして平然としていることは情けない限りです。

それは現政権が中国、中国といつて中国の言うことは何でも聞こうという姿の現れです。日本政府は悪いことは悪い、と毅然とした態度を取らなければなりません。

尖閣諸島は明治以来我が国が領有し、一貫して実効支配を続けてきた日本固有の領土であります。

このことは過去において中国も認めてきました。

古い本によれば、大正八年に当時の中華民国政府から島民に寄せられた感謝状には、尖

閣は日本領であることが明記されているそうです。

また中国で昭和三十五年発行の世界地図帳にも尖閣諸島は日本領であると記載されており、正に日本固有の領土であることは中国がはっきり認めているところです。

またアメリカ政府も尖閣諸島が日本国の施政下にあることを繰り返し明言しています。

ではなぜ最近になって中国政府がこの認識をへし曲げて尖閣諸島は中国領だと言いつたのか歴史的に遡ってみましょう。

それは一九六九年尖閣諸島海域に膨大な海底資源があることが判ったからです。

でも直ぐに奪いに来たわけではありません。

この海底資源発見当時には、中国政府は自分たちの生きている時代には資源の權益を手にすることは出来ないものと考えていたそうです。でもこのままでは資源不足で、やがては行き詰まると危機感を抱いていて、国際法を破ってでも資源獲得に頭を使い、世界中の資源を買いあさってきたのです。

今回の強行事件は、普天間基地問題で日米同盟が揺らいでいるからこの際に、という見方も要因の一つと言われています。

原油はもう枯れ始めています。シリア政府は近い将来油は一滴も出なくなると言ってい

ます。

では尖閣海底資源とはどのようなものでしょうか。

油田やガス田でもありません。最良の埋蔵資源といわれる『メタンハイドレート』という資源です。海底で地震が起きる処にできる、地球温暖化への影響が少なく燃焼効率の高い埋蔵資源だそうです。これが中東諸国には出ないそうです。

出るのは尖閣諸島や千島列島周辺が宝庫だそうです。

竹島周辺にも出るので、韓国がここを実効支配しているのはこの『メタンハイドレート』が欲しいからでもあるようです。

この資源獲得のために、中国、韓国、ロシアも子々孫々資源獲得競争に勝つために領土取得にこだわっているのです。

だから日本も、固有領土だから守るというのだけではなく、少資源国を守るためにも外国に盗られてはならないのです。

「尖閣だけでなく先島諸島も中国のものだ」更に最近では「沖縄諸島も元々中国の領土だった。だから中国が支配するのは当たり前だ。」と言い出した。

いまや東シナ海から沖縄、尖閣の海底は中国の原子力潜水艦が深く潜って調べています。

日本には原子力潜水艦はありません。

みなさん考えてみてください。

沖縄から尖閣諸島、先島諸島は台湾に含めて中国の属国になる可能性も否定できなくなる日が来るかもしれません。

領土を守るために政府や国会議員は現場を見よう、現場の声を聞こうという姿が見られていますでしょうか？

今すぐに日本政府は尖閣諸島、先島諸島の現地調査を行い、

1 船の安全航行と漁民の安全操業ができるように、灯台や見張り塔を建て避難港を整備すること。

2 尖閣諸島、先島諸島で中国の大漁船団が悪質違法操業しているのを拿捕可能にする関係法令を整備すること。

3 領土領海を守るために自衛隊に領域警備の法律を成立させること。

現政権下では海上自衛隊、海上保安庁も不法行為があっても武力を以って取り締まる法令がないからです。そうしないと日本の領土領海は簡単に盗られてしまいます。

東日本大震災と東電原発事故で国内は大変ですが、これも早く復興計画を建てて着実に

進めなければなりません。いまの政府は後手後手になっていて安心感が感じられません。こういう弱い政権下の時に乗じて外国は簡単に領土を盗ってしまいます。

今回の衝突事件は一過性のものではないと思います。

この日本政府の弱さにあたふたに乗じて、これから中国は先島諸島、尖閣諸島、沖縄諸島を領有するために更なる高圧的行動をとってくることは間違いないと思われます。

我が国政府がもっと強く育って、領土領海問題について毅然たる態度を取り、領土領海保守に本腰を入れて欲しいものです。

沖縄の人々は元より日本中の人々が、中国の属国になることを望んでいないと思います。そのためにも国民挙げて、心一つにあわせ団結し、意識を強く持ち気運を盛り上げる必要だと思っています。

以上私の立腹と心配していることをお話いたしました。

何卒ご理解いただきますようお願い申し上げます。

ありがとうございます。

祇園祭について

花房正典

祇園祭は、貞観年中（八五九～八七七）国内に災害や疫病が流行した際、神泉苑という場所に六十六本の鉾を立てて、祇園社（八坂神社）の神を祀り洛中の男児が祇園社の神輿を送り、天変地異や災厄の除去を祈ったのに由来します。当初立てられた鉾六十六という数は、当時の全国六十六か国に因むものであります。すなわち京都だけではなく、日本国中の天変地異や災厄の除去を祇園社の神に祈念したものであります。

祇園祭は、七月一日各町内において神事の打ち合わせ等を行う吉符入きつぷいりから始まり、三十一日の八坂神社境内の疫神社にて執り行われる疫神社夏越祭まで、一ヶ月間様々な神事や行事が執り行われます。毎年テレビ等でクローズアップされるのは、十七日の山鉾巡行であります。祭りの中心は当社の三基の神輿、中御座なかござ（素戔鳴尊）・東御座（櫛稲田姫命）・西御座（八柱御子神）に係わる神事であると言えます。

初期の祇園祭は、陰暦の六月七日の神輿迎えと、十四日の神送りがその眼目でありました。

その名残をとどめているのが、現在七月十日と二十八日に執り行われている神輿洗式みこしらひしきであると考えられます。

十日の神輿洗式は結論を申し上げますと、当社にございます三基の神輿の内、中御座神輿一基のみを担ぎ出し、午後八時に四条大橋上にて鴨川の水にて神輿を清めるといふ神事でありますが、他の神事や行事も合わせり神輿洗式が執り行われております。

午前十時に「神用水清祓式」しんようすいきよはらいしきが四条大橋上並びに宮川堤にて執り行われます。この神事は、四条大橋上にて鴨川の水を汲み上げ、宮川堤に運びこの水を清めます。そして、午後四時三十分から「お迎提灯」むかえちようちんという提灯行列が八坂神社を出発し、河原町四条から市役所を経由し、寺町通を下がり四条通を東に向かい八坂神社に戻り、神輿洗の神輿を石段下にて各々が手提灯を持ちお迎えする行事があります。

御本社においては、午後六時に「神輿洗奉告祭」が執り行われ、午後七時大松明に御神火を点火します。その大松明が四条大橋上まで進み八坂神社へと戻ってきます。これは神輿洗の神輿が通る道を清めるものであると考えられます。その大松明が神社へ戻り、午後七時三十分頃中御座神輿が当社を発輿し、神幸道から東大路通を通り四条通を進みます。そして午後八時に四条大橋上に至り、神輿洗式が執り行われます。その際「神用水清祓式」

において清められた神用水が使用され、その水しぶきによって神輿を清めます。

しかしながら、神輿を清めるのであれば、何故三基の神輿全てを清めないのかという疑問が生じるかと存じます。昔、鴨川はこの時季になりますと度々氾濫し、洪水を起こし伝染病をもたらす原因となっておりました。それは、ご存じのように京都は盆地で、東・西・北の三方を山に囲まれており、北が高くて南が低い地形となっており、従つて北から南に川は流れている訳で、現在は埋め立てられておりますが、当時南には巨椋池おぐらという大きな溜め池があり、そこへ生活用水等が流れ込むという、一つの浄化装置の様な仕組みになっていたのです。

現在でも京都市内を流れる鴨川では鮎が釣れます。これは水が綺麗であるということの表れで、水が綺麗であるということは、水源地が近いということでもあります。北山から流れ出る水が豊富で非常に清らかであり、汚水を巨椋池へ流してくれるのです。

しかし、梅雨の時季など一度水源地に長雨が降ると、一転して市内の川は度々氾濫いたしました。梅雨の時季ということもあり、当時は冷蔵庫もございませんので、非常に食べ物が腐りやすかった上、市中に汚水が流れ出る最悪の状態になることが多々ありました。そのような状況の中で必然的に流行ったのが伝染病であります。これを当時の人々は疫病

と呼んでおりました。これを鎮めるために、この川の神様をお慰めし、災厄の除去を祈るのが祇園祭の本質であると考えられます。

神輿洗式の際、神職が神用水にて神輿をお清めすると同時に、鴨川の神様に神輿にお乗りいただき、八坂神社へとお迎えするのです。ですから三基の神輿の内、主祭神である素戔鳴尊のお乗りになる中御座神輿が四条大橋まで出向くのです。そして、神輿に乗られた川の神様を、手提灯を持ち歓迎するのがお迎提灯なのであります。

これとは逆に、川の神様にお帰りいただく神事が、提灯行列はございませんが、二十一日同様に執り行われる神輿洗式であります。このように、祇園祭は七月一日から三十一日まで様々な神事や行事が執行されますが、神輿洗式のようにいくつかの神事行事が合わさりひとつの目的を果たすように、一ヶ月間全てが合わさり祇園祭なのであります。

一一〇〇年以上前から脈々と受け継がれてきている祇園祭の神事や行事は、どんどん焼けによる山鉾の焼失、また明治維新による祭祀組織の変化のため、神輿渡御や山鉾巡行は存亡の危機に陥ったこともありました。

しかしながら、明治八年に当時の教部省より、祭政一致の神社奉賛組織として発足が許可された清々講社せいせいこうしゃという氏子組織の努力、また氏子区域内区長など行政の協力の結果、祇

園祭を維持し今日に至っているのです。

(京都府 八坂神社 権禰宜)

宝物

二ノ宮雅子

皆様の宝物は何ですか。そして皆様は自分の国が好きですか。

太陽といえは沖縄。神様の懐のように広がる澄んだ大空と、それを映し出す鏡のような美しい海。琉球の昔から食文化もとても発達しています。その中で生きる長寿の沖縄人は、心も身体も頗る丈夫なのです。

苦難の歴史は数ありましたが、明るい笑顔なのです。これは幾度となく耐え難きを耐え抜いた人々の「優しさの文化」からきているのではないのでしょうか。沖縄の文化といわれる「優しさの文化」とは、相手と同じ位置に立つ。可哀想、という上から目線ではなく、その思いや痛みを、「分かち合う」という文化なのだそうです。

例えば、肝苦りさ（ちむぐりさ）：胸が痛いという表現が沖縄にはあります。言い伝えの一つとして、「他人殺さってん寝んだりしが、他人殺ちえ寝んだらん。」（ちゆくるさってんねんだりしが、ちゆくるちえねんだらん）訳は：他人に痛めつけられても寝る事はでき

るが、他人を痛めつけては寝ることはできない。という意味です。これも険しい道を歩んだ中から芽生えた沖縄の「崇高なる人間」としての証なのです。

皆様もご存じの通り太平洋戦争末期、沖縄では激戦が繰り広げられ、米軍が本島上陸するに先立って一週間、艦砲射撃を行いました。その数は、（アメリカ資料によりますが）四月一日だけでも五インチ砲三万三千七百五十発、六インチ砲三千発、八インチ砲二千百発、十四インチ砲千三百二十五発、ロケット砲三万三千発、迫撃弾二千二百発、凡そ畳一畳に一発の割合で打ち込まれています。

首里には、沖縄守備軍司令部陣地とその近くにあった沖縄師範学校全職員生徒で掘った五百人程収容できる壕があり、この壕は安政の大獄で犠牲となられた吉田松陰先生の死を前にして書き留めた留魂録にちなんで、留魂壕と命名されていたそうです。そしてこの壕を掘った人々はその後、球一〇一五八部隊付鉄血勤皇師範隊へと編成されるのです。

鉄血勤皇隊とは師範学校や旧中学校等、十三歳〜十七歳までの日本軍史上初の少年兵の事で女学生のひめゆり部隊と対をなし、学徒動員は沖縄戦での特徴でもあります。皆琉球の歴史と自然の中で育った子供たちばかりでした。

はじめ、壕の前には、樹齢の古い赤木が生い茂って空も見とおせない程でありましたが、

先の射撃によりすっかり裸にされ、なぎ倒され、敵艦船からは陸地が丸見えとなっていたそうです。陸海空相応しての米軍の猛撃は日本軍及び民間人も含め、摩文仁へと追いつめて行きます。

とうとう六月二十三日、軍司令官と参謀長は自決となります。ところがです。六月十九日の日、軍司令官は「各部隊は各地における生存者中、上級者之を指揮し最後まで敢闘し、悠久の大義に生くべし。」との軍命令を出していました。命令は、『一切の降伏を許さず死ぬまで戦え』との意味でした。純真な子供たちは、摩文仁へ来ても国の為と大和心そのものを発揮し、力尽きて行くのです。

沖縄戦終結宣言（アメリカ軍による）七月二日ですが、その後も米軍は空撃を続け日本軍も抵抗をし、九月七日、降伏調印し沖縄戦は公式に終結したのです。

本土の方では、八月六日広島原爆投下、九日長崎原爆投下、十五日終戦となります。ちなみに国際的には九月二日が敗戦記念日となっている様です。

戦争は、国家と国家の衝突、地球の代表である人間は避けようと思えば避けられると思うのです。

今年三月におきた東北太平洋沖地震は、自然の猛威を私達人間に教えました。

その時の天皇陛下のお言葉の中に、

「深く心を痛めています」「被災者のこれからの苦難の日々を私達皆が様々な形で少しでも多く、分かち合つて、行く事が大切であろうかと思ひます」「国民一人ひとりが被災した各地域の上にこれからも長く心を寄せ…」という言霊。天皇皇后両陛下の被災地を見舞われるお姿、また被災者の懸命に生きる姿に私は、日本を見ました。これが私の生まれた、ひたむきな国。物ではなく、命どう宝（ぬちどうたから）…命が宝であると。

（福岡県 嘯吹八幡神社 出仕）

新緑の候に思ふこと

塩 崎 昇

桜の花が散り始める頃、境内にある木々も一斉に若葉が芽生えだし、その彩りを新緑に変えてゆきます。神社にいますと、この季節の移ろいを肌で感じることが出来ます。この新緑の候になりますと、不思議と風の日が多くなり、この風に揺らされ、古い葉が次々落ちてゆきます。落ち葉掃きが毎日欠かせなくなるのもこの頃です。

古い葉は色を変えはじめ、次第に力を失い始めます。その頃と示し合わせたように風の吹く日が続き、古い葉を落としてゆきます。

風の神さまがこの頃を見計らって風を吹かせているのだろうか、それとも、この暖かい風が吹く頃を知っていて、一斉に若葉が芽吹き始めるのだろうか。季節の移ろいは、実に不思議です。若葉はこの風で振り落とされることのないように、一日も早く葉を広げ、力強くあらうとしているように見えます。そう見えたとき、木や草にもいのちが宿り、生きる力を持っているのだとあらためて気づかせてくれます。どうか御参拝の折りには、この

新緑の葉の様子や風を肌で感じて頂いて、自然の息吹に思いを馳せて頂きたいと思います。あらゆるものが生まれ、そして死んでゆきます。生まれ、そして成長していく働きを神道では「むすひ」といい、命あるもの全てに「むすひの御霊」が宿っていると考えられます。

日本の神話を記した『古事記』で一番最初に登場する神さまは天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神の神さまです。神々の世界である高天の原に現れた最初の神々です。『古事記』は、世界中にある神話と同じく、この世の始まりから説き起こされています。『古事記』は、聖書にあるような全知全能の神がこの世界を造ったと伝えているのではなく、あらゆるものが生まれてきたのだと伝えていきます。天地の誕生を記した部分のいちばんはじめにこの「むすひ」の神様が登場します。このこと一つとりましても、「むすひの御霊」が大切に考えられていたことが分かります。

生まれたばかりの赤ちゃんも、一年経つと立ち上がり、歩き始めます。言葉もしゃべるようになりますし、背も伸び体も大きくなり、やがて大人の体へと成長してゆきます。虫や動物、植物もすべてこの世に生を受けたときから成長がはじまり姿や形を変えながら育ってゆきます。当たり前のことのようにですが、古代の日本人はこの万物を産み、そして成

長させる力そのものに御神霊をみとめ、それを「むすひ」と呼んだのです。また、「むすひ」は死んでもなお多くの命を生み出すという、生命の連続性をあらわします。「連続」とはすなわち「結び」（むすび）「ご縁」にもつながってまいります。

生きとし生けるものすべてに神の「むすひ」が宿っていることを知ると、全てのいのちを尊び大切にしなければならぬことを知ります。このいのちの結びが縁となり祖先とながつていることを知れば、祖先に感謝し尊ぶ気持ちはずと沸き起こってきます。いのちは生まれるものであり、つくられるものではありません。子供を作るといふ言葉をよく耳にしますが、子をつくるのではなく、むすひの御霊を授かつてはじめて生まれてくるものなのです。つまり、神さまとムスビについて生まれてくるということです。

わたしたち日本人が大切にしてきた本来の価値観や道徳的精神は、私たちの遠い祖先がこの国をつくり固め、守り伝えてゆくなかで、数々の苦難を乗り越え、過ちや手違いを起こしながら反省してはやり直し、また反省してはやり直して知恵をはたらかし、工夫を積み重ねてゆくうちに民族のいのちがこもる、重い生活の跡として踏み固まった、安全でしかも楽しい暮らしの道であり、ご先祖さまがきわまない愛情をこめてゆずり残された生活の知恵と様式なのです。

日本人は、季節の移ろいを愛でたり、もののあわれを悟ります。また、人間は生きるために、多くの生き物の命を犠牲にして食べ物を得ている。そのことに對し、私たちは生かされているのだと知り、感謝の心を忘れてはいけません。私たちの祖先から伝えられた神祭りの精神は、生きる喜びを共同で分かち合い、決しておごることなく、自然と對決するのでなく、ひたすら恐れ畏しこみ、感謝をして神々を祭ることにあります。神々に祈りを捧げ、楽しくめでたきお祭りをします。そしてにぎやかに直会をします。この考え方や暮らし方がこの美しい風土と日本人の性格にぴったり合った最もふさわしい道であり、自然と調和のとれた社会を修理固成することが私たちの歩むべき道、神ながらの道ではないでしょうか。

去る三月十一日に発生した東日本大震災の甚大な被害と、原子力発電所の事故が私たちに多くの教訓を残そうとしています。

敗戦からの復興と高度成長を急ぐばかりに、利益と利便をひたすら追求し、ご先祖さまがきわまない愛情をこめてゆずり残された日本人らしい価値観や道徳的精神を置き去りにしてきました。

私たちの祖先は大地震や津波、火山の噴火や洪水、干ばつや疫病といった自然の猛威に

さらされながらも自然と共に生きてきました。科学や文明がどんなに発達しても自然の猛威を押さえ込むことなど出来ません。今を生きる私たちも、祖先と同じ、自然と共に生きてゆかなければならないのです。「人は環境に優しく」などといって、いつしか自然に対し人間が何かしてやろうなどと考えるのではなく、また自然の恵みだけを都合良くうけとり、当たり前のように暮らしていても、天災はわすれた頃にやってきます。私たちの祖先は、そのたびに、みずからの行いを見直し、神や祖先をおろそかにしていなかっただろうか、土や水を汚していないか、私利私欲を優先した政を行ってはいないかなど、自らを振り返り反省をします。天災を神の怒りととらえ、犠牲者の御霊を鎮めて、より厳粛に神を祭りました。神さまへの祈りの詞である祝詞は、神を恐れかしこみ、そのめぐみにひたすら感謝し、謙虚で慎ましやかに暮らしていることを奉告する事からはじまります。このことを美德としてきた我が祖先の姿を忘れてはならないのです。

津波で何もかも失った漁師さんが「それでも海に恨みはない」といつておられました。自然を相手に先祖代々仕事をしてきた人たちは、謙虚であり逞しくもあります。この震災で多くの神社が被災しましたが、避難所の氏子の中には「神や仏もない」と途方に暮れるひともしあれば、「おふだ欲しいんだけど無いの？お守りはある？」「今年の夏祭り、どうす

る？」という声もあり、今まで以上に神さまのお力を必要とする人もいると聞きます。神さまをお祭りし、心のよりどころとして おすがりをし、神さまが良い方向に導いて下さると信じる その信仰の心が 勇気となり、復興に向い立ち上がる力になるのです。

震災で亡くなられた多くの人たちの犠牲を無駄にしないよう、私たちは悟らなければならぬ。目を覚まさなければならぬのです。

(和歌山県 伊勢部柿本神社 禰宜)

旧暦の話

田 場 聡

本日は地鎮祭誠におめでとうございます。

せっかく多くのご親戚も参列なさっていますので直会の始めに少しだけお話をさせていただきます。先程、施主さんのお母様から、今日は仏滅だけど大丈夫ですかとご質問がありました。確かに神社は今日は暇な日でして、明日は大安で良い日だということとで地鎮祭の予約が多くて私以外の神職も何人か同時に外に出る予定になっております。他の神社の事は詳しく知りませんので普天満宮の事だけを申しますと、やはりこういういった外でのお祭り事も、神社にご祈祷を受けにおいになる皆様も仏滅はほとんどいらつやらない。それが大安になると非常に多いんです。しかも、沖繩ではお祝い事は潮が満ちてくる時間帯に行いますので、予約が入る日も時間も重なってしまうんです。やはり縁起の良い日に気持ちよく祈願を受けたいというお気持ちがあるのでしょう。でも日の選び方はいろいろありまして、明日の大安はべつの見方をすると「不成就日」という日で、何事も

成立しないで悪い結果を招くので避けなければならぬ日と言われています。しかし今日は旧暦五月十二日、十二直の「執（とる）」二十八宿の「張（ちよう）」と言う日で祭祀や祝い事は吉とされる日なんです。施主さんもこういった見方から縁起の良い日ということで今日を選ばれたのではないかと思います。

ところで、皆さんはこの仏滅や大安といった「六曜」：「六輝」などとも呼ばれますが…をご存じですか。いわゆる「先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口」六日毎の繰り返しです。鎌倉末期から室町時代の頃に中国から伝わったそうで、三国志で知られる武将、諸葛亮孔明が戦略を練るのに発明したとも伝えられるそうですが、実際にはそのころから六曜があつたかどうかは疑わしいとも言われているようで、正確にはわからないというのが本当のところのようです。日や時刻の吉凶を占うために作られたものですので、一般的に言われている吉凶を簡単に申しますと

先勝…午前中が吉　友引…正午のみ凶　先負…午後が吉　仏滅…何事も慎むべき　大安…万事に吉　赤口…午の刻のみ吉　といわれています。

ところで、この六曜がどんなふうにならされているかという点、実は旧暦で決まっています。最初に、今日は旧暦五月十二日の仏滅だと言いましたが、来年の五月十二日も仏滅

です。毎年同じ日は同じ六曜なのです。六曜は、旧暦の各月の朔日がどの日から始まるかが決められています。並び順は先程申し上げた「先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口」の順番で、正月朔日から順に先勝、二月一日が友引というように並び、七月はまた先勝から始まります。ですから旧暦の朔日にかわるときは並び順が跳んでしまいます。ですから……ここが一番肝心なところですが……神社としては、この占いにこだわって日を選ぶ事はありません。ご祈祷をするのに、特に日の善し悪しはないと考えています。祝詞の中に「今日を生日の足日と撰び定めて……」と、出て来ますように、今日を良い日として選んで祈願を行いますと申し上げます。ですから、今日の仏滅に祈願においでの方皆さんも明日の大安においでの方皆さんも、ちゃんと御神徳をいただけるのでご心配なく。

ついでに旧暦の話をしただけ、現在、日本で旧暦といえば、一般的には明治の初めまで使われていた天保暦、実際の処正確に言うところと少々違いはあるようですが、その暦をさしています。天保暦法は西暦一八四四年二月十八日（旧暦弘化元年正月朔日）から西暦一八七二年十二月三十一日（旧暦明治五年十二月二日）まで実施されました。現在の太陽暦の実施は西暦一八七三年一月一日からであったため、旧暦の明治五年十二月はたったの二日しか有りませんでした。一説によりますと旧暦の明治六年が閏月で十三ヶ月有るため

に、予算不足の明治政府が、給料を一月分多く払わなくて済むように導入を急いだというような話もあります。この閏月というものもよく勘違いされるようで、いわゆる新暦の閏年二月二十九日は四年に一度ですが、旧暦もそうだと思っている方がいらつしやいます。でも旧暦ではだいたい三年に一度、もう少し詳しく言いますと、十九年に七回になるそうです。どこに閏月が入るかというのは、簡単に言いますと春分二月夏至五月初分八月冬至十一月といった二十四節気を並べていったときに中気がないのが閏月だそうです。私は暦の専門ではないのでほろが出ないうちにこれぐらいにしておきますが、もっと詳しく知りたい方は是非ご自身で調べてみて下さい。結構奥が深くておもしろいですよ。

話は戻りますが、先程、神社は日の善し悪しを選ばないと申し上げましたが、決して皆さんに日を選ぶなど申しているわけではございません。やはり今日のような行事を行う上で、皆さんが気持ちよく清清しくご参列して頂ける様、しっかり日を選んで事を運んで行くというのは大切な事でございます。いろいろな迷信に振り回されるのもいかがかと思いますが、お母様が心配しておられたのは、「息子の家に何かあつては……」という親心でございます。このように子や孫を思う心も一緒に、大事に伝えていつて欲しいと思います。

私事で恐縮ですが、実は私も最近家を建て引っ越しをしたのですが、仕事から暇な仏滅

の日に引越そうと考えておりましたが、両親が日を選べというので結局大安に引越しました。

このように多くのご家族ご親戚の皆様が、笑顔でお集まりになっている今日は、本当に良い日だと思います。どうぞ、すばらしいお住まいが竣工します事を心よりお祈り申し上げます。

(沖縄県 普天満宮 権禰宜)

沖縄県護国神社の由緒について

木村 健 吾

沖縄県護国神社は元招魂社と称し、日清、日露の戦役をはじめ過去の戦役事変に際し国のため犠牲となられた県出身陸・海軍軍人、軍属の戦死者並びに戦病没者及び公務に基因して死没された方で靖國神社に合祀せられた祭神を祀り、その偉功と尊い犠牲を追想しその忠義の顕彰を無窮に伝えるため、昭和十五（一九四十）年三月一五日、内務省令第十二号により招魂社から沖縄県護国神社と改称、昭和十五年七月一日内務大臣指定の沖縄県護国神社となりました。

昭和二十年四月、沖縄に対する米軍の上陸戦闘のために戦災を被り社務所や燈籠など一部を残し焼失したので昭和三十四（一九五九）年四月、仮社殿が建立され戦後第一回の春季例大祭を斎行しました。御祭神は当初、郷土出身全戦没者九万三千四百四十六柱でありましたが、昭和三十四年十一月十五日の第一回秋季例大祭（斎主・池田靖國神社権宮司）に当たり新たに靖國神社から御霊代をお迎えし同時に本土各都道府県出身で沖縄で戦死さ

れた御霊六万五千七百十七柱を合祀、厳肅盛大な式典を斎行しました。

その後、昭和四十（一九六五）年十月、本殿、拝殿を新築し境内付属施設を完備し同年十一月十九日、遷座祭を斎行しました。

昭和四十年十一月十九日、御祭神は郷土関係靖國の御霊を合祀したほか、戦争の犠牲となられた郷土出身一般住民をはじめ遭難学童及び文官関係戦没者の御霊を含め十一万五十二柱、大東亜戦争中沖繩の陸上、近海空域で戦死された本土各都道府県出身の旧軍人軍属六万五千九百八柱、合計十七万七千九百十二柱でありました。

さて、皆様が御来島されて見た沖繩の空はいかがでしたか。青い空・青い海でとても綺麗な島だと思いませんか。この地で散華された御英霊も皆様と同じでこの青い空・青い海を見ていたのです。この空の下、尊い命を今の私たちのために捧げてくれたのです。それに対して、今の私たちは御英霊の『うむい』に応えられているでしょうか。うむいとは沖繩の言葉であり、想いという意味です。

御遺族の数は年を追うごとに減っています。本来ならば増えているのが普通ではないでしょう。最近もこんな電話が神社に掛かってまいりました。「もう、お婆ちゃんは亡くなったので命日祭の通知などは送ってもらわなくて結構です。」この電話を受けた私は深い悲

しみに陥りました。一つはお婆ちゃんが亡くなっても貴方が生きていて、貴方がお婆ちゃんのおむいを継いで御英霊となられた親族を忘れずに慰霊をしたら良いじゃないか。という思いと、もう一つはそんな御遺族を引き留める事ができない自分の無力さにとても情けなくなり、それが深い悲しみとなって私に襲いかかってまいりました。護国神社がある限り、私たち神職がいる限り御英霊は完全に消えることはないでしょう。しかしこれでは駄目だと私は思います。この状況を御英霊が見ていたらなんて思うでしょうか。私は御英霊の悲しそうな顔が浮かんできます。きっと「自分たちは何のために、誰のために死んだんだ。」というやり切れない思いでいっぱいになっていることでしょう。「なんで日本はこんな国になっちゃったんだ。」と嘆いていることでしょう。

だからお願いです。私たち護国神社の神主ももともとと努力して御英霊が御遺族の皆様が安心して静かに慰霊できる神社にしていきます。だから御遺族の皆様も自分の子や孫、子々孫々に「自分たちの御先祖様は立派な方で国のために沖縄のために尽くされ私たちの未来を守ってくれた神様なんだよ。誇りに思っていんだよ。」と語り継いでいって下さい。どうかお願いいたします。またこの沖縄という地で一般住民の多くの方々が戦争の犠牲になられたということも語り継いで下さい。赤ちゃんやお年寄りなど老若男女問わず

十万人以上の方がこの沖縄県護国神社の御英霊として祀られていることを。沖縄県民の血や涙、うむいから今の沖縄があり、私たちがあるということをごきお願いいたします。

昨年放送された終戦ドラマスペシャル『歸国』でこんなセリフがありました。「人は二度死ぬ」というセリフです。一度目は「命を落とした時」二度目は「忘れ去られた時」だそうです。

今の時代の私たちは御英霊を二度死なせていませんか。これ以上、御英霊や戦争で亡くなられた方々を死なせてはいけなと私は思います。共に生きていきましょう。まずは皆さんの生まれ育った今の故郷の景色や街並みを思い浮かべて下さい。皆さんが思い浮かべている光景は皆さんを通じて御英霊たちに見えていることでしょう。共に生きていくということは日々感謝し、忘れずに私たちが生きていくということではないでしょうか。

(沖縄県 沖縄県護国神社 権欄宜)

御嶽の神々と信仰

井 澤 真 人

神道では全国津々浦々、沢山の神様がいます。その神様達のお力、また役割も様々です。たとえば、国を守護する神様、村々やその土地を守護する神様、海の神様、山の神様、商売の神様まで私たちの願いに合わせ存在しています。これは、願いの数だけ神様が居ると言っても過言ではありません。

この、沢山居る神様の事を八百万の神と言います。八百万と書きまして、ヤオヨロズと読みます。そして、各土地に鎮まっている神様を産土の神と言います。

産土の神様は、土地を守り、そこに住んでいる人々をお守りしています。大概の地区、村々には産土神社と言われている神社がありまして、その神社にお鎮まりになっています。

さて、沖縄はと言いますと。本土とは異なり、産土神社という概念がなく。御嶽、拝所と呼ばれる聖地があります。この拝所と呼ばれている場所には、大体小さな祠と線香をお供えする香炉（ウコール）が置いてあります。祠が無くても香炉だけがあったりします。

それでは、御嶽というのはどのような場所にあつて、どんな特徴があるのか簡単に言いますと。森の空間や泉や川など、あるいは山や島そのものが御嶽だつたりします。

御嶽は琉球の神話の神（ニライカナイ、竜宮神、土帝君トウーティークン）が存在、あるいは来訪する場所であり、また祖先神を祀る場でもあります。琉球の信仰では神に仕えるのは女性とされるため、琉球王府時代は完全に男子禁制でした。現在でも一定区域までしか男性の進入を認めていない御嶽もあります。

御嶽によつては空間の中心にイビ石という石碑があるが、これは本来、神が降臨する標識であり、厳密な意味では、ご神体ではありません（ご神体として扱われているところもある）ちなみに過去に実在したノロの墓を御嶽とし、そのノロを地域の守護神として祭っていたりもします。

そして、大きな御嶽では、「神アサギ（神あしやげ、神あしやぎ）」と呼ばれる前庭や建物といった空間が設けられていることがあります。これは、御嶽の神を歓待して歌つたり踊つたりするための空間です。語源は「神あしあげ（神が足をあげる場＝腰を下ろす場）」と考えられています。

鳥居が設置されている御嶽は所々にありますが、これは明治維新から琉球処分以降によ

る神道施設化の結果であり、本来のものではありません。沖縄本島では戦後、鳥居が撤去された御嶽も多くあり、逆に宮古島にあるすべての御嶽は鳥居が現在でも設置されているそうです。

一説によりますと、御嶽はもともと古代社会において集落があつた場所と考える説が有力であるそうです。そのため、御嶽の近くから遺骨が見つかる例もあります。これは、祖先崇拜であることに強く関係していると考えられていて、御嶽自体が祖先の古いお墓だつたという話もあります。

昔の沖縄では自分の祖先でも死後七代目には必ず神になると信じられていました。これを「七世生神（しちせいしょうしん）」と言います。琉球時代には、人が死ぬと屍体を洞窟の中に投げ込んで、その口を石で固めてその隙間を塗りこむ風習があつて、七代経つと屍体を入れるのをやめて別の場所に新墓所を設けて、それまで屍体を入れていた洞窟を神墓（くりばか）と呼ぶようになります。神墓は拝所になって、時代を経るに従つて他の人々も拝するようになっていきます。

また、多くの川や泉が御嶽もしくはそれと同格の扱いをされています。人が生活する上で水というのは無くてはならない物なので感謝の気持ちを込めて祈るそうです。たまに、

何もない道端で拝みをしている人が居ます。それは、昔そこに井戸があつたので拝んでゐるそうです。

御嶽には、拝み方もありまして沖繩では御嶽に線香をあげ、お供え物をお供えします。その線香は、本土の線香とちがい六本が一組になつてゐる平線香（ヒラウコー）と呼ばれるものです。これを、二組十二本と半分に分けた三本を使います。

これは、十二本を一年十二か月にたとえ、三本は天、地、人または火、水、土にたとえます。人と自然が仲良く暮らしていけるようにお願いするわけです。

次にウチカビというものがあります。これは、紙のお金で祖先崇拜の時に使用するものです。この紙金は、あの世のお金と言われている。先祖に持たせてあげます。

最後にビンジーと言われる木箱がありまして、先祖代々受け継ぐものらしいです。このビンジーには、お酒と米を入れてお供えます。

さて、簡単に説明しましたがやっぱり自分の目で見て感じて頂いたほうが良いと思います。もし、お暇がありましたら沖繩の御嶽を見て実際の風景を味わって頂けたら幸いです。ざいます。

日本人の命の絆

西尾 酒子

ようこそ ご参拝くださいました。大神様も皆様のご参拝を心からお待ちしてお喜びのことと思います。

ご存知のように、東日本大震災が三月十一日二時四十六分にありました。ちょうど宇治神社の春祭りの日でした。不思議なことに、その日は頭が痛く、どうしたのだろう？ 病の母に何かあったのではないだろうかと心配でしたが、とうとう家に帰ってうずくまってしまいました。その後テレビで大震災の事を知らされ 思わず体が震えました。早く地震が、消えるようにお祈りしました。そこで、三月十六日早速総代様達と共に復興祈願祭をしました。日々祈るばかりです。

今日で三ヶ月が過ぎました。おかくれになられた人々のご冥福をお祈りし、一日も早く復興できることを祈るばかりです。皆さんもお祈りしましょう。（合掌）

このような恐ろしい地震が、（平安時代）貞観十一年（八六九）五月二十六日にもあった

そうです。清和天皇様は、その知らせに心痛められ

「……百姓に何の幸ありてか、せめは深く余にあり。被災した人々を助けなさい。わたしの暮らしを儉約しなさい。」

と詔なされ、御自ら被災地陸奥の国へお見舞いなされたと云う記録を知りました。その時代に京都から陸奥の国まで自らご訪問なされたことに驚かされました。

日本の国は、天皇様の御心を中心となつて国が栄えさせられていたのですね。

昨今の震災に於いても天皇様・皇后様が共に被災地を訪れ、お見舞いなされて、お慰めなされ お励ましなされました。人々は、復興への勇氣と癒しを授かりました。

私は、今日 日本人の命の絆について思い起こしてみたいと思います。

被災地 市古志村の村岡さんのお話。

村岡さんは、地域のお祭りに獅子舞を教えていました。この日、津波がやってきたとき命からがら逃げることができ、真っ先に集会所に置いてある獅子舞の獅子を探しに行ったそうです。

しかし、何も残っていない事が解り、津波が収まってから探しに行きました。みんなにも呼び掛けたところ一緒に探してくれて奇跡的に全部見つかり、みんなで綺麗に洗い獅子

の背中もみんな揃えられました。早速子供たちに教えお祭りの準備をしたそうです。子どもも大人も心一つになってお祭りをする事になり、復興への勇気とお互いの心の癒しを神様から授けられたと話されました。そして、地域外の人にも声をかけ みんなでお祭りの獅子舞を催す事ができたそうです。

また、山村である栄村の話

田んぼの地盤は、割れてしまい水田稲作が不可能の状態で皆途方に暮れていましたが、その後三ヶ月たった今、みんな協力し合うことで水田稲作する事に決まり、田んぼは早苗一面の田園風景となり美しい限りでした。地域の人々の命の絆が甦ってきていました。

このような復興への生きる命の絆を、どのようにして日本人は培ってきたのでしょうか。「きずな」と言う言葉の由来を私なりに思い起こしてみると「氣」は、米と言う字が含まれています。天照大御神様からいただいたお米は約八十八日間かけて作られますが、一人では田植え・稲刈りはできません。雨にも負けず風にも負けず、水田に必要な大切な水を分け合い、お米の命の種をまき、大切に育てて豊作の慶び、不作の悲しみも分かち合い、お祭りにはできたお米を感謝して氏神様にお供えしてきました。

「綱」は、藁わらから作られたもので、歳占いする横綱の力士の締める注連縄（東方・西方の

豊年や幸を占う相撲）・お正月に神社、家々に飾る注連縄です。

宇治神社でもお正月前に総代さんに来ていただいて注連縄をなってもらいます。その時の話。

「藁は、短いけど継ぎ足していくと　すごく長くなるね」

「三連すると　こんなにも強いんだねえ。解けないよ」

「一人では、作れないなあ。力がいるねえ」

「できた。すごいなあ！　ごついなあ。これでお正月が、迎えられるよ」

「我が家の注連縄も作りたいなあ。作ってもいい？」

「いいよ。どうぞ」

作った注連縄を見て嬉しそうに　笑みを浮かべながら

「来年も元気で働けるなあ！」

と、言いながらみんなで作っています。時間が有れば作りに来て下さい。

「注連縄」について古事記上巻に

「天照大御神様が、天の岩戸よりそろそろより出でてうかがうときに天手力男の神様に手を取って引き出された。布刀玉命が注連縄をその御後ろの方へ引き渡して『これより内

に還り入りそ』と言われました。すると、天照大御神様が、岩戸から出られて、高天原も芦原中国も自ら照り明るくなった」

と記されています。

お正月の注連縄は、天照大御神様をお迎えして不浄なものが侵入しないよう無病息災・家内安全にして豊かに暮らせるよう祈りが込められ忘れることなく作られて来たと思います。

「きずな」は、神様からの命「氣」を注連縄に託し、神様との「きずな」・地域の「きずな」家族の「きずな」を忘れないように作られて来たと思います。

「絆」と言う文字を考えてみると人の世には、男と女しかいません。伊邪那伎命・伊邪那美命の国作りにあるように、男女半分・半分互いに助け合い、心と心の糸で結ばれて作られたものは、決して揺るがない強いものとして注連縄のような「きずな」が生まれたものと考えられます。

日本の伝統を受け継ぐ神ながらの道の年中行事のお祭りや人生儀礼のしきたりは、とりもなおさず神様からいただいた命のきずな　人と人の命のきずなを保つ為のお導きと言えます。

どうか、お祭りには進んでご参拝下さい。

また、結婚式は、神様に夫婦の誓いを報告して強い「絆」に護られ幸運のご加護を授かる儀式です。「お宮参り」は、神様から授かった命の誕生を祝いその慶びと感謝を報告して子孫繁栄を祈り、世のため人のために尽くせる大人になるように健やかな成長を祈願する儀式です。

今日、ご参拝下さいました皆様のご健康を心からお祈りし、皆様との「絆」を大切にしていきたいと存じます。

また、お逢い出来る日を楽しみにしています。ごきげんよう

拝

(和歌山県 宇治神社 宮司)

遺骨の尊厳（日本人の靈魂觀）

佐 上 博

本日はようこそ御参拝下さいました。

私、今年の二月にミクロネシアに一ヶ月間行つて参りました。これは私の長男がポンベイに住んでおり観光を兼ねて行つたものですが、今日はその時、私が感じた貴重な体験をお話し、一緒に考えてみたいと思います。題して「遺骨の尊厳」副題として「日本人の靈魂觀」について話しをさせて頂きます。実はこの地区のチューク州（旧トラック諸島）は太平洋戦争時に旧日本軍の重要な連合艦隊の軍事基地がありました。戦時中の昭和十九年二月十七日、十八日の両日にわたりアメリカ軍の空襲を受け、日本兵六、〇〇〇名の戦死者を出し、艦船四十三隻が沈められました。戦後になり日本政府によりこの地区の遺骨の大半は引き揚げられましたが、まだ一部は今でも船の中や海底に眠つたままのようです。ところが現在、その場所は世界有数のダイビングスポットとして年間に何千人もの欧米諸国のダイバー達がこの地区を訪れているそうです。このトラック環礁に眠る沈船や旧日本

兵の遺骨が観光スポットとして見世物となり、英霊の遺骨が晒しものになっているそうです。

この経緯を知り現地で調べて見ますと、昭和二十年の敗戦により日本人はミクロネシア地域への立ち入りを禁止されました。二十年後に始めて入国が許され、墓参りと遺骨の収集が出来る様になりました。実際は昭和四十一年四月に政府による第一次の遺骨収集が開始され、平成七年の第六次までに約四、〇〇〇柱の遺骨をお迎えしています。

平成九年と十一年の二回にわたり、厚生労働省がトラック環礁の現地調査を行い、『遺骨はすでに無い』という結論の下で、未帰還遺骨の収集活動を止め、その後は二、三年毎に慰霊巡拝を行っているそうです。

ところが、平成十九年九月十六日の産経新聞の第一面に『日本兵の遺骨が見世物に（トラック環礁）』と掲載されこのような実態が分かったものです。現在ミクロネシアの国としての産業は殆んどなく、外貨獲得の為には沈船を重要な観光資源としております、今は海底から全ての物の引き揚げを国の法律として固く禁じています。

現状では厚生労働省は遺骨収集を止めており、又ミクロネシアは海底から遺骨の収集を禁じている為、例えば硫黄島（小笠原諸島）のように民間団体や個人での遺骨収集活動をする

事さえここでは出来ません。それにしても「遺骨を見世物にするなどとは、日本人として又、人間としての良識の問題」であると私は思います。これは日本人の感覚としては信じられない暴挙であり、許し難い行為ですが欧米人ダイバー達は慰霊と云う概念は持ち合わせていないようです。この様なことが平気で出来るのは欧米人の宗教的な価値観の違いだと思われます。肉体や骨は「物」であり、遺体は「器」にすぎないと云う感覚で日本人の思う『遺骨の尊厳』は無く遺骨にも靈魂が宿ると云う想いとは決定的に異なる点があるのがあります。

ミクロネシアは今は独立国ですが、つい最近まではアメリカが約五十年間も統治をしており大半の人々はキリスト教徒になつているようです。

欧米人の宗教的な考え方は実態があるのは魂の方であり、肉体は罪の棲家であり、穢けがれある物にすぎないと云う「靈肉二元論」を唱えています。

実は欧米人の死生観は復活思想にあるようです。この話は現地で聞いたので、日本キリスト教とは考え方が少し異なるとは思いますが世の終末に死者は復活して「最後の審判」を受け肉体はチリに戻り魂は祝福され永遠に新しい世界で生き続けると云うものです。葬儀は神への礼拝であり、死者への供養ではありません。牧師が死者に呼び掛けるとか、故

人の霊を慰めるとか、冥福を祈るとかではなく、ただ主権者である神の尊厳と残された遺族への慰めと励ましを目的としています。

死者は日本のように神や仏になるのでは無く、弔られる事もなく召天をして世の終末に復活し、審判を受ける準備をします。靈魂としてこの世に留まったり、彷徨^{さまよ}う事もあります。礼拝の対象でもなく、子孫を見守る事ありません。死後は主である神さまの御手に一切を委ねられ、残された者は神にのみに礼拝を捧げる事となります。

日本人の靈魂觀は人が亡くなれば死者が安心して旅立てるように生前に関係した人達が心のこもった葬儀を営みます。肉体も靈魂として生き続けます。その靈魂は共に生きた家族や近親者を見守り又、後に残された人々も先祖礼拝としてお祀りされます。

靈魂は祖靈となり先祖の御靈と共に御靈舎に入られ、私たちはご先祖さまを想い靈璽を通して慰靈を行います。ご先祖も温かい心で私達の子孫の繁栄を見守って下さいます。

この様に日本人は、稲作民族と云う事もあり、四季もあり、自然崇拜の中で生まれ育った森羅万象に神宿るという自然崇拜と神代の古くから今に伝わる中で「先祖崇拜」「死者慰靈」の概念を持った、ご先祖さまを大切に思う素晴らしい日本民族の宗教觀だと思います。

私は今回 ミクロネシアの地でこの様な貴重な体験を目のあたりにして、日本人に生まれ

て良かったなあとつくづく思う今日であります。

ご参拝の皆様にはこうした様々な生き方を知り、どの様にお感じになりましたでしょうか。以上ご参考までに今日の私の講話とさせて頂きます。

本日はご参拝下さいまして、誠に有り難うございました。

(広島県 長束神社 出仕)

天草招魂祭

田代壽興

ご挨拶を申し上げる前に、先ず東日本大震災の被災者の皆様に謹んで哀悼の意とお見舞いを申し上げます。今回の震災については、自衛隊・警察・消防・海上保安庁・外国の軍隊や医療関係者、ボランティアの人々など必死の救援にもかかわらず、未だに物資が行き渡っていない地区があるということです。

今日の招魂祭は黙祷から始めさせて頂きました。戦没の御英霊に捧げて頂きました皆様、今回の玉串料・初穂料・お賽銭は全て被災者の救援に使わせて頂きたいと存じます。天草招魂祭参列者の名称でしかるべき処にお金か品物で届けさせて頂きます。

本日はご多用の中、かくも多数ご参列を賜りまして誠に有り難うございます。又ご来賓の皆様には、選挙中にも関わりませずご臨席を賜りまして厚く御礼申し上げます。

世の中には「忘れていけないことがある。」の標語の下、熊本県神社庁天草支部と天草郡市氏子総代連合会の主催で、天草招魂祭を執り行いまして本年度六回目を迎えます。本当

は国や県が主催して行わなければならない慰霊と顕彰の祭りですが、未だに行われないうことは御霊に対して申し訳ない気持ちでいっぱいです。

さて、今日は皆様に、イスラエルという国の建国についてお話をします。この国はご承知のようにユダヤの人々の国ですが、ローマ帝国に滅ぼされて以来、国を失い、その民族は世界中にちりぢりになって生活をしていました。建国されたのは、一九四八年（昭和二十三年）です。その建国の英雄として崇められているのは、トランベルトールという人です。彼は日露戦争の時、ロシア兵として日本と戦い、明治三十七年八月に榴弾砲弾の破片によって左手を失いましたが再び志願して最前線に戻り奮戦し、旅順守備隊のステッセル司令官によって「ロシア将兵の亀鑑」として賞賛され、全軍に布告された程の英雄でしたが、旅順で日本軍の捕虜となり、大阪浜寺捕虜収容所に送られました。浜寺の捕虜収容所には電灯が灯っていました。しかし周辺の住民の民家にはまだ電灯がなかった。トランベルトールは、近代化に進み始めて三十数年しかたっていないこの小さな貧しい国が、なぜ、大国ロシアを打ち破ることが出来たのだろうかと呆然としました。その時、一人の日本人兵士が語った言葉をトランベルトールは生涯忘れなかったそうです。それは「祖国のために死ぬことほど名誉なことはない」という言葉でした。しかしユダヤ人である彼に、命を

捧げるべき祖国はなかった。そこで彼は、自分たちユダヤ人の「祖国」を再建する決意を固め、ロシアに住むユダヤ人にパレスチナに入植することを呼びかけ続け、祖国建設に立ち上がったといわれています。しかし、一九二〇年十月二十九日にパレスチナ北部のテルハイの農場にいた時、アラブ部隊の襲撃を受け、トランベルツールは二発の弾丸を受けて倒れました。駆け寄った戦友に彼は次のように言って事切れたそうです。「俺にかまうな。祖国のために死ぬことほど名誉なことはない」

彼の戦死から二十八年後の一九四八年、イスラエルが建国されました。そしてトランベルツールが戦死し埋葬されているテルハイは、イスラエル国民の聖地となり、彼の墓の前には大きな獅子の石像が建てられ、その台座には「祖国のために死ぬことほど名誉なことはない」と刻まれているそうです。

今日お招きした戦没の御英霊は、「祖国のために死ぬことほど名誉なことはない」と信じて散華されたと存じます。そのお気持ちを考えると誠に申し訳ない気持ちでいっぱいです。ただ是を何とかしようという動きも出てきております。去る三月十八日、長崎県議会は、県知事に長崎県護国神社へ参拝するよう求める請願を賛成多数で採択しました。また、今回の大震災に対して、日本の文化や社会を専門とするジョージタウン大学のケビン・ドーク

教授は「日本国民が自制や自己犠牲の精神で震災に対応した様子は、広い意味での日本の文化を痛感させた。日本の文化や伝統も米軍の占領政策などによりかなり変えられたのではないかと思いがちだったが、文化の核の部分は決して変わらないのだと今回思わされた。」と述べ、また「近年の日本は若者のひきこもりなど、後ろ向きの傾向が表面に出ていたが、震災への対応で示された団結などは、本来の日本文化に基づいた新しい目的意識を持つ日本の登場さえ予測させる」とも論評しております。

歴史を忘れさせられた日本、イスラエルが国土を回復して再建されたように、我が日本も歴史を回復して再興しなければならぬと思います。

「忘れてはいけないことがある」御霊に感謝申し上げて挨拶と致します。

(熊本県 牛深八幡宮 宮司)

乃木將軍御殉死壹百年祭を迎えて

松 吉 宣 和

現世を 神去りましし 大君の 御後と慕ひて 我は行くなり

出でまして 帰ります日 of なしと聞く 今日 of 御幸に 逢ふぞかなしき

乃木將軍御夫妻がご殉死されて百年を迎える本年九月十三日、秋季大祭に併せ壹百年奉告祭を斎行する事となり、全国崇敬者と協議した結果、記念事業実行委員会の設立に賛同を得て、宝物館前に棗なつめの木三本を植樹、周囲に玉垣九十本を建立する記念事業の実施が決まりました。

乃木將軍は、国民からは「乃木さん」と親しみを込めて「さん」付けで呼ばれ、国民に對しては「明治の精神」「日本人の心」を以て親愛の情を注がれました。故に「日本人の理想の英雄」「このころの英雄」として皆から敬慕され、能力的にも傑出し、明治時代最も劇的な生涯を送られた方でした。

乃木家は、代々藩医を務める家系で、父十郎希次は武芸に秀で、士分に取り立てられ、

家禄八十石を賜りました。

長州長府藩士乃木十郎希次は、嘉永二年（一八四九）に東京都港村麻布日ヶ窪の長府藩邸で先妻と死別、二人の子ども幼いときに亡くし、四十歳を過ぎて、常陸の国上浦藩士長谷川金太夫の娘壽子と再婚、高齢のため子供を授かるのは無理と考えていたところに男子が誕生、「無人」と命名しました。

剛直な十郎希次が藩政の問題に意見を上申したことから閉門謹慎の処分を受け、禄高は五十石に下げられ、希典十歳の時より下関市長府にて一家の生活が始まりました。

希典が集童道場で勉強を終え、二月の寒い日に子供ながらに「ああ寒いと」と言ったところ、運悪く父親が家に帰っており、「寒ければ暖かくしよう」と井戸のそばに立たされ、梅の木につるしていた水桶で、着物を着たまま水を頭から浴びせられたそうです。

文久三年（一八六二）虚弱な体で文武を続けるのは無理と思い、学問で身を立てようと、父と親交があった萩の玉木文之進の家に行き、学問をしたいと懇願したが、両親に断りもなく来たことに対してお叱りを受け、家へ入れてもらえず、数日間門の軒先に居座ったところ、文之進の妻が憐れんで、おにぎりを差し入れてくれました。そしてまず、畑仕事と庭の草取りを夜明けから夕暮れまで休むことなく手伝わせました。一年経って体は見違え

るほど健康になり、元治元年、晴れて入門を許されました。そしてその翌年、乃木の生涯における一度目の大きな「転機」を迎えます。萩の藩校明倫館に通う乃木に玉木は、天皇への忠義、武士の心得、士道のあり方などが記された吉田松陰直筆の「士規七則」を与えました。松陰の精神を玉木を通じて受け継ぎ、また、父十郎希次は息子のために山鹿素行の「中朝事実」を自ら筆写し、父としての愛情を示しました。希典は「中朝事実」を生涯の書とし、戦場に赴く時は懷中していきました。

乃木は父親より赤穂浪士四十七士の話を武士の手本として、何度も繰り返し聞かされ、命日には泉岳寺に赴き藩公と浪士の墓に参拝しました。

慶応二年六月、十八歳の時に幕府の大軍が長州藩領へ攻め寄せ、第二次長州征伐（四境戦争）が勃発し、長府藩報国隊の一員として初陣の機会を得、九州小倉口の戦いで一番乗りを成し遂げ、小隊長に抜擢されました。明治四年陸軍少佐に任命されて軍歴が始まり、明治八年熊本鎮台歩兵十四連隊長心得に就任、生涯二度目の「転機」が訪れ、明治九年十月、旧秋月藩士族による乱に出動しました。実弟正誼と教え子が参加して戦死。恩師玉木文之進は、無断で乱に参加したことの責任をとって自決した。乃木は、明治の武士の生きる道は「天皇への忠義」という信念を以て自ら心の痛みを乗り越えましたが、二十九年後

日露戦争で一人の息子を失いました。その後天皇から預かった西南戦争の「軍旗」を部下の河原林少佐に預けました。少佐は腹巻きにして大切にしていたところ、薩摩郡に袈裟懸けに切られ、腹巻きに使っていた「軍旗」を奪われ、生涯三度目の「転機」を迎えました。

部下に預けた自分に責任があり、すぐに天皇へ報告し、自決を申し出ましたが、「お叱り」を受け、「乃木の命は天皇が預かる」と仰いました。これは乃木にとって最大の痛恨事件であったが、明治天皇が乃木希典という人間を見出され、責任感の強さに対して信頼を寄せられ、明治の精神がここに確立しました。

小隊長・陸軍少佐・中佐・大佐・少将まで累進した乃木は、軍旗を喪失したことを忘れようと、大酒を毎日呑み続けました。明治二十一年、明治天皇ご名代で英国皇太子の戴冠式に出席し、帰国の途中ドイツに立ち寄り、そこで一年余り住みました。その影響で帰国後性格が変わり、自宅でも常時軍服を着て酒を遠ざけ、陸軍一の堅物な人となり、周りの人達はその変貌に驚きました。西洋文明の本質に触れられ、日本人に最も大切なのは「ここある文明」であると悟ったドイツでの生活は、乃木の四度目の「転機」でありました。乃木は「日本人のこころ」を意識して、「日本人の模範」になろうと決意し、日本古来の武士が大切にしてきた徳義を重んじる生き方、「松陰の志」を受け継ぎ、自らの原点を見出し、

それを「己の宿命」として課することを深く是認するに至りました。

乃木は日清講和条約で日本の領土となった台湾の平定作戦に従事した後、明治二十九年、六十九歳の母親を連れて第三代台湾総督に就任しました。乃木自身が「理想」として己に課した指揮官の姿は、日本人が愛する「名将像」そのままでありました。そして軍人、指揮官として優れた点は、作戦や戦略を練る能力より、人を惹きつける「統率力」にありました。

第五十九代宇多天皇のご子孫である將軍の御靈祭を忘れることなく、御夫妻の遺徳を偲び、後世に伝えるべく崇敬者各位と共に神明奉仕に邁進してゆく所存です。

(山口県 乃木神社 宮司)

宮古神社の由緒

奥 原 隆 良

宮古神社の始まりは、四百年ほど前の一五九〇年、波上宮より熊野三神を勧請し、権現堂というお堂を建立した事から始まります。波上宮の創建は一三六八年以前という事です。二百年と少しあと、本土の歴史では戦国時代の末期頃になります。権現堂の建立から約二十年後の一六一一年に、琉球王府の命により瓦葺のお宮が建立され、遷座。宮古三所権現と称されました。沖縄の他の神社と同じく、隣にはやはりお寺がございます。それから明治に至るまで、公費にて管理されていたということです。

時代が下りまして、大正十四年、二つ目の神社が登場いたします。宮古島のかつての統治者「豊見親（とうゆみゃ）」、二柱をお祭りする「宮古神社」が設立されました。琉球の時代、またそれ以前の時代に、宮古島を統治していた仲宗根玄雅命、与那覇惠源命をお祭りする神社でございました。しかし、台風により拝殿が崩壊、本殿も白蟻の被害を受け、創建十年あまりで改築が必要な事態に陥ってしまいます。

そして以前からある「宮古三所権現」も、琉球王朝時代は管理されていましたが、明治以後は管理するところがなくなっていました。昭和四年に、当時の町議会の決議にて改修工事が行われましたが、その後も管理はされず、十年もたたずに荒廃していました。

この二つのお宮をどうするかが問題になりました。二つのお宮を維持することは、難しいのではないかという事。また、今までにない、立派なお宮にしたいということで、二社を合祀し、県社に昇格を目指す、ということになりました。

まず、宮古三所権現の名称を「宮古神社」に変更いたしました。この時点では、宮古神社という神社が二社あることになります。そのうち、豊見親をお祭りする宮古神社の二柱のご祭神を合祀いたしました。

そして昭和十九年、新しい宮古神社が完成し、遷座祭が執り行われました。当時としては県内の神社では波上宮に次ぐ規模であったといえます。

しかし翌年の昭和二十年、戦局が激化し、六月には沖縄戦が終戦。宮古神社は焼け残りながらも被害を受け、ご祭神は張水御嶽にうつされました。この張水御嶽は宮古の御嶽では最も重要な御嶽で、鳥居や拝殿を備え、宮古神社のすぐそばにございます。

そして昭和三十一年に目黒盛定政が増祀され、昭和五十五年になり、ようやく宮古神社

が復興されました。当時の平良市との間に境内地の問題があり、以前の豊見親二神が祭られていた宮古神社の土地に移りました。

そして昨年の平成二十二年に、以前お宮のあった土地によりやく新しいご社殿が御造営されました。

こうしてみますと、宮古神社の神々は昭和以降、復興前の仮宮も含めると六回ほどお宮をお移りになられておられます。短い期間ですとわずか一年ほど、一番長い期間でも三十年でございます。神様も引越しが多くて落ち着かなかったのではないのでしょうか。

昨年は多くの島の皆様もおみえになり、遷座祭がご斎行されました。私は当時神職ではございませんでしたが、将来宮古神社に奉職する者として、県内の神職さんたちのそばでお祭りを見学させていただき、とても感動いたしました。

幸いにも、元の権現堂の土地にお帰りいただくことができました。これからはこの土地で百年、二百年、それ以降も、宮古島をお守りいただきたいと思います。私も次の世代によい形で渡せるよう、神明奉仕に励みたいと思います。

國恩祭

宮 城 豊

現在全国各地で様々なお祭りが行われています。それぞれのその土地だけにしかない特殊なお祭り、また全国的には全くの無名であったとしても、胸を張って誇りを持てる自分達だけの地元のお祭りが皆さんそれぞれにあると思います。私の地元にも自分達だけにしか出来ないお祭り、また全国でこの土地でしか行われていないお祭り、そして胸を張って全国に自慢出来る独特のお祭りがあります。本日はそのお祭りについて皆さんに紹介したいと思います。

私は実家である兵庫県加古川市に鎮座する八幡神社で神職として日々奉仕しています。私の神社は加古支部に所属していますが、その加古支部とお隣の伊奈美支部の神職が集まり合同で毎年行っているお祭りがあります。そのお祭りが今から紹介します『國恩祭』です。そしてこの國恩祭こそが私の地元が誇りますお祭りなのです。

加古支部・伊奈美支部とは、加古川市・高砂市・加古郡全域・姫路の一部・明石の一部

の地域の事で、かつての日本の行政区分で当てはめると播磨国（兵庫南西部の事で播州とも呼ぶ）の旧加古郡・旧印南郡になります。その加古支部十一社、伊奈美支部十一社の合計二十二社の神社が輪番で奉仕するのが國恩祭です。輪番制を詳しく説明しますと、加古支部から一社、伊奈美支部から一社がそれぞれ当番になり、毎年四月上旬と五月上旬にそれぞれの神社で二十二社の神職が集まり斎行されます。例えば平成二十三年は四月九日、十日に伊奈美支部の生石神社、五月二日、三日に加古支部の尾上神社で両支部の神職約三十名が集まり斎行されました。一つの神社に三十名程の神職が集まり、厳かに神事を行うというお祭りは日本全国でこの國恩祭だけだと思います。

そんな特別なお祭りですから、当然それだけの歴史があるわけですが、その國恩祭の始まりは一八三三（天保四）年の天保の大飢饉の頃です。この大飢饉は、寛永・享保・天明と並んで江戸の四大飢饉とされていて、主な原因は洪水や冷害、日射量不足で米が全国的な不作になり、特に東北地方（陸奥国・出羽国）は壊滅的な凶作になりました。各地でも餓死者が多数で米価急騰で深刻な米不足になり、各地で百姓一揆や打ちこわしが起こり、大阪では毎日約百五十～二百人を超える餓死者を出す大飢饉になり、それが一八三七（天保八）年二月、大阪の大塩平八郎の乱が起こる原因にもなりました。この播磨国でも被害

が酷く、大変人心が荒れ果ててしまったそうです。そんな大飢饉の勃発による荒廃を心配した旧加古郡、旧印南郡の神職が神社の組合組織の様なものを結成し、再生への道を開く為に共通の意識で繋がり、そして世の中の安泰を祈る目的で臨時大祭を斎行したのが國恩祭の始まりとされています。そして再び平穩が蘇ってからも、人々は大神様のお恵みに感謝を申し上げる為に、毎年両郡がそれぞれ一社づつ奉仕神社を定めて神事を執り行うようになりました。國恩祭の意味ですが、「國」とは自分を育ててくれた故郷のことを指し、「恩」とはその故郷つまり、産土の神に恩返しをするという意味です。國恩祭とは、つまり郷土の発展と人々の繁栄・安泰をお祈りし、目には見えない日頃の神のお恵みに対して感謝の念を捧げることを本来の意味とするお祭りであります。

今年は、私は五月三日に加古川市の尾上神社の國恩祭に奉仕させていただきました。当日起きて身支度をする時から独特の緊張感があります。往路の車の中で感じる爽やかな五月の風、青空に伸びる木々、綺麗に装飾された御本殿等まるでその全てに命が宿っているようでした。そして総代さんや地元の氏子さん、裏方の方々の献身的な姿を目にしますと、自然と感謝の気持ちが湧いてきました。

よく考えてみると、この國恩祭の大切さがわかります。森羅万象ありとあらゆるものに

神様が宿っていることを再確認し、神道が日本人の生活の一部であることをあらためて実感します。

それぞれが住む郷土の守り神、つまり産土神の神霊は氏子崇敬者、そして我々地元の仕事の献身によってより洗練され、より輝かされるものなのです。神様は常に私達の傍に寄り添って、見守り、私達と共に生きて下さっているのです。そんな神様と共に生きていくことはとても幸せなことなのです。

國恩祭はもちろんのこと、皆様それぞれの土地の神様にもより美しいお姿でこれまでと変わらず私達と共に暮らしていただく為に、皆様方の真摯な姿勢が必要になってきます。

この混迷の世の中ですが、私達が幸せに生きていく最善の道は、産土神を祭り、神様の恩恵を実感して、只ひたすら感謝、感謝の心を捧げ続けることだと思います。

(兵庫県 八幡神社 禰宜)

日本の心

宮 本 優 子

先月二十二日和歌山県田辺市において、天皇皇后両陛下をお迎えし、第六十二回全国植樹祭が執り行われました。

前日から雨が降り、当日朝から土砂降りになったのであります。家族全員で奉迎に向かいました。時間調整の為、喫茶店に入りましたら、店主が

「あんたら旗振りかね？」

と言つて尋ねて来ましたので

「はい」

と答えましたら、

「わしも午前中行つて来たんヨ」

いきなり大きな声で、

「ありゃー人間じゃないで」

「……」

「神様やなあー。あんなに降っていた雨が、天皇陛下が通る時はピタリと止んだんヨ」

「終わったら又、降った。人間にや出来ん芸当だよ」

「あのオーラ見てみ。やっぱ普通じゃないヨ」

「それにわしのそばに居た女の子、天皇陛下見るなりバタッて倒れたんヨ。慌てて抱き上げたら、今度は泣き出してしまった」

女の子は、

「生的美智子様見られたんやでー。顔があったんヨ。私なあ一生に一度死ぬまでに美智子様を見たいと思っていたら、こんなに早く、しかもこんなに若い年で実現して、びっくりしたんヨ。うれしくて倒れてしまったんヨ」と言っただけです。

「やっぱオーラが違う。人を倒すんやから」

隣の席でジュースを飲んでいた女の子、

「私も美智子様に見付けになってしまつて天皇陛下の顔見てないから、頑張つて時間つぶしてるんヨ」

「この旗もらって帰ってもいいんやろか。私の宝物にしたいんやけど…」

店主が一人つぶやいていました。

「天皇陛下、人間じゃない。神様や。わしらに天皇陛下がついている限り日本は大丈夫や」こんな言葉を聞いていましたら、ファーと心の中に温かいものを感じました。何か日本人の心の中には「天皇」というものがしっかりと根付いている様に思います。日本人の心を支えているのが「天皇」であるという事を実感してまいりました。

この植樹祭において、宮原神社の氏子である九鬼さんという方が招待され、晩餐会で一分間の会話が許されたそうであります。

「天皇陛下に『あなたは、何をされましたか?』と尋ねられましたので、『はい。私は、宮原神社に三百本の桜の木を植え、今では地元の人達が花見に来て下さっています』と答えましたら、『地域の人達は、幸せですね』というお言葉をいただきました」

と、嬉しそうに話をして下さいました。九鬼さんは、「みどりの少年団」を結成して四十年近くになり、現在、和歌山県みどりの少年団団長を務められており、今年も宮原神社に三十本のウバメガシの木を小学生と一緒に植えて下さいました。

木を育てる、植物を愛する心は、日本人にとって自然の行為であります。

この自然を想う心は、東北震災の中でも見られています。

あれだけの未曾有の災害の中でさえ、一本の梅の木に「この木を切らないで下さい」と書いた手紙がさがっていたのであります。母が、吾が子を捜しに家のあつた所へ戻った時、昨年一才のお誕生記念に植えた木が流されず残っていたのです。そして、それを知っていた知人が見つけ、紙をさげておいてくれたそうです。町全体が流され、瓦礫の山となつてしまった町に、小さな梅の木は花を咲かせていました。

そして、陸前高田市も一本の松の木を残しすべてが流されました。この松の木を「復興の木」として心の支えにしましたが、現在海水により枯れかけているそうです。あります。ニュースではその木を生かす為、大勢の人達が努力している様子が流されました。

有田市宮原町も安政の時代、津波に遭い、又、昭和二十八年七月十八日、長雨による有田川の決壊がもたらした水害で、町の九十パーセントはすべて流されました。その時、水神社の松の木とお寺のビヤクシンの木二本だけが残り、高台に祀られている宮原神社と数十軒が残っただけでした。神社参集所にも多くの人達が何日も過ごしたそうです。あります。有吉佐和子の『有田川』の小説の題材にもなりました。この時残った松の木は、昭和五十年に松くい虫にやられてしまいました。その後日、芽を出し二世代松として今も大事に

保護されております。大勢の人達を救った松でもあります。

このように、木に対する想いはどこから来るのでしょうか？

日本の神話の中に、素戔鳴尊の子、五十猛命がいらっしやいます。五十猛命は、天降ります時に多くの樹の種を授かり、天下りて筑紫より始め、すべての大八州国の内に種をまき育て、青山に成り、その後紀の国にお座りになったというお話がございます。

この神世の昔から木を育て、自然を愛する心、自然の大切さは、私達日本人の遺伝子の中に受け継がれ、そして相手を想う心が育ち、和魂である和の精神が培われ、あの未曾有の災害に遭っても冷静さ且つ、礼儀の正しさが、他の国の人々を驚かせたのであります。日本人の気高さを見直し、絶賛したのです。この自然を愛する心、共存共栄の心、日本人の心の支えであります「天皇」を仰ぎまつりて和の精神を貫く事こそ、我が民族が誇るべき「日本の心」だと思っております。

この自然に生かされ、自然と共に生きるという考えは、日本神道の神髄であります。

アメリカのホーキングズ博士は、人間の意識という目に見えない世界を数値で表す事に成功しました。この意識マップでは、大いなる自己の感覚、悟りの境地は七百〜一千であります。復讐心、非難の心は三十であります。また、全人類の平均値は二百三で、日本人の

平均値は六百二十であります。そして、仏教は九百三十に対して、日本神道は九百五十と出ております。

要するに、神の恵みと祖先の恩とに感謝し、世界の共存共栄を営む事が出来る日本人の心は、地球という舟の舵取りをしなければならぬ人達でもあります。

未来の子供達に明るい未来と、地球という舟を持たせてあげべき大人でありたいものです。

(和歌山県 宮原神社 権禰宜)

波上宮由緒

山崎勝男

此を持ちまして、月次祭の祭典滞りなく取り治め致します。

また、暑い中ご参列下さいまして、有り難うございます。

見たところ今回初めてご参列の方も多数お目見えですので、当宮（波上宮）の由緒につきまして、少しお話をさせていただきたいと思えます。また聞かれたことのある方は、今一度当宮についての話を思い出してもらえれば幸いに思えます。

当宮の創始年につきましては定かではございませんが、遙か昔の人々は海の彼方（ニライカナイ）の神々に、豊魚・豊穰又平穏な生活を祈っていた祈りの聖地の一つが、この東シナ海に面した波の上の崖端であり、拝所として日々の祈りを捧げたのが始まりであると記されております。

また波上宮の御鎮座伝説に「南風原に崎山の里主なる者がおり、毎日釣りをしていた。ある日、海浜で不思議な『ものを言う石』を得て、以後この石に祈りを捧げ、豊漁を得す

る事が出来た」とあります。

ここだけを聞いてみると、当宮となんの関係があるのだろうかと思われるのですが、この石は光を放つ靈石で、南風原の里主が大切にしていたのですが、諸神がこの靈石を奪わんとした所、里主は逃げ、波上山（現在の波上宮）に至った時「吾 熊野権現也 この地に社を建てまつれ 然からば国家を鎮護すべし」との神託（神のお告げ）があり、この神託を王府に奏上した所、王府は社殿を建て篤く祀ったと伝えられています。以後、中国・朝鮮・大和などとの交易（琉球王府直轄事業）基地であった那覇港の出船入船は、波上宮の鎮座する高い崖と神殿を望み、出船は神に航路の平安、入船は航海無事の感謝を捧げておりました。

また、王府の神仰も深く、王みずから正月には列を整え参拝し、国家の平安と繁栄を祈り、朝野をあげ崇敬をあつめ、琉球八社【官社】の制が築けられると、当宮を第一に位し〔当国第一位の神社〕と尊拝されました。

明治になり、二十三年、官幣小社に列格して沖縄の総鎮守としてふさわしい社殿、聖地（神域）の結構をおりなしておりましたが、昭和二十年の大戦にて戦火激しく、当時の安原宮司が御神体を奉じ、摩文仁に避難したそうです。当宮の裏手に広がる東シナ海には何百

もの軍艦などが押し寄せ一斉に艦砲射撃を始めました。その戦火の中奇跡的に残ったものが、第一鳥居そばにあります官幣小社の石碑・第二鳥居・石積の外壁の一部が残っており現在は修復し残っております。

昭和二十七年には当時の上原宮司が復興に着手、ハワイにあります県人会・婦人会の募金により、昭和二十八年本殿及び社務所が竣工致しました。昭和三十六年には拝殿が竣工されております。このような経緯をえて現在に至っておりますが、皆さんが見ています社殿は現在の末安大孝宮司により平成五年、波上宮平成の御造営により、御本殿以下諸社殿「浮島神社・世持神社」が竣工されており平成十八年には、那覇市文化財に指定されております。

補足であります、参集殿（第二社務所）は平成十五年に竣工しております。

当宮の由緒をお話いたしました、一年を通して祭典行事・お祭りを斉行しております。次回の月次祭では、毎年五月十七日に地域の皆さま方又近隣の学校関係等いろいろな方々が参加致します行事、御神輿行列（獅子舞・御輿・旗頭・エイサー・じゅり馬）など約九百名位の行列ができます。

境内ではふるまい野点・戦前から行われております角力・琉球舞踊の奉納演舞・のど自

慢大会他いろいろと執り行われる、当宮の一番重要なお祭り（例大祭）の話を中心にお話をさせてもらいたいと思います。

本日は暑い中波上宮の月次祭にご参列下さり有り難うございます。

また口べたな私の話をお聞き下さり、有り難うございます。

また皆さまにお会い出来ますことを心より願ひ、皆さまのご健康・ご多幸を祈念致します、私の話を治めさせてもらいたいと思います。

本日はまことに有り難うございます。

（沖縄県 波上宮 権禰宜）

みたま祭

佐 古 建 彦

平成二十二年八月十一日岩国護国神社「みたま祭」にご参拝頂き有難うございました。本日典儀を務めました佐古です。直会の前に少し時間を頂き、「みたま祭」護国神社についてお話をさせて頂きます。

本日の祭員六名、伶人（雅楽奏者）八名、大祓詞奏上十五名、総勢二十九名は山口県神社庁岩国支部有志の方の奉仕です。この様に神職が大祓詞を奏上する様になって二年目です。そのきっかけは岩国支部神職の新年会・・・いわゆる飲み会の席でもうかなりお神酒も入っていた頃、白山神社の若い宮地秀尚くんが「佐古先生六十歳を過ぎて何で神職に成ったんですか・・・？」と単刀直入に聞いてきたので・・・私は四国八十八か所歩き遍路に出た話をしたのです。

海外を飛び回っているうちに日本人の宗教観に興味を持っていたし、二か月前に弟をガンをで亡くし、その「み霊を和める」為に歩き遍路にでたのです。

高知県の土佐市を過ぎて三十六番青龍寺の手前だったと思います、彼岸花が辺り一面に咲き、柿の葉が紅葉し始めていました、まさに日本の美しい原風景を愛でながら歩いてみると「お遍路さん、お遍路さん、少し休んで下さいナ」と優しい声が聞こえたのです。品のよいお婆さんです。私の出で立ちが全て白、まさに白装束で完璧なお遍路姿ですから、目についたのでしょね。

話は少し横道にそれますが、歩き遍路に出ると田舎の母親に伝わると、数日後母親から宅急便が届いたのです、お米・お野菜・そして風呂敷の中から、晒しのフンドシが三枚、しかも右下にお守りを、刺繍入りの手作り禪です。その中に短い手紙が入っていました「お父さん・正人の御霊を和めてください」と・・・私は泣きました、一人ですから思いっきり涙を拭うこと無く泣きました、嬉しかったのです、母親の愛情が・・・。

話を元に戻します。品のいいお婆さんが縁側でお茶を入れ、一息入れた所で「貴男は普通のお遍路さんと違う、何で歩くの?」と、通常はお遍路さんに「ワケ」は聞かないのがお接待のマナーなのに・・・。

でも、私は自分の想いを一気に喋ったのです。

親父と弟の供養、六十過ぎてこれからの自分の進むべき道「自分探し」、気力・体力の充

填、日本人の宗教観「神さま・仏さま」、自分が神主の次男坊、母親が田舎で神社を一人で守っていること等々……。すると、お婆ちゃんは「貴男は太夫さんの息子さんかね・」と嬉しそうに、「その人がお遍路さんとは、面白いネ」とそして私を座敷に上げ、ご自分は神棚の前に正座して「高天原に神留り坐す 皇親神漏岐 神漏美の命以ちて・・・」と大祓詞を最後まで力強くでも優しく見事に誦んじ、二拝二拍手一拝の作法。

次に仏壇の前に移動して「摩訶般若波羅蜜多心經 觀自在菩薩・・・」二百六十六文字のお経を淡々と誦んじ、私の方に向き直り、軍服姿の遺影を見上げ「主人は戦死しました、我々を守る為、お国を守る為に命を捧げました。私は主人を誇りに思い、息子三人を必死で育てました。日本人の原点は神さま・仏さまです。私は毎年九段下の靖國さまの『みたま祭』に参拝し、お父さんに会いに行くのです、息子たちも一緒にお参りします。天皇さまやお国を恨んだことなど一度もありません、日本人に生まれてきたことに感謝していますヨ」。

そして、「貴方は太夫さんに成るべくして今日まで色々な経験をして来たのです、一刻も早く田舎のお母さんの元に戻り、神主さんに成りなさい。但し、骨のある・骨のある神主ですヨ！」

品のよいお婆さんが神さま・仏さまの必要性、日本人の大切に出来た宗教観、そして、靖國さまの「みたま祭」を教えて下さったのです。

又、そこでお酒を酌み交わしながら話をしていると、先ほどの若い宮地くんが山口護国神社のみたま祭で山口国学院の受講生四十名が神前で大祓奏上をしたことを力説してくれました。

すると、誰かがすぐに「岩国でもやろう・大祓を神主で奏上して英霊のみ霊に感謝申し上げよう」と、そしたら、誰かが「まず隗より始めよ」と意気投合し、永田宮司を説得してその場で岩国雅楽会を設立したのです。すると、背中合わせで飲んでいた瀬田八幡宮の下村宮司さんから「佐古先生、うちの家内が和木中学の生徒六名に巫女舞を教えているので・・・出来ればそのみたま祭に奉納舞をさせて下さい」と嬉しい申し入れ、てな事が飲み会で決まったのです。ですからたまには飲み会も良いモノですね。

そろそろ時間が参りました、私から一つお願いがあります。

昭和天皇、皇后さまの靖國神社への最後の御親拝は昭和五十一年秋十一月です。それから十年後の昭和六十一年八月十五日終戦記念日の御製

この年の この日にも また靖國の みやしるのことに うれひはふかし

私は日本国民の半数以上が靖國神社・護国神社を正しく理解して、英靈に誠を示せば、中国・韓国からの『イヤガラセ』も消えると思っています。それには神職が静かに実践して、これからも皆様と共に靖國・護国神社を護って参りますので、何卒よろしくお願い致します。

直会の準備が整ったようです、本日のご参拝有難うございました。

(山口県 宇津神社 宮司)

吉田松陰先生語録より「いま、天下の大患は」

寺 本 正 徳

今朝も、向かいの公園より聞こえてくる声を背に、祭りの準備に汗を流しておりました。たつたいま、掃き清めた祭場に、熟年夫婦が、なんの迷う様子もなく、侵入します。

「あつ、その人、そこ入らんで」

「なんでやねん、儂ら毎日ここ通つてるがな、なんでここ通つたらあかんのや」
表情も露わに食つてかかります。

「見たら分かりまっしゃろ、そこ今から祭りする場所でんがな」

「なに、祭りする、儂ら知らんがな、毎日ここ通つてるんで、ここ通らんと、どこ通るねん」

「今日は、玉垣の向こうに回りなはれ」

「ほんま、朝から気分悪いで、ここの神主はうるせえな」

こんな捨て台詞を残して立ち去りました。

この遣り取りを遠くで見えて居られた一人が近づいてきて、

「神主はん、毎日あんなでつか」

「まあ、大体あんな調子ですわ」

「ほんま、最近の人、自己チューと言うか、天下無敵と言うか、あんな人が多いでんな」

「注意すると逆切れ、まるで反省の色ありませんで」

「神主はんも、大変でんな」

「大変も度を越えてますで、ほんま腹立ちますで」

「素直に謝りはりやええのに、ほんま我が身勝手にでんな」

「ところでな、この前もペット連れの婆さんと子供達が鳥居のところで揉めてるんです。よう聞いてみると、ペットが鳥居に小便かけたんです。子供達が、そこ神様いるで、罰当たるで」と注意したんです。すると婆さん、大激怒、ばかあ、こんなとこ神様いるかい、罰なんぞ当たらん」と食ってかかります。だって、ここ神様の鳥居やんか、罰当たっても知らんで、曾孫ほどの子供達に注意されたもんだから、この糞坊主め、花ちゃんの生理現象まで止めろと言うんか、この糞坊主を連発して立ち去りましたわ」

「あつ、あの婆さんですかいな、ありや近所でも評判の自己チュー、天下無敵の婆さんで

っせ」

「最近、あんな大人多いでっせ」

「ほんま、年取ったら可愛らしくしはったらええのに、日本人も困ったことになったもんでんな」

「神社にもいろんな人が来やります、それにしても、戦後の日本人は、高い教育を受けた筈なのに、自己チューというか、天下無敵と言うか、変な病気に罹ったもんでんな」

「神主はん、私がいいますにな、中途半端に豊かになった、私共の受けた常識が今日の非常識に、今の非常識が常識に変わったんでっしゃるか、それとも錯覚しとるんでっかな、多分そうでっせ、そう思いますわ」

「市内の神社でお世話になってる息子も大人のマナーの悪さが目立つと言っていましたわ」
「そうでっか、どこぞも同じでっか、神主はん、戦後教育に屹度、問題があったんですわ、日本人の受けた戦後教育の最大の欠点は、

一、積み重ねてきた、日本の歴史を否定しましたでっしゃろ

一、伝統と国風を否定しましたでっしゃろ

一、最大の欠点は、目に見えないことの大切さを教えなかったことですわ

これみんな、占領政策を鵜呑みにし、洗脳教育の罠にはまった、高い付けですわ」

「ほんま、政治も、国民も、将来のビジョンのないままに「でつかいことはいいいことだ」を信じ走り続けた付けですよ、この付けを取り戻すには、少なくとも、百年かかりますで」

「その通り、神主はんの仰る通り」

「今から、百五十年も前に、吉田松陰先生は今日にも当てはまる貴重な予言の語録を、残しておられるのですよ」

「神主はん、その予言の語録とはなんでつか」

「いま、天下の大患は」という語録ですわ」

「なるほど、天下の『大患』でつか、そいで」

「いま、天下の大患とは……世の中で、大いに憂うべきことは、国家が、国民が、大いに憂うべき事態にあることを知らないことだ、もし憂うべき事態、理由がわかれば、どうして対策を立てないのだ、対策を立てなければいけない。

『松下村塾に集う同志よ、いま立ち上がれ、松下陋村と雖も、誓って神国の幹たらん、必ず日本の骨幹たれ……なぜなら、日本国は神国だ。皇神の誓ひおきたる国な

らば 正しき道の いかで絶ゆべき」

「なるほど、神主はん、その教えようわかります、松陰先生の活躍された徳川時代は、国家的にも、政治的にも末期現象を呈していましたもん」

「そうです。内憂外患、内部抗争の激化、加えて欧米諸国の不平等な圧力、等々激動の時代でした」

「なる程なあ」

「松陰先生は、この現状を大いに憂い、いま国に新たな魂を植え付けなければいけない。このままでは、日本は滅びる、滅ばせてなるものか、例え幕府の權威は、失墜しても、諸君こそ、日本を救う骨幹たれ。立ち上がれ、行動せよ、尊王攘夷」に向かつて突き進め、いま、天下の大患は、と日夜檄を飛ばされたんです。大雑把に言うと、この檄を受けた、松下村塾の志士たちが、明治時代を創生したんです」

「なる程、神主はんの仰る意味が分かります。いい勉強になりました。それでその語録とやら、読ませてくれはりまへん」

「どうぞ、松陰先生が、百五十年も前に鳴らされた「天下の警鐘」を検証してみて下さい」

「神主はん、一つだけ言わせて。東日本大地震被災された方に心からお見舞い申し上げます。ところで、元の官房長官が『自衛隊は暴力装置』と公言してみたり、阪神淡路大震災の時、『自衛隊は違憲だ、その自衛隊員より物資受け取るな』とビラを配った議員が閣内にいたり、全く無茶苦茶な発言を繰り返してますわ」

「ま、困った国家になりましたな。私からも一言、日本の息吹五月号に、こんな川柳がありました『大鯰、反日首相に、怒るなり』」

政府が悪いなら、それを選んだ国民にも責任がある。マニフェスト詐欺に引つかかった国民よ、この大震災を機に目をさませ、大鯰が言ってますわ。

(大阪府 稻荷神社 禰宜)

魂氣張る春が来た

波 多 野 學

民俗学者の柳田国男先生が、『海南小記』と云ふ本を書かれてゐます。琉球沖縄県の南の島伝ひに、日本に稲が伝へられたルーツを解かれてゐます。春は南の島、沖縄よりやって来ます。

恩頼と書いて「みたまのふゆ」と訓みます。神様の「みたまのふゆ」です。冬の語源は、魂がじつと籠って、その魂が殖ゆる季節の「殖ゆ」に由来します。神様は一年を通して自然と共にあります。自然界の一員である人間も、じつと春が来るのを待つてゐます。

三月に東日本に国難とも云へる大震災が発生しました。電子画像^{テレビ}には明日への明るい希望を託す「春よ来い」の歌が流されてゐます。古今集に

袖ひぢて結びし水のこほれるを 春立つけふの風や解くらむ

と歌つてゐますが、立春は待ちに待った春の到来です。万葉集には額田王が「もみぢをば取りてぞしのぶ」と秋が好きだと歌つてゐますが、私は自然の中で草木が一斉に芽吹き始

める、魂氣張る、その恩頼をいただける、生き生きと生きてゐることを実感する春が大好きです。

万葉集第一番の歌は「籠よみ籠持ちふくしもよ　みぶくし持ちこの丘に　菜摘ます児家聞かな……」に始まります。野山で山菜を摘むのは、恩頼をいただいて病氣知らずの健康につながります。光明皇后は施薬院を設け、春の野で薬猟をしてゐます。

春さきにまず芽を出すのが、露の塔や土筆です。土筆は売つてゐるのは、十センチほどの小さなものですが、丈が四・五十センチにもなるのをご存じでせうか。河の土手や畔にたくさん林立します。その胞子の飛んでない土筆が鷺掴みに採れます。御浸しや玉子綴は春の風物詩です。袴を取るのに手間がかかりますが、水に浸して取ると指先に灰汁あくも付かず、袴も剥し易くなります。

薇せむぎ、これは雌雄異株で綿帽子で覆はれ、雌株は胞子が大きく丸くなつてゐます。同じ株から毎年新芽を出しますので、全部採らず芯の新芽は残してをきます。欲張つて根元から採ると固く筋張つてゐるので、ポキンと折れるところから採ります。灰汁も強く繊維も確かりしてゐますので、少し長く湯搔きます。冷凍保存もできますし、かび黴のこぬやう干しておいても水に戻せば元のやうになります。

蕨わらびは陽当たりのよい方へ地下茎をどんどん延して繁茂し、次から次に生へてきますので、いくら摘んでもかまひません。昨年の蕨が茶色く倒れてをりますので探すのに苦労はありません。陽当りのよい処に立つ青蕨と日陰に立つ赤蕨の二種類がありますが、味は変はりません。繊維が柔らかく、湯搔き過ぎると流れてしまひます。筍と同じで冷凍できません。湯搔かず塩漬けにし、押をしてをけば水があがり、空気に触れないやうにしてをくと、長く保存できます。

櫨たらが芽吹きます。刺だらけの先端に新芽が開きますが、暫く待つて最初の新葉を残して、芯の新芽だけを採ります。新芽を全部折り採つてしまふと櫨の木は枯れてしまひます。

産毛で覆はれた香りの強い、緑濃い独活うどもほんとに春を感じさせます。

猛宗竹の筍も土を盛り上げ出てきますが、黄色い芽を見ただけで、どの角度から鋏を入ればよいか解らなければ、一番美味しい株のところを碎いてしまひます。

芹も水の湧くところにたくさん生へてゐます。水の湧く山奥に行けば天然の山葵わさびも採れます。

欲と二つで我を忘れて、これでもかと云ふほど多く採つて帰りますと、まずおつ家内より、こんなに採つてきてどうするの！と叱られます。山菜をそれぞれに仕別けして、釜や

鍋で湯搔くだけでも、時間も手間もかかります。

筍なんぞは、春の息吹きを分けてあげやうと近所に持つて行つても、こんな大きな筍を湯搔く鍋がない、皮を護美に出すのが大変と、あまりいい顔をされません。折角だったら湯搔いて持つてきてくれたら有難いのにと云はれます。

来る日も来る日も、これでもかと云はんばかりに憎^{にく}恨^じのやうに山菜を喰はされることとなります。

でも魂氣張る春です。自然の中で恩頼をいただいて、生き生きと生命が蘇へります。

日本人は遠い昔から、自然の中で病氣知らずの薬草の山菜で生かされてゐることを覚り、そのみ恵みをいただきながら、食文化の歴史を大切に育くみ生活してきました。現代の自然を知らない人達が何と云はうが、健康第一、長生きの秘訣と、山菜採りを続けてゆくつもりです。

(福岡県 高見神社 宮司)

伝える命、伝わる命（陸前高田の希望の一本松より）

村 瀬 佳 子

余震の続く東日本大震災。三月十一日、押し寄せる津波、地震の被害は言葉に尽くせるものではなく未だ生々しく心と体に迫ります。

たった一人生き残った人、大切な人を亡くした人、想像を超える悲しみが伝わります。中でも見えない物の恐怖、原発の事故が頭から離れませんでした。私は広島生まれ、被爆者二世です。被爆と被曝との違いはありますが、とても他人事とは思えません。

昭和二十年八月六日、広島に原子爆弾が投下されました。広島街は一瞬にして吹き飛び、七万人が死に、その年の暮れまでに十四万人の人が亡くなりました。

沖縄戦で犠牲になられた方と同じく、無差別かつ残虐に一般市民の上に爆弾を落とされたのです。

私の祖父は、爆心地から半径約二キロで被爆、全身に大火傷を負いました。目の前にいた人は皆吹き飛び、目が覚めたら自分しか居なかったのです。物の陰にいたという偶然が

祖父を生かしたのです。付近生存者二人のうちの一人でした。その後祖父は『自分は神様に助けていただいた』という思いを一筋にして神社への奉仕で一生を終えました。私の父や祖母、父の姉妹も爆心地から半径四・一キロで被爆。

今回の地震の後、原発問題でうろたえる私に叔母が『叔母ちゃん六十五年以上も前に被爆したけど、生きてるよ。大丈夫、心配しんな』と励ましてくれました。その言葉は半世紀を超えた説得力のある言葉に感じ、私は動揺するのを止めました。

思えば、人というものは、何時、どのような状況で亡くなるか分からないものです。私は何故この世に生きているかこれには二つのドラマがあります。それは、父が原爆にあつたけれど生き残ってくれた事。そしてもう一つ、母の母、私の祖母が亡くなった事です。

祖母は昭和五十一年十二月二十三日、他家のお通夜に行く途中の横断歩道で、記事を間に合わせようと新聞記者の運転する猛スピードの自動車に轢かれ、死んだのです。五十八歳でした。母は泣きに泣き、怒りに怒って、絶望して暫く立ち直れなかったといひます。そのような中、父は母の為に祖母の生まれ変わりである「女の子を」と母を励ましたのです。父は周りの人に「絶対に女の子しか生まれない」と言い切り、毎日神様にお願ひし続けたのです。

そしてそれは現実となり母は間もなくお腹に子を宿し、昭和五十二年十一月十八日無事女子を出産したのです。そうです。私は神様とご先祖と両親のお蔭でこの世の中を生きる希望を与えられたのです。

今回の地震で大変な御苦勞をなさって居られる一人に私の先輩でもあり、また同志でもある岩手県陸前高田市の女性神主、佐々木美津子先生が居られます。佐々木先生は陸前高田の松原に一本生き残った「希望の一本松」伝える命、伝わる命の事を教えて下さいました。「がんばっぺし」を合言葉に地域の方と心をつにして奮闘して居られます。仲間が流されたけど、たった一本残り真っ直ぐ立っている。しかも、松という字よく見ると木に公と書くのですね。松はただの木ではないのです。「木」は「君」を差し「公」は「社会人」を意味します。この一本松には国と自分とが一心一体となって国家繁栄を目指す役目があるのです。昭和二十一年、終戦直後の国民苦難の時代、昭和天皇は次の様に詠まれています。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ

松ぞををしき人もかくあれ

犠牲となった沢山の尊い命の狭間で生き残った人は尊い命と使命を頂いたのです。

そして何より私たちは天皇さま皇后さまに祈り守られている事を忘れてはなりません。
昭和天皇は

わが庭の宮居に祭る神々に

世の平らぎをいのる朝々

と、世の中全ての事を祈って下さる大御心を伝えて下さいました。今上陛下におかれても、
山荒れし戦の後の年々に

苗木植ゑこし人のしのばる

と先の戦争の復興に心を寄せられ、平成七年に起きた阪神淡路大震災の復興を見守られつ
つ

園児らとたいさんぼくを植ゑにけり

地震ゆりし島の春ふかみつ

と詠まれています。そして、今回の東日本大震災でも痛みを分かち合って国民と共にあつて下さいます。だから大丈夫です。私達は絶対にこの苦難を乗り越えられます。また、被爆地ヒロシマから懸命に立ち上がった人間として被災地に心を寄せ続けましょう。七十五年間草木も生えぬと言われた広島は今、緑と人々に溢れているのです。

(広島県 長束神社 権禰宜)

祖訓を嗣ぐ

山下 裕 嗣

まず、お断りしておきますが、祖訓を嗣ぐの「嗣ぐ」は敢えてこの字を充てております。よくご覧下さい。私の名前に使われております……。

神道は天地悠久の大道であつて、崇高なる精神を培ひ、太平を開くの基である。神慮を畏み祖訓をつぎ、いよいよ道の精華を発揮し、人類の福祉を増進するは、使命を達成する所以である。

ここにこの綱領をかかげて向ふところを明らかにし、実践につとめて以て大道を宣揚することを期する。

皆さまご承知の「敬神生活の綱領」前文であります。我が神社神道の精神を集約したものであります。ここに「祖訓をつぎ」とあります。祖訓とは字の通り、「祖」＝親、ご先祖様、大もとですね。「訓」＝教える事、伝える事。「祖訓」は基つ教え、一般に先人の教えであり、家庭では「家訓」、何々家の代々の教えとなります。

神道の心は、わが国の心でありますから、この綱領は日本人の精神の向かうべき所とも言えます。

先般の東日本大震災においては、東北地方太平洋沿岸部を中心に、甚大な被害が出ております。その地震本体の規模もさることながら、大津波の被害、原子力発電所の放射能汚染の被害など、多くの国民が被害を被りました。実に死者は一万五千余名、行方不明者は八千余名、避難を余儀なくされた方々は十万名を超えるとも云われます。まさに未曾有の大災害となりました。

そんな大災害の中で（特に津波被害についてですが）、岩手県宮古市も多くの被害を被った地域です。しかしながらそんな宮古市の一角、姉吉地区は家屋の津波被害は一切無かった地区なのであります。地区の高台に一つの記念碑が建てられています。海岸の姉吉漁港からは実に距離八〇〇メートル。海拔六〇メートルの所に建てられた記念碑。実は明治二九年の三陸地震の際にも、昭和八年の三陸地震の際にも大津波が押し寄せ、実にこの碑の下まで押し寄せたという事です。漁港に近い低地にあつた集落は全滅し、数名しか助からなかったのであります。そこで住民らが記念碑を建て、地区の教訓としました。

記念碑にはこう書いてあります。

高き住居は兎孫に和楽。想へ慘禍の大津浪。此処より下に家を建てるな。

明治二九年にも、昭和八年にも津浪は此処まで来て部落は全滅し、生存者僅かに前に二人後に四人のみ。幾歳経るとも要心あれ。

今回の大地震による津波は、実にこの碑の五〇メートル手前まで押し寄せました。しかしながら、昭和八年以降の姉吉地区住民はこの碑の教えを守り、この碑より下には住居を建てなかつたのであります。そのおかげで、家屋への津波被害は一切無く、まさに祖訓を嗣いだ住民が、難を逃れる事が出来たわけであります。

訓はまさに道徳であります、先代先々代と続くご先祖様の経験を以て教え導かれるものであります。僅かな人生の年月に於いて、経験し得ない事も多々あるかと思ひます。その足らざるところを、しっかりと補つてくれるのが祖訓なのであります。

現代は文明が進み、技術が発達し、何事も出来ないものは無いと言うまでに発展しております。しかしながら、大事なものを置き去りにしてきたのではないのでしょうか？

我々生きとし生けるものは、生かされて生きているのだという事を忘れてしまつてゐるのではないですか？それは大自然の摂理とも言える、忘れてはならない、或いは逆らう事の出来ない礎であるという事を！

先般の大津波の被害についても、誤解を恐れずに申し上げますと、海のそばに住居を設けた事がそもその間違いであります。

全国各地で古代の住居集落が発掘されておりますが、何れも台地や丘の上に集落が設けられています。自然との関わりが深く、本来の意味で自然と共存共栄してきた古代人は、知らず知らずのうちに祖訓を嗣いで生活してきました。自然に逆らう事無く、共に生きる道を歩んで参りました。

姉吉地区のような津波記念碑は三陸周辺に約二〇〇基あると言われますが、何れも津波の用心や高台への避難を書いてあります。碑の多くは昭和八年の津波以降に建てられたようですが、七〇余年の年月はその惨状を風化させ、祖訓として伝わらなかつた地区も多かつたようであります。

先日メディアでの特集で、ある学者もその見解を示しておりましたが、おそらく大津波被害の直後は、高台に住居を設け住まいしたのだと思います。しかし多くが漁で生計を立てた地域では、より便利な海岸部に住居を移し、やがて大惨事が無かつたかのように人が集まり始めます。津波がある事は知っていても、現代の便利さが優先され、そのうちに津波の恐ろしささえも忘れ去られてしまうのであります。

我々人間は自然の中で、生かされているのであります。また、自然の猛威には敵わないのであります。文明がどんなに進んでも、自然には勝ち得ないのであります。

大自然の摂理は、我々神道の教えであります。仏教やキリスト教などと違い、明文化された教義經典を持たない神道は、その字の通り神ながらの道であり、大自然と共に生きてゆく道であります。

その道を進む上での羅針盤が祖訓なのであります。祖訓は神慮を畏んで受け継ぎ伝え行くものであります。畏みは恐れの意味も含みます。大自然の摂理の中で、荒ぶる神たちの御稜威も、和魂の鎮めも神々の啓示であります。

我々はちっぽけな存在であります。人生で多くを知ったような勘違いをした方も居られますが、たった八〇年ほどの人生。わが国の有史以来二千数百年の中で起こった多くの事は、祖訓として受け継がれております。自分で経験して知り得た事は勿論重要ですが、経験出来ない事は「祖訓を我がもの」として歩んで行かねばなりません。

祖訓の最たるものは、大自然の摂理、神々の教えであります。その心をしっかりと嗣いで、敬神生活を送る事こそが、我が国民が向かうべき神ながらの道なのであります。

最後に申し上げます。「祖訓を嗣ぐ」に「嗣ぐ」の字を充てました。この字は親から子へ

嗣ぐ意味の字であります事を加えて、私のお話を終わらせて頂きます。

(石川県 白山神社 禰宜)

「瞼の母」お母さんの匂い

河本文夫

「軒下三寸借り受けまして申し上げます　—おっかさん— たった一言忠太郎」で始まる歌謡浪曲「瞼の母」、番場の忠太郎は長谷川伸原作の新国劇でございます。昭和三七年東映より映画化され、今も昔も切っても切れない母と子の絆を題材にした物語。多くの方の涙を誘った有名な作品でございます。お母さんは、成長期の子供にとっては、それはそれは、大事な心の支え、赤ちゃんは両親を選んで誕生してくるといわれています。魂の成長に必要な両親を自分で選び、この世に生を受けて様々な出来事を体験し、そして多くの大切な人に出会って魂を磨き、再び魂の故郷へと帰っていく。それが神道の教え、そして人生なのです。赤ちゃんは神様からの授かり物。それゆえ宮参りに、家族の中で魂のより磨かれているお婆ちゃんが、抱いて御祈願を受けられるのも、その表れの一つと申せましょう。ひところ、話題になりました「赤ちゃんポスト」。これは現代だけの現象ではありません。昔もあったのであります。しかしその昔は、生活が苦しく、やむにやまれず涙を流し、

我が子を手放した。即ち口減らしでした。しかし現在は昔とは全く違う豊かな時代、そこには、邪魔であるからとか、育てる自信が無いからとか、何か人間のエゴがかいま見れることを感じるのは、私だけではないと思います。

ここに小学校の女の先生と少年の話を紹介し、絆について人生の心の糧としたいと思います。

その先生が五年生の担任になった時、そのクラスに、服装が不潔でだらしく、どうしても好きになれない少年がいた。先生は少年の記録欄に、その少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。ある時、その少年の一年生からの記録が目に残った。その時の一年生の担任の先生は「朗らかで、友達にも親切。勉強もよくでき、将来が楽しみ」と記録してあったのである。何かの間違いだ、他の子の記録に違いない。先生はそう思った。二年生になると、「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」と書かれていた。三年生では「母親の病気が悪くなり、看護疲れなのか、教室で居眠りする」と。三年生の後半の記録には「母親が亡くなり、希望を失い、悲しんでいる」と記録してあった。四年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、少年に暴力をふるう」と記録されていた。ダメと決めつけていた少年のその過去を知り、先生の胸に激しい痛み

が走った。その子は、突然の深い悲しみを生き抜いている生身の人間として自分の前に立ち現れてきたのだ。その先生にとってそれは目を開かれた瞬間であつた。放課後、先生はその少年に声をかけた。「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強していいかい？ 分からないところは教えてあげるから」その少年は初めて笑顔を見せた。それから毎日、先生は職員室で無く、その少年のため教室で仕事をしながら、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。そして、授業で少年が初めて手をあげた時、先生は大きな喜びを感じた。少年は自信を持ち始めていた。

二学期の終業式の午後だつた。少年が小さな包みを先生に、勉強の御礼ですと差し出した。開けてみると、少し使われた跡のある小さな香水の瓶だつた。亡くなつたお母さんが使っていたものに違いない。先生はしばらく思案したが、そうだ、と思い、その一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。お父さんの帰りを待ちながら、部屋で独り本を読んでいた少年は、突然の先生の訪問に戸惑いながらも「あ、先生だ」と飛んできた。雑然とした玄関には、先生の体から、母の懐かしい、かすかな香水の匂いが漂っていた。それは、今まで決して忘れたことのなかった大好きなお母さん、優しかったお母さん、瞼に焼き付いているお母さん、その思い出が香水の香りと共に甦ってきた。少年は「ああー、お母さん

の匂いだ、お母さんだ！」と先生の胸に顔を埋めて、声をあげて泣いた。

六年生では先生は少年の担任ではなくなった。卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。「先生は僕のお母さんのようです。そして、いままで出会った中で一番すばらしい先生でした」

それから六年。またカードが届いた。「明日は高校の卒業式です。僕は五年生のとき先生に担当してもらって、とても幸せでした。おかげで希望の大学に進学することができます」そして十年、またカードがきた。そこには先生と出会えたことへの感謝と父親からの暴力の体験があることから、人の痛みが分かる人間になれたとも記され、こう締めくくられていた。「僕はよく五年生の時の先生を思い出します。あのままだめになってしまふ僕を救ってくださった先生を、神様のように感じます。大人になり、今社会人となって僕にとって最高の先生は、五年生の時に担任してくださった先生です。そして今愛する人にめぐり合いました。」そしてもう一枚のカードがあり、それは結婚式の招待状だった。そして一行「是非、母の席に座ってください」と書き添えられていたのであります。

これは、元聖心女子大学 鈴木秀子先生のお話であります。昨年秋でしたか、ある新

聞に掲載されており、大変心に残ったものですから、本日紹介させて頂きました。鈴木秀子先生のご経験なのか、お仲間の先生の経験なのかわかりませんが、この話の中には、担任の先生が心の母として少年の成長に大きな支えになった事など色々な教えを我々に投げかけてくれます。時間の関係でこれ以上はお話し出来ませんが、何かを感じ取って頂ければ幸いです。

(山口県 宮尾八幡宮 宮司)

ぬくもり

原 茂子

今年もいつもと同じように五月の第二日曜日（五月八日）は母の日でした。戦後アメリカの習慣を日本に取り入れたものだそうですが、日本人は慈しみ深い母の姿を胸に抱き、母親を大事にする心を古くから養ってきています。お花屋さんの店先には色とりどりのカーネーションが並んでいましたが今年はとても複雑な思いの一日でした。その日のテレビで東日本の被災地の様子が伝えられているのを見ました。母の日に全国へ出荷しようと温室栽培していたカーネーションも例外でなく全部駄目になったとのこと。けれどもひと月余り後には花を咲かせていたそうです。商品になりそうなのはほとんどなかったようですがその中から良さそうなのを摘み取り道端でにわかのお店を開きました。三百本のカーネーションは完売だったとのこと。「ようがんばったね」と一輪・一輪に語りかけ、手渡す折にはご自分の心のぬくもりを添えたのだらうと私は感じました。写し出された画面に白いカーネーションもありました。ついこの間まで元気で居てくれたかけがえの無いお母さんに

白いカーネーションを捧げた人が何人も居たと思うとやりきれない思いが胸いっぱいになりました。そんな人たちへのお見舞いに天皇・皇后両陛下が被災地を訪問なさいました。（被災地の人々の心の支えになりたい。困難を分かち合いたい。）との思いが込められたお言葉・ぬくもりのあるお言葉に多くの被災地の人たちがどれほど勇気づけられたことでしょう。仙台市の避難所では津波で家を流された女性が自宅の跡地に咲いたスイセンの花束を「このスイセンのように頑張りますから」と言つて皇后さまに手渡しました。皇后さまはその花束を手にしてお声掛けを続けられたそうです。皇居へお帰りになられるまでずっと握られていたと新聞に書かれてありました。平成七年の阪神淡路大震災の折に神戸へお出でくださり、皇居に咲いていたスイセンを焼け跡に手向けられたことを思い起こしました。東北の女性のご自分の決意を伝えられましたが、関西の私達の感謝の気持ちも添えてくださったように思えてなりません。（被災地の負担にならないように）とのお心遣いで日帰りのお見舞いをなさつておられるご高齢の両陛下（天皇様七十七歳・皇后様七十六歳）には、とっても厳しい日程とご推察申し上げますのに、いつも変わらぬおだやかなお顔で話しかけておられるご様子に（有り難うございます）とテレビの前で思わず頭が下がります。釜石市ではお声かけの最中に余震があり、皇后様のそばに居た女性が揺れに驚き思わ

ず皇后様の手を握ってしまったとのこと。皇后様はしっかりと手をとったまま周囲に「落ち着いてください」と声をかけ「今のような地震はたくさんあるのですか」と話しかけられたそうです。「手を出してはいけないと思っていたけれど・・・感極まっていました。ぬくもりのある優しい感触でした」と後に話したそうです。

女の子が髪を結わえるのに輪ゴムしかないのを知った若いお母さんがはぎれ布でかわいいシシュを手作りし送り届け、先方のお母さんから「娘が大喜びし学校にも着けて行っています」と返事をもらい「これからもささやかなことだけどほんとうに欲しいものを届けたい」と笑顔で話していました。

災害からもう丸三ヶ月が過ぎました。被災地の人はもう充分過ぎるほどがんばってこられました。これからは被災しなかった私達が頑張る番です。義捐金を差し出すのは当然のこと。被災者の方たちに喜んでもらえることをしたい・・・何ができるだろうかと私も考えています。

陸前高田市矢作にご主人を亡くされた後お宮の宮司を引き継ぎ地域のために一生懸命な女性がおります。同じ女子神職として通じ合う同志であり私のお友だちです。三月十一日の被害の大きさに不安になり電話をしても通じない。(いつ届くのか届かないかもしれないな

い」と思いつつ葉書を投函しました。テレビの画面に彼女のカタカナの名前を見つけたが町名が違って別人と解り一喜一憂もいたしました。そんなある日お宮に「み・つ・こ・で・す」と電話があつたのです。（生きて居てくれた）と涙が零れ落ちました。元中学校の先生だった彼女に「先生にお手紙だよ」と届けてくれた郵便配達員は教え子だったとか。自分の無事を喜ぶ間もなく、働き盛りの多くの教え子をなくしたことが、県外で就職していて親を亡くした教え子たちへの弔いの日が続いて体調も良くないことが感じ取れました。「何をどのようにしたらいいのか判らないの」との彼女の苦しい声。「あなたの笑顔とつてもすばらしい、とわたしはいつも思っていました。今はあなたのその笑顔が最高の励ましになると思うよ。子どもにも大人にもあなたの笑顔が一番よ」一口に笑顔って言うけどこんなときに笑顔で徹すのは至難の業だとわかっています。でもあなたの笑顔にぬくもりを感じ、苦しみや悲しみを乗り越える支えになると信じています。そして彼女には必ずやご奉仕の神様のご守護がいただけると思っています。わたしに今できることは彼女と交信を密にしてぬくもりのある言葉と小さな支援を永く永く届けることだと思っています。

（大阪府 夜疑神社 権欄宜）

犠牲の心と英霊

佐 古 一 洌

ノーベル賞受賞者に、アレキシス・カレル博士という方がおられます。そのカレル博士は『生命の知恵』という本の中で、

人間は生きものだからⅡ生命の法則Ⅱに従わなければ、栄えることは出来ない。それには、大事な掟が三つある。

第一の法則 個体維持の法則

人間は生まれて来た以上生きなければならぬ。生きたい！と言う命の叫びに忠実に従わなければ、栄えることは出来ない。

第二の法則 種族伝播の法則

そしていつまでも永遠に生きたい。だが人間の寿命には限りがある。いついつまでも生きようと望むならば、子々孫々を栄えさせなければならぬ。

第三の法則 精神向上の法則

しかし、人間はただの動物ではない。人間には精神がある。人間を真に人間たらしめる精神を向上させて、人間らしく気高く生きなければならぬ。

平和な時には、三つの法則を同時に守ってゆけるが、万一、異常な事態が生じた場合はどうすればよいのか。カレル博士は言います。

低い方の法則を捨てて、より高い掟を守ってゆかねば栄えることはできない。たとえば、国が外国と戦って、民族の大きな命があやうい時には、一人一人はどんなに生きたくても、個人の願いを乗り越えて、民族の大きなイノチを守らなければならない。

お国のために命を捧げられた三百万の英霊。靖国護国の神々こそ、生きたいという個人の切ない願いを踏み越えて、日本民族の大きな生命を守りぬかれた尊い人びとであります。

○

愛媛県伊予市の市会議長をつとめられました武智惣五郎さんは戦争中の出征風景を次のように語っておられます。

母のない三人の幼な児を残して出征する父親があつた。一番上が五つ。中の子が三つ。一番下が一年と五ヶ月。この末っ子が生まれたとき、母親は産後の肥立ちが悪くて亡くなった。

「あいつ戦死したら、おさない三人の子供が両親のないみなし子になるが、さぞかし子供に思いが残ろうのう・・・」村人が心から同情しておりました。

さて、駅頭で列車の到着時刻がせまった。ふと気がつくと、出征する父親の姿が見えない。子供たちは？と探してみると、子供たちの姿も見えない。ギクツとしました。まさか、子供に心引かれて逃げたわけでもあるまいが？・・・たまたま便所に行きたくなって、駅の便所に駆けこもうとして、ヒョイと便所の板塀のうしろをのぞいた。いたではないか。便所の板塀のうしろに、三人の子供たちを並べて、人目をしのんで最後の別れを惜しんでいる。

五つの子をだきしめて頬ずりをし、三つの子をだきかかえて頬ずりをし、最後に一年五ヶ月の末っ子になったときには、たまりかねたんでしょう。頬ずりをしたあとに、自分の舌でほっぺをなめてやっている。そして三人を一列に並べ、「お父さんの顔をよーく見ておいてくれ。必ずとも、お父さんの顔を覚えていてくれ。万一、お父さんが亡くなっても、伊予神社の神さまが、お前達を守って下さるから、元気を出して生きてくれよ・・・」

やがて列車に乗りこんだ父親は、窓から上半身を乗り出して、最前列の三人の子供た

ちの顔を喰い入るように見つめていた。

親類が一人ずつ預かることになっていた。汽笛が鳴った。ゴトンと列車が動く。その瞬間、三人の親類が三人とも、何も申し合わせていたわけではないが、思わず知らず、子供を一人ずつ抱き上げた。

「これが最後になるかも知れんゾ。よく見ておけ！」

こらえこらえていた子供たちが、ワーツと大声をあげて泣き出した。子供たちは父を慕うて、いつまでも、いつまでも泣きつづけ、プラットホームから立ち去ろうとはしませんでした。

母のない三人の子供達を残して、一体どこの父親が死にたいものでありますか。けれども、悠久三千年の歴史を誇る日本民族の大きな命を守らんが為に、敢えて惜しい命をちぢめられたのが、三百万のご英霊であります。これを尊い「犠牲」とよぶのです。アレキンス・カレル博士はキツパリと言っています。

「犠牲の精神のない民族は亡ぶ」と。

こんにちほど国民が、生命よりも価値あるものがこの世にある事を忘れた時代がありませんか。

日本民族は、滅亡の寸前にあると言わなければなりません。教育勅語の「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ」ることは、間違いであるどころか、こんにち我國民が早急に取り戻さなければならぬ崇高な倫理であります。

我々は犠牲になられ、日本国を護つて下さったご英靈に対し、いつまでも慰霊と感謝の誠を捧げて行かねばなりません。これが日本人としての、否人間としての道であることを、声を大にして申し上げたいのであります。

(京都府 松尾大社 宮司)

日本民族の教へ―祖先崇拜・自然崇拜―

村 田 和 之

去る三月十一日、国内観測史上最大といわれる、三陸宮城県沖を震源とするマグニチュード九、〇の大地震、又、その影響で起きた大津波、福島県の原因事故と続き、未曾有な東日本大震災で尊い命を亡くされた犠牲者のご冥福と震災に遭われた方々に喪心よりお悔みとお見舞いを申し上げます。

昭和二十年の終戦より昭和天皇は日本全国を巡幸され被災者の人々を励まされてきましたが、一番気掛りであろう沖縄県は願ひむなく神去られました。

この度、この沖縄で念願の神道講演全国大会を開催実現することができ、この上ない喜びと感謝を今席を借りまして関係各位に厚く御礼申し上げます。

日本人にとりまして沖縄は忘れることのできない激戦地、多数の犠牲者を生み深い悲しみの中にも負けず日本本土復帰の願い一つに立ち上り三十九年前、ようやく念願叶って復帰したことは忘れることはできません。

六十七年前、第二次世界大戦は終わりました。今も当時の激戦を物語る、大田実司令官率いる第三十二、軍司令部の残壕、国内唯一の地上戦が争そわれ住民も巻き込む二十四万人の犠牲者、ひめゆりの塔、数多く残る慰霊碑等、当時の様子を今に残し、見る度に心を痛める一人であります。

永い苦難を乗り越え復興された今の姿を見る時、日本民族のねばり強い性格、先般の東日本大震災の中にも災害に負けず地域の人々が協力して立ち上っている姿にも似て、日本民族のやさしくも気品の有るねばり強い日本人魂を感じ、必ずや東北地方も沖縄と同じく復興するものと確信するものであります。

先般来より、「イラ菅」そのままの未熟な政党により、日替りメニューで、後手後手の政策の取り組み、前総理より「ペテン師」とまで呼ばれ対応の遅れもさることながら、世界各国より笑われ見放され迷走する姿は哀れとしか言いようがありませんが、皆、国民一人一人が選び投票した結果がこの様になっていることを忘れてはいけません。

不思議なことによく見ると政党が替る度に大災害が起きている様が見受けられます。神戸の大震災時は村山政権、菅政権も又、しかり、我々日本民族に警告を発し天罰をあたえている様に思えてならないのであります。

日本民族は琉球と同じく自然の偉大な力の中に神を見出し、恐れ、自然と調和が取れて生かされ、微力な人間の力では自然を左右などなせることはできず、祈るほかは無いと教え伝えてきたのであります。東北地方の原発事故に見るように近代化ばかりに気を取られ、自然を無視した結果の報いであると言えは言い過ぎになるでありましょうか。近代科学という破壊力のあるエネルギーは、上手な人間の働きかけ次第では、エネルギーの活用はできますが、失敗すれば福島県原発事故のように大きな災害を被（こうむ）るのは当然の成り行きであります。

私は沖縄を訪ねる度に、沖縄に伝わる自然崇拜の姿を見て琉球神道といわれる教えを学ばなければいけないと常々思う一人であります。

沖縄は琉球神道が教えた自然崇拜と祖先崇拜の教えを今日迄大切に伝えて参りました。日本神道と祖を同じくすると言われる由縁であります。

第二次世界大戦で、日本魂を恐れた占領政治は日本の根本となる魂しいの入れ替えを計つてきました。今、正にその戦略通りの結果が現われ荒廃した世相となつて参りました。

近代科学技術文明は一見安易に見られますが、進み過ぎると自然を壊し人類にもその破壊を生み出す事実を福島県原発事故を体験し肝に銘じておかなくてはなりません。

毎日TVが放映しています原発事故、日に日にその恐ろしさを報道していますが私も広島の原因被爆者の一人、その恐ろしさは身を持って体験しております。昭和二十年八月六日、午前八時十五分、一発の原子爆弾により一瞬にして七万人が、十二月迄に十四万人の人命が奪われたのであります。その恐ろしさを表わす為に被爆の爆という字が広島の場合には漢字の左側に「火」の字を使用し、少しづつ漏れる福島の場合は「日」の字を使用し区別して教えているのであります。

琉球神道は日本神道と同じく琉球王国時代には祭政一致の国教として栄え、神々に豊穰を祈り太陽を最高神として崇拜し、東方に太陽のある聖域を意味し、西方に死の領域があると考え、多神教で人間は神世より生れ来て、又、神世に帰り、祭祀の時には守護神として集落に還ってくるもので、生者の一番近い立場に祖霊神として鎮座し崇め敬う信仰は正に日本の神道そのものであります。

「御嶽（うたき）」という自然の聖域を拝所として設け神を迎え豊作を祈願し、旧暦の八月には祖霊が家に帰ってくるという日本本土の「お盆」の行事が行なわれているのであります。

祭祀を司どる人は、ほとんど女性で「ノロ」や「ユタ」として霊力を持つ女性が司どつ

ており青森県の恐山に伝わる口寄せの「いたこ」に似ております。秘祭の「イザイホー」は琉球王に継がる靈感のある人が神女の代表で伊勢神宮の斎王にも当る存在であります。

又、琉球の祖霊信仰は祖先の霊が一族の守護神として敬まわれ、墓は「後生の家」として重要に考えられ明治以前迄の葬儀は風葬として営まれていました。遺体は洞窟等に三年間位、安置され自然の腐敗を待ち、後に洗骨して納骨し、大きな亀の甲墓は今もそのおもかげを残しております。

最近では葬儀の流行として家族葬が目立ち、密葬の様に少数の身内の人達でのみ営む葬儀が増えてきました。仏教界の代表が、お寺の檀家は現在の三分の一位に減るであろうと危惧されていると聞きます。墓地も無く納骨堂として一定期間借り、期限が来ると無くなってしまう、骨壺が新幹線の網棚に残され、落し物として扱われたり、散骨として撒き散らす等、先人を敬う心も無くなり何か寂しい姿ではないでしょうか。沖縄の新聞紙上では、おくやみの広告に多数の身内の人々の名前が列記される等、祖霊を思う姿が今にも伺えるのです。

私達は間違いなく親より生まれ、又、その親の祖先から生まれ継がって今があることを忘れてはならないのであります。

私達は自分から望み生まれ出てきたものではありません。神の計いにより神世より生まれ続けている人間であります。今に生きる生命を大切に、子や孫に伝え受け継ぐ教えを忘れては、この世は滅んでしまうのではないのでしょうか。

四十六億年前に地球が誕生し、三十六億年の年月を経て人間となり五十億分の一の割合で夫と妻の営みでこの世に誕生する生命、自然と人間、人間と人間とが譲り合い、親から子へ、子から孫へと和やかに譲り合い、譲り合う心で世界の大国とも親しく睦み合い一大家族の国家を造る為に、神武天皇は「八紘（はつこう）一字（いちじ）」と記され教え残されました。

「八紘」とは天つ下のこと、「一字」とは一家にする意味であります。譲り合い協力し合って世界を一つにし平和の国を造る理想の意味を「八紘一字」という言葉で表わし、教え導いているのであります。

ここ沖縄の地の開催に鑑み自然と祖先を崇め敬う二大思想を心新に肝に銘じ研修会最後の取りとさせて頂きます。

ご静聴ありがとうございました。

（広島県 長束神社 宮司）

私と沖縄 ―鎮魂慰霊の奉仕の日々―

大野 康 孝

昭和五十二年四月、只今は天皇陛下御側係御奉務の皇学館大学名誉教授、恩師鎌田純一先生の導きにより靖国神社の特命推挙を拝受、私は沖縄県護国神社後任宮司として彼の地に赴任しました。…大學卒業後未だ三年、青雲の志篤き二十六歳の若きでありました。

当時の靖国神社宮司は元皇族五代筑波藤麻呂先生、彼地の宮司は旧華族出身で宮司の御養子という深いご関係でした。その三好宮司が病に倒れ後任が居ないとの事…。

* * *

この年は沖縄県祖国復帰五周年、終戦三十三回忌という特に大事な年でした。

全国各地の遺族会や戦友会が沖縄へ沖縄へと続々と尋ね来たって巡拝、懇ろなる慰霊顕彰の祈りが盛んに捧げられた歳でした。護国神社への正式参拝、所縁の南部戦跡慰霊碑にての祭典奉仕…。南溟の輝く碧空の下、緑の風に濤々と響く海鳴りを聴きながら懸命に篤い祈りを捧げる日々に明け暮れたのでした。

…去った大東亜戦争末期、この島在りて祖国あり！県土生命財産全てを捧げ本土防衛の防波堤たらむと、山河の姿形を変え県民人口三分の一にも当たたるあまたの生命を捧げて、戸籍簿原本すらをも失するやの激しき戦いに祖国に殉じた純忠勤皇県沖繩…！

* * *

本土にては考えも及ばぬ奉仕参向当時の沖縄。国道に面した護国神社一の鳥居には無数の銃弾の跡が刻まれ、道向こうはフェンスに仕切られた実に広大な那覇軍港。超大型の軍艦が出入りし、戦車やジープ等の戦闘車両が一晩の内に数百千台も揚陸されます。

今以上に到る所が米軍基地なのです。戦闘ヘリやB52などの爆撃機・絶えず離発着を繰り返す最新の戦闘機が飛び交う北谷村や嘉手納基地には全くもって驚き、日米安保の現状かくもありなんと、南部戦跡の往時と比べ洵に口惜しく複雑な想いに涙が零れました…。

* * *

四月二十九日の天皇誕生日を前にした着任すぐのある日、その奉祝実行委員会が波上宮にて開催されました。波上宮はいつも沖縄の良識派・民族派の拠点でした。さすがに琉球八社七宮の総社、御神威の賜物であり、自ずからなる伝統的慣習なのです。

私は自己紹介に際し海軍壕参拝時の感想を述べましたが、この発言から「天皇陛下沖縄

県行幸奉迎推進」運動の事が併せて検討され、自ずとその名称や方策、趣旨等も協議され、大きなうねりが忽ちに起ったのでした。

「それでは私達が沖繩の真心をもって皇居奉仕に参上しよう。」皇居勤労奉仕団もたちまちに結成の運びとなりました。そのハウツーは先ず熊本から業者を呼んで始めました。

第一回目の奉仕団は大成功でした。昭和天皇の龍顔を指呼の間に仰ぎて涙に咽びつつ玉のお声を賜り、皇太子同妃両殿下よりも特別の感激のお声掛けを賜りました。

その後沖繩県の業者の方に引き継がれた奉仕の旅は、百回以上も催されたようです。

* * *

五月二十七日はかつての海軍記念日。海軍壕慰霊碑御前にて沖繩海友会会長西銘順次県知事以下、三百名を超す戦友会関係者多数参列の盛大な慰霊祭が開催されたのですが、私は特に、この沖繩方面海軍司令官太田実中将最後の訣別の電報「…（前略）…沖繩県民斯克戦へり、県民二対シ後世格別ノ御高配賜ラン事ヲ。…（後略）…」の玉碎に当たつての天皇陛下に対し奉つての、沖繩県民に対しての死を賭しての切なる懇請の電報に肺腑を抉らるが如き深い想いを抱きつつ奉仕したのでした。

日本国政府は沖繩の復興と名誉の回復の為に全力を投じ尽くさねばならないのです！

* * *

私の沖縄県護国神社英霊奉慰の覚悟は茲に極まりました。当時の沖縄県護国神社奉斎の御霊は十七万五千九百七十余柱。沖縄が祖国防衛の防波堤と果たした誇りの恢復と自覚こそが英霊顕彰の証であると……。そうして反面、今日の状況・戦後体制に対し大いなる怒りと悲しみ、反省の心を持っているのだと……。まやかしの平和憲法と一セットにして与えられた日米安保によって、祖国と更に二十五年間も分断され犠牲を余儀なくされた沖縄！

その事によって平和が保たれているといふ今日の日本の錯覚……！

* * *

私は遺骨収集の青年学生達を出来うる限りお世話しました。神社や自宅に泊めて社務の空いた時には、一緒に白の作業衣を着て供物と慰霊の祭詞をもつて参加しました。

戦後三十五年を経過しているにも、壕の中や南部の激戦地で氏名判明や完全一柱の英霊の亡骸を収骨した覚えがあります。遺骨を巻き込んでガジュマルの大樹と育った転生の姿に驚き、果たして喧騒の世に返してよきものかと大いに悩んだ事もありました。

米須の精神病院の裏手の山より印鑑と共に氏名判明の一柱を収めたときは、こちらが精神を犯されているのではないかと錯覚し、集落よりすぐ近くの真壁村のさとうきび畑の際

より日本刀を抱いた完全一柱の英霊を掘り起こした時の感応は忘れられません。

* * *

このような英霊奉慰の祭祀のみならず本来の神道宣布開顕の諸祭典をも奉仕しつつ、日々の奉務に尽力して参りました。沖繩の方々はやさしくて天地の神々と祖先をととても大事にされます。私の事も大事にしてくれ、寄り添ってくれる人々がやがて出来ました。その人々は何よりも祖先の恩を大事にして、血縁と出身地の誇りに生きている人々なのです。あの去った大戦の深い悲しみに耐えての頑張り、その明直な県民性はどのように培われ、共に助け合って生きてゆくその陽気な県民性は、一体どこから来たのでしょうか。

* * *

気が付けば満五年余の歳月が過ぎ去り、故郷から来年は本渡諏訪神社七百年式年大祭であるからの便りが参りました。帰らざるを得なくなりました。私は社家の嫡男なのです。ここまで来たって「天皇陛下を沖繩県にお迎え申し上げたい」という切なる祈りと願い、行幸推進運動の種が播かれ芽生えつつあったのですが、止むを得ません。

同志のリーダー一人一人に挨拶を交わしつつ詫びるという日々が始まりました。淡々として「そうですか、ご苦労様でした」と、更に濃密な日々が始まった友が大方でした。

私は一旦この人はと思い込めば、心からの友情を結びます。「静かに天下を睨んで生きる人々」や「男らしく矢面に立ち、仲間を同志を導き、火花を散らすような」熱い思いの硬派の強者に憧れ、自分もかく在りたいと思います。日の丸を高く掲げて民族自決の復帰闘争を戦い抜いた沖縄の地には多くのそのような人物が埋もれていたのです。

* * *

その中で以外にも涙を流し恥ずかしげもなく号泣、「やっぱり先生はヤマトンチューだ。俺たちに火を点けて茲まで来て帰るんだ。」と：「イヤ、今後は本土と沖縄を行き来し目的成就のために頑張る、すまんが暫く許して欲しい。」と言っても「一旦帰ればもう忘れるよ。先生あんたはヤマトンチューで、俺たちウチナンチューとは違うのだから：」と止まぬのです。同席の先輩親方は、困り果てた顔をしながら笑って「大野宮司あんたも惚れられたもんだ。若い衆がカタギになつて本気で沖縄の誇りに生きているんだから何とか頼みますよ」と頭を下げるのです。私はこのまま、ただでは帰られぬようになりました。

* * *

昭和五十八年四月三十一日私は退職しました。八月十五日にこの沖縄県御国神社の終戦祭に参列して帰郷することになりました。幸いにも手許には幾許かの退職金と、意外に多く

の皆さんより頂いた餞別がありました。最後の仕上げに当たっての活動資金となります。

それまでの間、私自身の鎮魂慰霊の英霊奉慰の旅を続ける事を決めました。

沖縄全県下各市町村の代表慰霊塔の御前に正式に遺族会の人々や行政自治体の責任者や有志を案内し、惟神なる慰霊の祭典を奉仕して県内各所をすべて巡拝するのです。

もちろん無報償です。

私が「祭り主」で「齋主」。国旗「日の丸」を掲げ、国歌「君が代」を奉唱しての慰霊祭です。沖縄本島の各市町村のみならず離島もすべて巡拝しました。慰霊碑の在る所すべてなのです。伊江島も伊是名島も伊平屋島も、粟国島も久米島も渡嘉敷島も慶良間島も、宮古島も下地島や伊良部島、多良間島もその他の各島々。石垣島 与那国島、波照間島も、南大東島にも参りました。戦没者が一柱でも出て慰霊碑が祀られている島のすべてを…。

* * *

このように、空を翔け海を渡り、大地を駆けての奉仕に明け暮れたのでした。相手方との連絡調整の都合もあり、計画的に事を運ぶ為に那覇の借家を拠点に、祭器具等の点検・神饌購入や資金の調達等雑事もあつて、悩み深いが純粹極まる祈りの日々となりました。

大方が同志後輩を呼び寄せての二人奉仕でした。車両を提供してくれた人もいます。

協力者もどこかで見ているのか、安心してくれているようでした。

この間、パラオ諸島の遺骨収集と神社再建の旅にも参加しました。パラオには那覇市壺屋の人間国宝・島常賀先生の製作された「シーサー三対」を持参し奉納しました。

* * *

やがて八月十五日がめぐって参りました。

何百万円であった資金もすべて使い果たし船代と飯代も底をつき、歯科医院経営の友人に三度目の無心をしてやっと旅費の工面がつかしました。

静かに八月十五日を過ごし、安謝港より、折からの台風接近通過を二日待っていた有村海運のフェリーに乗り込んだのが八月十七日午前十時頃だったと思います。大事な人々にも隠していたのですが二十五・六名程のごく親しき友がクーラーボックス一杯のオリオンビールと泡盛、山ほどの沖縄の珍味、そして弁当を差し入れてくれました。

* * *

護国神社奉仕中には二日と開けず顔を出し、親しくしてくれた公安警備の神山氏も中学生の子供二人を連れ愛車のフォルクスワーゲンで港に乗り付けてくれました。

別れの時が参りました。船の別れはとても辛いのです。

やがて出航。蛍の光の吹奏楽、そしてドラの音。両手一杯に握りしめた皆からの巻テープも忽ちに終わりをつけ風に舞うのです。港を出るまで千切れんばかりに手を振り続け、やがて倭口より一路北を目指す七千四百屯フェリーは大きく右に曲がり、速度を上げて荒海の真只中を揺れに揺れながら、北に北にと進み行くのです。

* * *

独りぼっちになりました。格安の運賃に更に無料の一等船室は、台風の名残のうねりに翻弄されピッチングにローリング、大揺れです。波しぶきにぬれ涙にかすむ窓から放然と沖繩本島を見つめつつ、私は泡盛をホロホロと酔いに任せて、ただ飲み続けました。

「……沖繩県民斯克戦へり、県民に対し後生格別のご高配賜らんことを……」

大君の御旗の下に死してこそ 人と生まれしかいぞありけむ 太田 実

大荒れの太平洋、沖繩本島を右舷に見つつ一路北へ北へと進む大船一隻。私は敵前逃亡の敗残者なのでしょうか。本土と沖繩を結ぶ起死回生の運動を起さなければなりません。

* * *

進むこと約小一時間、……船はやがて読谷村残波岬の沖合ぐらいか。そば降る雨となったようです。遙か彼方の岬に目を転ずれば、島影に先程からちいさな小さな明かりが何故か

くり返し繰り返し付いたり消えたり、何かの合図を送っているようです。

ハッと気付いて手許の双眼鏡を取り上げ、目を凝らして彼方を見れば岬の突端に一台の真白のフォルクスワーゲンがこれでもかとパッシングしているのです。

「ああ神山氏だ、神山さんだ！」何と安謝港で見送りしてくれた氏が、読谷村の残波岬までひた走りに走って、岬の突端より別れのエールを送ってくれているのです。

涙があふれて止みません。ウチナンチューの真心が嵐の余波をものともせず、いつまでも何時までも優しく私を見送ってくれるのです。進む船の後方に、その心の明かりが消え去る事はないのです。

* * *

平成四年、それまで年に二・三度の沖繩訪問の旅は俄然深まりました。五度訪ねました。一度に五・六泊となり、後半はアパートを借り、自由に使える車も準備しました。全国植樹祭の開催が決定したのです。両陛下の行幸啓のスケジュールも定まりました。

この年私は二度目の入院で七kg激減、持病も進んでいると忠告されました。よく体調を整えよう！軽くなった身体は、もしもの闘争に堪え得るか。本土より行動を伴にする五名の同志親友も爽やかに日程を調整してくれました。全国の同志も賛助金の協力と参加を心よ

く引き受けてくれました。英霊のみ心やすまる、世紀の天皇沖縄行幸が実現するのです。

* * *

昭和天皇御製

「思はざる病となりぬ沖縄を訪ねて果たさむつとめありしを」

崩御の前年、御病の床でかく吐露された昭和天皇の大御心を偲ぶとき、御心を心として御即位された今上天皇皇后両陛下沖縄県行幸啓が五年を経てやっと実現するのです。

平成五年四月二十三日ついに感激のその日が参りました。

私は、那覇空港一般奉迎者約三千名を前導して、国歌君ケ代の大合唱と萬歳三唱の大役を奉仕しました。後は歓呼の大合唱です！

陽光鮮かな緑の風に打ちなびく日の丸の波々、かつてこの様な事があつたでしょうか。

* * *

次いで十班に別けられた私たちは、各地の奉迎場にてのお世話方と先導所役の奉仕と案内に転戦、用意した十万本の日の丸小旗も初日の分は直ちに消化、直ぐに補充の手配。

その夜は与儀公園市民会館にて天皇皇后両陛下奉迎記念式典を開催。三千五百名余の動員は続いて国際通りを経ての提灯行列十二挺団となり、御宿舍ハーバビューホテルの周囲

に歓呼の声で仰ぎ慕う私たちへ、御宿舎最上階のお部屋より親しく幾度も幾度も提灯を振られての両陛下の御答礼に、感激は更に深まって止みません。

ところで、この一ヶ月前迄の長きに互った沖繩を真二つに別けての大抗争も終結となり、聴けば女子供連れ家族にて和氣藹々と参加しているとの事です。：天皇陛下を歴史上初めて沖繩に迎え奉る慶事に、私事怨恨にて争う愚かさ終止符が打たれたのでした。

* * *

さて、植樹祭直前日の夜九時、緊急密かなる集合命令が十名の班長に掛けられました。

今晚午前二時、会場に程近き某所に二十名の特攻隊員を選出し待機。との事！

その目的は全国植樹祭会場に侵入し、一万本の日の丸小旗を全て余すことなく設置して両陛下御入場に際し、出席者全員に打ち振って戴き、沖繩の赤心を全国に顕示しようではないか、との事なのです。：総隊長は私。時刻、各班より選り抜かれた隊員諸君の中には、沖縄県神青会長の田港君もいました。なんと小学二年の子供連れの親子もいます。

* * *

手筈は整っていました。我々は某建築屋の人夫。会場整備不良が指摘されその緊急修理との事。但し通行許可書には二台の作業車に十名の作業員とのことです。：

残りの隊員は荷室のバネルと諸道具の下に潜り込ませました：：厳重な検問を潜って無事に会場に突入：：必死必勝の思いを込めて朝日がほの明く差す頃まで全員がてきぱきと作業に徹して重く大きな責務を完了。午前五時半、会場を無事に撤収したのでした。

* * *

各班はそれぞれテレビ中継の植樹祭ニュースに期待し、各所にて一旦待機となりました。まだ緊張の糸は解けません。まさか開催者側より没収処分されてはいないだろうか、との心配も正直あつて胸が高鳴ります。主催者たる大田知事は左翼勢力の雄なのです。

やっと待望のニュースの時間が到来、大きくクローズアップされた全国植樹祭の会場にタンホイザー作の威風堂々の荘重な音楽が流れ、天皇后両陛下が今まさに入場されます。会場の出席者全員は用意された一万本の日の丸小旗を高らかに打ち振りつつ総立ちとなり、その旗の音が旗風に響かい、まるで満開の花なのです。かつての激戦玉砕の地に：。

* * *

四月二十三日より二十六日の四日間にわたった全国植樹祭沖縄県行幸啓は全てが万々歳でした。：：此処まで十六年間の悲願の日々でした。

天皇后両陛下をお出迎え申しあげたその日その時より、多くの同志県民と共に行幸啓

奉迎活動に奔走専念し、颯々快晴の那覇空港に雄叫びしてお見送り申しあげた彼の日の思い出の数々は、生涯の宝となりました。

嗚呼、祖国の防波堤・救国の大恩人、誇り高き純忠勤皇県沖縄！

沖縄は祖国のほまれ寒にたへ　さきがけ緋にもゆさくら花かな

（熊本県　本渡諏訪神社　宮司）

沖縄のおじい、おばあと日本人のDNA

鈴木明子

「僕らはさあ、おばあがいるから、人生を迷わず生きていかれるんだ。」とウチナーンチュ（沖縄人）の若者は語ったそうです。（「沖縄オバア烈伝」双葉出版）

なんと素敵な言葉でしょう。

私達オバア予備軍は「沖縄のおじい、オバアになるには、それ相応の年季が必要で六十代、七十代ではまだまだということらしいです。――本州の若者に言ってもらいたい、というかわせたい言葉ですね。

さて、沖縄のおじい、オバア達が私達（本州）に強烈な印象をもたらしたのは、二〇〇一年に放送されたN・H・Kの朝のドラマ「ちゅらさん」の平良とみさん演じる「おばあ」ではないでしょうか。明るくて、たくましくて、優しさに溢れていて、イチヤリバチョウデイ（みんな仲間）、みんなに食べさせてあげなさい。と上京する主人公にサーターアンダギー（沖縄風ドーナツ）を持たせるおばあ。

沖縄戦を生き抜き、アメリカ統治下に何人もの子供を育て、そんな辛い時代をも笑い飛ばすおばあ達、八十歳を過ぎても九十歳でも現役で働くおばあ達、揺るぎない信仰心（琉球神道）を持っていて、家の祀りや先祖の祀りを家族を引き連れて行うおばあ達。

珊瑚礁に囲まれたエメラルドグリーンの美しい海、明るい太陽の下だと、あんなに明るくて思いやりがあつて前向きでどんな困難にも動じず、突き進んでいくおばあになるのかと、思ったものでした。

しかし、これは元々日本人の本質として、DNAに、遺伝子に組み込まれた美德であつて本州の私達が忘れてしまっていたのに、沖縄のおじい、おばあ達はしっかりと持っていて、自分の生き様に自信と誇りを持って生きている、だからこそ沖縄のおじい、おばあ達はあんなに輝いているのではないかと思うのです。

まるで見てきたように言うじゃないかと、思われるかも知れませんが、実は沖縄には少なからず御縁がありまして、と言いますのも、息子が学生るとき初めて沖縄に旅行に行つて以来、「お母さん、沖縄はいいなあ。海も空も人もみんなきらきら輝いている、生命力に溢れている。お年寄りが楽しそうに談笑しながら野菜を売っているし、将来、僕も沖縄に住もうかな。」と言っていたのですが、本当に実行してしまつたのです。

今は東京におりますが、そんな訳で私も何回か沖縄を訪れる事になったのです。

実は私は沖縄で二回、神様に出会ったのです。やはり、沖縄は神の島ですね。それは魂が震えるほどの感動でした。一回目は、初めて沖縄のあの透き通るような翡翠色の海、白い砂浜を見たときでした。あまりの美しさに涙がポロポロ流れました。ああ、神様がいらつしやると、こんな美しいものを創り出されるなんて、神様しかできないと思いました。神様がいらつしやる、その感動は弱っていた私の魂を蘇らせてくれたのです。

二回めの神様との出会いは、世界遺産になっている沖縄の「セイファ御嶽（うたき）」という所です。あちらこちらに御嶽（うたき）の跡―神に祈る場所―があり、この様な聖地を観光地にしたのでは、神様も嘆いておられるだろうし、ノロ（神女）さんも悲しいだろうなと思ひながら、歩いていました。すると数人の女性達が敷物を敷き、お重箱や果物を並べようとしているところに出会いました。息子は小さい声で「今からお祈りをするんや。」と言ひまして通り過ぎたのですが、私はその場所のあまりの神々しさに動けませんでした。明らかにその所だけ空気が違っていたのです。そこだけ切り取られたように、清々しく澄み切っていて、キーンと音がしそうな程、研ぎ澄まされた聖なる空間となっていたのです。

ああ、神様がお喜びになつて天降られていゝと思ひました。その方達の中で一番年上と思はれる上品な女性が、「今から神様のお祈りをするのです。」と声をかけられました。又その方のオーラが凄かつたのです。全身から清らかな光を発していると言ひ感じでした。多分、その方が「ノロ」といわれる神に仕える女性だつたのだらうと思ひます。その圧倒的な存在感、清澄な空気を身にまといてゐる感じ……神に仕える身はこうでありたいと思ひました。

沖繩のおばあ達は、神様は自分達のまわりにたくさんおられていつも自分達を守つていてくださると当たり前のように思ひ、日々暮らしの中でたくさんのマツリ、御願（うがん——お願い事——）、行事などをしておられるそうです。家の中にも、門の神様、玄関の神様、台所の神様、便所の神様、床の間の神様、屋敷の東西南北におられる神様と、日々神様達にお礼をしてまわるそうです。古代の縄文人と同じです。

台所の神様を「ヒヌカン」、又は日本の古語のノ、カンは神、火の神という意味です。

一日と十五日、台所にお米お酒塩水と常緑樹をお供えして、お祈りするそうで、全く本州と同じです。こういうおばあ達に支えられて、ああいう立派なノロさんがでてこられるのだなあと思つた次第です。

さて、そんな沖縄のおばあ達に負けない日本人のDNAの凄さが発揮されたのが、あの東日本大震災です。

自分のことより人々の避難誘導を先にして命を落とされた方々、自らの命を犠牲にして村の水門をしめた消防士、「国民を守る最後の砦、それがわれわれの思いです。」と献身的に働く自衛隊員の皆さん、被災者の方々に温かい食事を提供しても、自分達は冷たい缶詰を食べている姿には、明治天皇御製

しきしまの大和心のをしさは

ことある時ぞあらわれにける

そのものの姿であり、武士の姿といえます。避難所でも礼節を失わず秩序を保ち、他人の事を思いやる日本人の行動は、世界から称賛を受けています。連日、新聞に報道されていたのは皆さん、御存知の通りです。

ここで私がさらに大事だと思いますのは、そんなことは当たり前と私達は思っていることです。困った時はお互い様、の助け合いの精神は日本人は皆持っています、それが特別だとは思っていないわけです。ところが世界をみるとそうではないのですね。だから世界から称賛される訳ですが、今まで私達が当たり前と思ってきた日本人の道徳性は、世界

に類をみない素晴らしい特性であることを、私達はしっかりと自覚し、日本人の誇りを持つべきだと思います。

日本人のDNA、遺伝子にひそむ凄さがもう一つこの震災で発揮されました。

それは私達は天皇様を中心とした強い絆で結ばれた国民だということでした。

天皇皇后陛下が避難先を御見舞にいかれますと、皆さん、涙ぐんだり手を合わせたり、その姿は感動的でした。未曾有の国難に対しての天皇陛下のビデオメッセージでのお言葉は国民に深く浸透したと思います。日本が一つになった瞬間だったのではないのでしょうか。GHQ（連合総指令部）は、日本の精神構造を破壊しようとしたけれど、日本人の遺伝子だけは壊せなかったのです。

ここで、日本人が日本人の誇りを取り戻し元気になるために、皆さんにお勧めしたい本があります。「国家の品格」を著した数学者、藤原正彦さんの「日本人の誇り」という新書です。いかに日本人は秀でていたか、道徳的のみならず、文学でも数学でもということが書かれています。西暦五百年から千五百年の十世紀の間に、日本では万葉集から始まり古今、新古今、源氏物語、平家物語、徒然草とたくさんさんの文学が生まれているのに、世界をみると、イギリスの「カンタベリー物語」チョーサー作と「ベーオウルフ」ぐらいしか思

いつかないと言う具合に。もう一冊お勧めしたい本があります。「日本はなぜ世界で一番人気があるか」竹田恒泰著、PHP新書です。

車や電化製品ばかりでなくアニメもそうで、これは日本人が持つ正義と勤勉な価値観こそが人気の秘密だそうです。こんなに人気があるのだから、日本人よ、元気をだそうよ、といっております。

最後に、未曾有の国難に当たって、今こそ私達は、沖縄のおばあ達のどんな困難にもくじけないたくましさ、明るさ、思いやり、助け合いの心を取りもどし

「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」の高い精神性、日本人の誇りをとりもどし、世界の手本となるうではありませんか。

終わりに万葉集より額田王の歌を贈ります。

熟田津に船乗りせむと月待てば

潮もかなひぬ今は漕ぎいでな

(滋賀県 立木神社 権禰宜)

稽古照今

中 木 屋 豊

幼い子供たちが、富士登山に挑戦しています。大人でもたやすいことではないのに、大人の手を借りないのです。それだけで思わずテレビに、くぎ付けになってしまいました。自分の背丈を超す跳び箱を、いとも簡単に跳びます。保育園対抗の相撲に負けとても悔しがりです。リレーの対抗戦に勝って、相撲で負けた雪辱を果たして、とても喜んでいます。神奈川県秦野市にある若木保育園の活動を伝えるものでした。

幼児教育が大きく変化していることに、大変興味を持ちましたので、調べてみることにしました。すると意外にも灯台もと暗し、鹿児島県の志布志市にその原点がありました。昭和五十五年に開設された通山保育園が、もとでした。「ヨコミネ」式教育法と出ています。そうなんです、ゴルフの横峯さくらプロのおじさん、横峯吉文が経営する保育園です。さくらの親父さんは、物議をかもし評判悪いですが、こちらは大変人気が高くなっています。平成十年民間委託された伊崎田保育園と、同じく十六年に民間委託のたちばな保育園

も、経営しています。現在の定員が、通山六十名なのに七十五名。伊崎田定員九十名なのに百十名。たちはな四十五名に対して五十六名が在籍しています。通常四月からの入所ですが、待機する子供が多くいて、途中から入る子供が多数います。そこで今年秋には、定員枠が撤廃されるということです。もちろん地元の子供だけではありません。わざわざその地区から入所するのですから、その人気の高さがわかります。

ではその人気の理由は何なのか？五歳の男の子は、全員が逆立ち歩きが出来ます。「心の力・学ぶ力・体の力」こどもの可能性を最大限に引き出す教育をうたっているのです。しかもスパルタ式の教育ではないそうです。そもそもの始まりは、「わがままな子供が多いこと、凶悪な事件を起こす背景が、そこにある」一、親の甘やかし。一、幼稚園・保育園がチャホヤ。一、社会の過保護。この三つがわがままな子を作るトライアングルを形成している。ここにメスが入らないといけない、と彼は云います。

具体的な活動は、自主性を尊重し、自然の中で、のびのびと活動し、常に体を動かして自ら考えて行動する。楽しそうに行動し、真剣に考えて学習している、そんな子供たちの映像が映し出されているのです。昔から言われた言葉としては、「かわいい子には旅をさせろ」「鉄は熱いうちに打て」「三つ子の魂百まで」などの諺を連想させられます。

諺はどうして出来たのでしょうか？長い年月を経て、確かにそうだと確信が持たれないことには伝わりません。学習するという意味の「学ぶ」は、もともと「まねる」と云う言葉が語源です。師匠や親がすることを見て、まねることで様々な技術や知識を手に入れて来たのだと思います。柔道や剣道などの「稽古」も、受け身・打ち込みなどの古い型や形を考えてまねて、段々と上達するという意味を、表していると思います。最初から上手な人はいません。練習に練習を重ねて、自分自身の身に付くのです。それを「稽古」と云うのです。

本来の「稽」漢字の意味は、音符の「旨」は「いきつく」の意味。穀物の成長がいきつくところまでいって、止まるさまからとどまるの意味を表します。稽古することで身に付く、穀物も実ると旨くなるから、技術や技もいきつくとうまく上手になる、なるほどと感心させられます。そして考えを、いきつくところまでめぐらせる、考える意味も生まれました。

さてこのたびの東日本大震災、甚大な被害が出ました。心からのお見舞いと、犠牲になられた方々の、ご冥福をお祈りしたいと思います。神社や神主さんにも犠牲が出でいます。本来守ってくださる存在なのに、言葉を失ってしまっています。

そうした中で心温まる話が伝わってきています。世界中からの支援の輪が広がり、ボランティア活動に汗を流す人々が大勢います。何より世界中が感嘆したのは、被害者の人たちの行動です。暴動が起きない。我慢強い。一つのおにぎりを分けて食べる。自分だけが良かったらと考える日本人は、日本人のDNAを持たないと言つて過言ではありません。

陸前高田市の長洞地区は、五十八の世帯数です。半島の根元を津波が洗い流して、全ての道路が寸断され、他の地区から孤立しました。しかし犠牲になったのは、集落外に出かけていた一人だけでした。震災のあくる日から、全員が持ち寄った食料で、炊き出しが行われたそうです。温かい食事だけの協力だけではありません。家を失った人たち二十数戸分の仮設の住宅を建てるための土地も、集落内に確保しました。さらに集落の機能を果たすための集会施設が必要になります。本来は、五十戸以上の仮設住宅が、建てられてしか認められないそうですが、おそらく認められそうだということです。絆の強さは、見習いたい事です。「和をもって貴しとなす」その精神がこれからも大事にされる事と思います。「これより下に家を造るな」石碑が建てられています。その後防潮堤が築かれるなど、災害対策が進められ、その石碑より下に、多くの家が建てられました。しかし、今回の地震による津波ですべて流されました。昔の人の教えは正しかったのです。何度も何度も津波

の被害を受けて来た三陸海岸。その度毎に復興を遂げてきた、粘り強い東北の人々。多くの人が、一人では乗り越えられない試練に立ち向かい、力を合わせて来た歴史が、今尚息づいている証しだと考えます。

火がない、明かりがない、道具も揃っていないわけでもありません。どう火をおこし、寒さに耐え、煮炊きをするのか。体験してないことには、スムーズな行動にはなりません。今回でも昔の経験を持った長老がいて、避難所の秩序も保たれているのだと考えます。「芸は身を助く」と言われますが、体験はいざと云う時に役立つものです。青少年に、ボーイスカウト・ガールスカウトなどの活動や、野外での活動体験は、本当に必要です。

昔の人の知恵が現在に通じる、地震や津波に対することだけではありません。ここ沖縄は、今も旧暦「太陽太陰暦」が使われます。どうしてかたくなに旧暦が使われるのでしょうか。たとえば旧暦のもつ季節感、二月から四月までを春と言ひ、五月から七月までを夏と言ひ、八月から十月までを秋と言ひ、十一月から一月までを冬と言ひます。ぴったり合っている感じがします。それと今一つはやはり、中国や朝鮮半島との歴史的つながりが、あるからだと思います。東アジア、中国や朝鮮半島も、今尚旧暦が使われていることで、想像できます。江戸時代の初め、薩摩は幕府に琉球侵攻の許しを得ました。第二尚氏の第七

代尚寧王の時代、一六〇九年三月四日、山川港を出発した島津軍は、三月八日に奄美大島上陸、三月二十日には徳之島、三月二十四日には沖永良部島、四月五日には首里城を接收しています。どうしてこんなにも早く侵攻出来たのでしょうか。琉球国は、明国の冊封を受けて、平和ボケしていたともいわれます。争いを好まず、鉄砲すら廃棄していたといわれます。かたや島津軍は、戦国の世特に関ヶ原の後で、勇猛果敢だったのです。以後薩摩は明との間接貿易と、琉球経営で莫大な富を築くことになりました。さらにヨーロッパのアジアへの進出を知ることとなり、明治維新のさきがけとなりました。

歴史にはその原因があり、結果が生じ、その結果が原因となって、次の事が起きるという仕組みになっています。争いが生じ国が乱れていたので、武器を捨てさせていた。その結果薩摩に侵攻されてしまった。それを許した幕府は、やがて倒幕の憂き目にあったのです。今日日本は、大戦以来平和憲法と云う錦の御旗のもとに、平和を享受してきたように錯覚してきました。北方領土はロシアに、竹島は韓国に実効支配されています。沖縄近くの尖閣諸島、まさに風前のともしびです。

中華思想の名のもとに、大明であり大清でありました。属国の立場でないと、通商は認められませんでした。だからと云って、決して明も清も、琉球や朝鮮を守ってはくれなか

ったことを、歴史が語っているのです。日米同盟のために、ここ沖縄は過重なまでの基地の負担を受けています。特に亀甲墓、一族を丁重に祭り、一族が揃って御馳走を食べる、特異な風習を守ることにも、支障をきたしておられる、その現状を慮ると、忸怩たる気持ちになります。

しかし、軍事力を持たない平和は、長く続かないのは、歴史の事実です。全ての日本人が、自分自身の問題だと自覚して、方策を見出さないといけません。

豊かになりました。文化も進み生活水準も上がりました。法律も整備され、弱者にも優しい社会になりました。しかし一方で、自分だけが良かったらよい人や、苦勞したくないので生活保護を受ける人、義務を果たさず権利ばかりを主張する人が、ずいぶん増えてきています。でも幼児教育の変化や、東日本大震災で示された日本人の底力、まだまだ捨てたものではありません。一人一人が、あらゆる場面で協力して、生き抜く力を身につけ、生きやすい社会にするためにも、古の人たちがどうであったかを考え、今に活かすための検証が必要です。「稽古照今」御一緒に進めていただくことをお願いし、拙い話の纏めとさせていただきます。

沖繩の島守島田勲 あきら

小野 日 隆

沖繩戦、それは誠に悲しい出来事でありました。大東亜戦争末期の昭和二十年三月二十三日米軍は先ず、航空機延べ二千機による空襲、更に二十六日本島西方の慶良間諸島に上陸、そしてついに四月一日、本島読谷、茶谷に上陸を開始します。そして六月二十三日沖繩守備隊第三十二軍の牛島司令官、長参謀が摩文仁の司令部壕で自決し、事実上戦闘が了しますが、何よりもこの沖繩戦が悲惨だったのは、この戦いにおいて沖繩の民間人が、日本軍兵士と同数の九万四千人も亡くなったという事です。当時の沖繩県民の人口は約五十九万人ですから、実に人口の二割が戦禍の犠牲になった訳です。

この沖繩戦において就任して、殉職するまでの僅か五ヶ月の間ではありましたが、常に県の職員を陣頭指揮し、県民の疎開、食料の確保と県民を護るために大車輪の活躍をし、正に矢面に立って県民と共に戦いそして散って逝かれました沖繩県第二十七代県知事、戦前最後の知事島田勲さんのお話をします。

沖縄を訪れた人は必ず訪れるでしょう摩文仁の丘には各県の戦没者慰霊碑が建っていますが、その入り口とも言うべき所に高さ四メートルも在りましょうか、立派な黒御影の石碑が建っています。石碑には一番上に「戦没」、続いて右に「沖縄県知事島田穀」左に「沖縄県職員」と二行に刻まれ、そして、その下に「慰霊塔」と書かれています。沖縄県知事島田穀以下沖縄県戦没職員四百六十八柱の御霊たちが祀られています。人々は、この慰霊塔を「島守の塔」と呼び、島田知事を「島守の神」としてその遺徳を今も称え続けています。さらに今でも沖縄県高校野球新人大会の勝者には「島田杯」と呼ばれる優勝杯が手渡されます。このように島田穀は、沖縄県民から慕い、仰がれ続けています。残念ながら、本土決戦の捨石にされた挙句、二十七年間米軍政下に置かれ、今尚在日米軍基地の七十五パーセントを押し付けられて苦しむ沖縄では、県民の「ヤマトンチュウ」に対する感情は穏やかならざるものがありましょう。特に大東亜戦争中の旧軍に対する反発は強く、未だに多くの誤解曲解の中で認識が為されている事は両者にとって誠に悲しむべき事であります。そうした中で、先ほども申し上げましたが、立派な慰霊碑が建てられ、名前を冠した優勝カップまである、今も沖縄県民に愛され、仰がれ、慕われる島田穀さんとはどんな方だったのでしょうか。

昭和十九年の十月十日、初めて那覇が大空襲を受けて以来、沖縄は平穩な南の樂園から戦場へと代わっていききました。陸軍や内務省は可能な限りこれから戦場になる事は間違いない沖縄中南部から、北部や本土に県民を疎開させようと懸命の努力をしていましたが遅々として進みません。時の、つまり島田知事の前任知事と軍部との関係が悪かったのが最大の原因だと思われます。そして、知事は県民や県職員とも陸軍とも協調関係が築けなまま二十年の一月十二日に東京に出張したまま、香川県知事の発令を受けて赴任します。東京に行ったまま二度と沖縄に帰ってくることはありませんでした。つまり、戦時体制化で、まして、米軍が押し寄せて来ようかという非常事態の中で県民を護るべき知事が不在になってしまったのです。そこで、内務省は前任者の抜けた知事職を数人の候補に打診しますが、これから戦場になる沖縄行きに手を上げるものは誰もいない、沖縄なら御免と誰も固辞しました。そこで、大阪府内務部長の島田叡の名があがったのでした。この時期、沖縄に行ってくれということは、実質「死ね」と言うようなものです。

昭和二十年一月十一日、池田大阪府知事が島田内務部長に「こんな話が来ているが、君どうだね」と尋ねると、「私が行かなかったら、誰かが行かねばならんでしょう。私が行きます」と即答しました。知事も驚くし、当然家族も反対しましたが、妻にはこう言い含め

たのでした。「誰かが、どうしても行かなならんとなれば、言われた俺が断るわけにはいかんやないか。俺が断ったら誰かが行かなならん。俺は行くのが嫌やから、誰か行けとは言えん。これが若いものなら、赤紙一枚で否応なしにどこへでも行かなならんや。俺が断れるからというので断ったら、俺はもう卑怯者として外も歩けんようになる」

島田さんが沖縄県知事就任の要請を受諾したもう一つの理由は、沖縄軍司令官牛島満中将の懇請があつたからです。牛島は空席の知事後任を誰もが回避している事情を見て、内務省に是非島田君をと要請したのでした。島田は上海総領事館警察部長時代、支那事変に出征中の歩兵第三十六旅団長の牛島少将と知り合います。年齢は十四歳離れています、二人は人格、人品が実に良く似ていました。牛島が最も尊敬した人物は郷土の西郷隆盛であり、島田もまた、熱烈なる大西郷の敬慕者でした。二人は、共鳴しあう相寄る魂であり、最後を共にする仲だったのです。島田は義理のお兄さんにこう言っています。「牛島さんから赴任を望まれた。男として名指しされて、断る事はできへんやないか。」と。

昭和二十年一月三十一日、島田さんは沖縄に着任します。荷物はトランク二つだけです。中には抹茶道具、「南州翁遺訓」、「葉隠」などの愛読書数冊、夫人が入れた和服と博多帯、胃腸、風邪などの常備薬、ピストル二丁などが入っていました。それは、日本刀と自決用

の青酸カリを携えた覚悟の赴任でした。那覇市は、前年十月十日の米軍の空襲で大半消失しましたが、戦禍を免れた県庁では全職員が玄関前広場に出て新知事を迎えます。島田は相次ぐ空襲下での職員の苦勞をねぎらった後こう挨拶をします。「これから何度、大きな試練を経るかもしれないが、本島の奮闘はこれからだ。一緒になって共に勝利への道を進みましょう。沖縄県は国民の耳目を集めている敵機の空襲を最初に受け、戦禍の中に戦ったのだから、沖縄県から率先垂範し、国民の士氣を昂揚させよう。無理な注文かもしれないが、先ず元氣にやれ、明朗にやろうじゃないか。私が万一元氣を無くしたら強くしかつてもらいたい。これからは、知事も、部長も、課長も思い切った事を言い、創意と工夫を重ねて良心をもつてやろう。そして力一杯、早くやることだ」県庁職員は逃亡した前知事の後に一体誰が来るのか、期待と不安が交錯する中で、やがて戦場となる沖縄の知事として陣頭に立つて戦時行政を行い、県民を引っ張って行くに足る指導者であることを願っていました。島田新知事は職員県民の願望期待にこたえうる知事である事を就任第一目に証明したのでした。

こんな話もあります。島田知事がしばらくたって県庁の中堅職員を招き慰勞と激励の会を催し、親しく部下と飲食を共にします。そのときの様子を一幹部は次のように述べてい

ます。「敵が寸前に迫ったあの頃、一番大事な事は県庁職員が一丸となって県民の先頭に立つことであつた。こうした体制は主従の単なる命令と服従だけで成り立つものではない。人間的な信頼と結びつきが大切なのだ。知事の意向はこの辺にあつたと思う。酒がまわるにつれて、歌や踊りが始まつた。島田知事の隠し芸が飛び出し（五分刻りの坊主頭の島田が、てるてる坊主てる坊主、あした天気にしておくれと歌い踊る）、職員の十八番が次々に披露された。楽しい集いだった。沖縄県庁の歴史に知事がこのように部下を喜ばせ、知事と職員がこんな打ち解けて歓びを尽した事があつたらうか」と。

こうして島田知事は着任してあつという間に職員と県民の心をしっかりと掴んだのです。

島田の知事としての主任務はやがて戦場となる沖縄において軍に全面協力するとともに、戦火の中でいかに県民の生命を守り、犠牲を出来る限り少なくすることでしたが、特に重要な事は県民の疎開と食料の確保でした。

疎開については、昭和十九年の七月より開始されていましたが、本格化したのは島田着任後です。島田は一人でも多くの県民の命を救いたいと全力を注いだ結果、県民五十九万人の内、二十二万余りを疎開させることが出来ました。島田知事の赴任がなければ、県民の犠牲は現実をはるかに上回る、いっそう過酷なものになつたでしょう。

もう一つの課題、食料の確保については、二月下旬、島田知事自身が台湾に飛び台湾提督と交渉、苦心の末台湾米三千石（四五〇トン）の移入を成功させます。この米は、制空、制海権が失われている東シナ海を三月下旬、米軍の本島上陸の前に輸送され、沖縄戦の遂行に大いに役立ちました。

沖縄戦は大東亜戦争中最大の激戦でした。昭和二十年四月より六月末までの三カ月間、両軍は死闘を繰り広げました。アメリカ軍はその前の硫黄島での戦いで悪戦苦闘し損害は日本軍二万一千を上回る二万八千を超えました。三、四日で終わるはずの戦いが、三十六日間も続きました。そこで米軍は、この戦いの反省と教訓に立ち沖縄戦に望んだのでした。

米軍は、上陸部隊七個師団十八万余り、支援部隊戦艦十八艘、空母十五艘、航空機千七百機、総兵力四十五万人というとてもない兵力を投入します。

対する沖縄軍は二個師団を基幹とする六万九千人と海軍八千人を合わせた七万七千人、比べ物にならない兵力の上に、日本軍は補給の道が絶たれており孤立無援の状態、一方米軍は膨大な武器弾薬に兵力の補強も可能な状態、日米両軍の戦力の差は歴然、天地の隔たりがありました。

このような状況の中で、軍民一体の日本軍は勇戦奮闘米軍を大いに苦しめるのですが、

戦力の差は如何ともしがたく、三ヶ月に及ぶ徹底抗戦もむなしく次第に南部に追い詰められていきます。この激しい戦火の中、降り注ぐ砲弾を避けて暮らす壕の中で、島田知事は少しでも多くの県民を救うため、最後まで行政機能を維持しようと奔走します。四月二十七日に警察部壕で開かれた、戦前戦中の沖縄県政最後の市町村会議はその最たるものでありましょう。日本軍が首里から南部に撤退するという状況下、南部の住民を救うべく関係市町村長警察署長を招集、出席者は十八市町村中十七名、警察署長は四署長全員が顔を揃えました。敵機の爆音や至近弾の落下で揺れる壕の中、ロウソクとランプが灯る、薄暗い七十畳敷き程の洞窟は百人くらいの人間でぎっしり埋め尽くされ、朝の八時から夕方六時まで熱心な話し合いがなされたとの事です。今の時代では想像もつかない、プロの行政マンの正に命がけのやりとりが目に浮かんできます。

島田知事はこの戦いの中で数多くの県民が犠牲になったことに深い責任を感じており、最後は自決することを決めていたようです。摩文仁の丘の壕から、最後まで同行を主張する職員を追い出すようにして、運命を共にした荒井警務部長とそこに残ります。こんなこともありました。毎日新聞の支局長が沖縄脱出にあたり六月十九日、島田知事に最後の別れの挨拶に来ます。支局長は知事に対してかねてからの思いを知事に伝えます。

「知事さんは赴任依頼、県民のために、もう十分働かれました。文官なんですから最後は手を上げて出られたら良いのではありませんか」

すると島田知事はキツと顔を上げ切り返すようにいいました。

「君、一県の長官として、僕が生きて帰られると思うかね、沖縄の人がどれだけ死んでいるか、君も知っているだろ。」ややあつて

「それにしても、僕ぐらい県民の力になれなかった県知事は、あとにも先にもいないだろうなあ。これはきつと末代までの語り草になると思うよ」

「それじゃ、知事さんはこれからどうなさいますか」

「無論、軍と最後を共にします。見苦しい身体を残したくないから、遠い海の底に行くかな」と笑いました。その後、打ち解けた時の癖で、神戸訛りを丸出しにして

「うん、そうや。君にいい物あげるわ」博多帯を取り出して

「これは赴任する時、家内が荷物に入れてくれたもんやけど、僕は必要がなくなったから君にあげるわ」

支局長は、その夜、この帯を腰に巻いて海に入ります。最終的には上陸した処で、米軍の捕虜になるのですが、併泳する泳ぎの達者な兵隊に、溺れそうになった時その帯を掴ま

れて九死に一生を得たとのことでした。

六月二十三日、牛島司令官と長參謀長らが自決します。島田知事と、そして最後まで行動を共にした荒井警務部長は六月二十六日、摩文仁の壕を出て他所で自決しました。二人の生死に関する情報は八月十五日の敗戦後も交錯し、生存説まで飛び交いますが、知事の自決を見たという証言者が現れ、その死は七月であることがわかりました。島田知事四十三歳、荒井警務部長四十四歳でした。沖縄県第二十七代県知事島田叡は、いかに戦争とはいえ、県民の命を守る事が出来ず多くの人々が斃れていった事を自分の責任とし、一死を以ってその罪を償いました。知事のこの高潔無比な行為は「島守の神」として今も沖縄の人々の魂の中に生き続けています。

(大分県 大分縣護國神社 宮司)

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりをお願い神明奉仕に励んでいます、講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

I 何のために語るか（祈願）

- 1 神命をかしこんで立つ
- 2 まず祈れ

3 正しい志を

4 まじめな生活を

5 話は生きている

II 何を語るか（内容）

その一 体験を語る

1 体験を語る

2 体験を反省する

3 二つの「門」

① 自然のいのちのなかに神様を見る

② 人間のいのちのなかに神様を見る

その二 講演の内容

Ⅲ

いかに語るか（表現）

1 わかりやすく語る

① 話はわかりやすく

② 自分の言葉で語る

③ 抽象的な論理よりも具体的な事実を

④ 話には「うねり」を

2 至誠をもって語る

① 主催者にも聴衆にも深い感謝を

1 岩戸を開け、門にとどまるな

2 位に中す

3 講録をつくる

① 話の材料を集める

② 話の材料を選ぶ

③ 話をまとめる

④ 特に切り捨てについて

② 至誠をもって語る

③ 遺言の覚悟

3 自然に語る

① 講録をはなれて

② 自然に語る

③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記して見ました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第二十七回神道講演全国研修大会・沖縄大会の記録

於 波上宮

神社本庁総合研究所長 田中 恆清

顧問 池田 剛康

々 西高辻信良 (福岡県神社庁庁長)

々 神 日出男 (大分県神社庁庁長)

々 武雄 哲司 (佐賀県神社庁庁長)

々 宇野 正輝 (熊本県神社庁庁長)

々 杉田 秀清 (宮崎県神社庁庁長)

々 川上 親昌 (鹿児島県神社庁庁長)

々 真弓 常忠 (住吉大社宮司)

々 大野 俊康 (元靖國神社宮司)

々 矢野 憲一 (元神宮欄宜)

大会会長

末安 大孝

(波上宮宮司)

実行委員長

村田 和之

(長束神社宮司)

実行副委員長

佐古 一洌

(松尾大社宮司)

実行委員

芦原 高穂

(旭川神社宮司)

々

生寫 經和

(松尾大社権宮司)

々

小串 和夫

(熱田神宮宮司)

々

落合 偉洲

(久能山東照宮宮司)

々

河本 文夫

(宮尾八幡宮宮司)

々

蘭田 稔

(秩父神社宮司)

々

谷田 勉

(櫻山八幡宮宮司)

々

長曾我部延昭

(伊豫豆比古命神社宮司)

々

戸内 康雅

(心清水八幡神社宮司)

々

中木屋 豊

(稻荷神社宮司)

々

中野 幸彦

(多賀大社宮司)

実行委員

波多野 學 (高見神社宮司)

々

塙 東男 (笠間稻荷神社宮司)

々

原 茂子 (夜疑神社権禰宜)

々

宮川 脩 (福井県護国神社宮司)

々

山下 裕嗣 (白山神社禰宜)

々

山田 一孝 (静内神社宮司)

々

山村 稔晴 (高知大神宮宮司)

々

山本 行恭 (椿大神社宮司)

々

渡邊 知宣 (正野神社宮司)

— 実行委員五十音順 —

事務局長

畠田 明彦 (松尾大社権禰宜)

事務局員

村田 和弘 (長束神社禰宜)

々

村瀬 佳子 (長束神社権禰宜)

々

石井 昌孝 (諏訪神社禰宜)

事務局員

々

鈴木 明子

(立木神社権禰宜)

二ノ宮雅子

(嘯吹八幡神社出仕)

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

顧	問	真弓 常忠	住吉大社宮司	幹	事	戸内 康雅	心清水八幡神社宮司
顧	問	大野 俊康	元靖國神社宮司	幹	事	中木屋 豊	稻荷神社宮司
顧	問	矢野 憲一	元神宮欄宜	幹	事	中野 幸彦	多賀大社宮司
会	長	村田 和之	長束神社宮司	幹	事	波多野 學	高見神社宮司
副会	長	佐古 一洌	松尾大社宮司	幹	事	塙 東男	笠間稻荷神社宮司
幹事・監査		芦原 高穂	旭川神社宮司	幹	事	原 茂子	夜疑神社權欄宜
幹	事	生寫 經和	松尾大社權宮司	幹	事	宮川 脩	福井県護国神社宮司
幹	事	小串 和夫	熱田神宮宮司	幹	事	山下 裕嗣	白山神社欄宜
幹	事	落合 偉洲	久能山東照宮宮司	幹	事	山田 一孝	靜内神社宮司
幹	事	河本 文夫	宮尾八幡宮宮司	幹	事	山村 稔晴	高知大神宮宮司
幹	事	藺田 稔	秩父神社宮司	幹	事	山本 行恭	椿大神社宮司
幹	事	谷田 勉	櫻山八幡宮宮司	幹事・監査		渡邊 知宣	正野神社宮司
幹	事	長曾我部 延昭	伊豫豆比古命神社宮司	事務局長		畠田 明彦	松尾大社權欄宜

平成二十三年六月現在

神道講演全国大会のあゆみ

大会		開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一回	東京大会	昭和四六年八月四～六日	神社本庁		石沢 久英	久保田 博人	
第二回	広島大会	昭和五〇年八月八～一〇日	塩屋神社		石沢 久英	河野 貞愛	
第三回	伊勢大会	昭和五四年八月二七～二九日	神宮会館		猪瀬 好一	山本 行隆	五十鈴川
第四回	九州大会	昭和五八年六月七～一〇日	太宰府天満宮		西高辻 信貞	宇都宮 正元	神国の春
第五回	みちのく大会	平成元年八月二一～二三日	高山稲荷神社	工藤 伊豆	新山 昌孝	平澤 明穂	平成の民の祈り
第六回	伊勢大会	平成二年八月二〇～二二日	椿大神社	岡本 健治	山本 行隆	二橋 一彦	うまし国日本
第七回	東京大会	平成三年八月二七～二九日	全国神社会館	大野 俊康	山本 行隆	青島 清三郎	食国の祈り
第八回	宮崎大会	平成四年八月二四～二六日	宮崎神宮	大宮 四郎	山本 行隆	本部 雅裕	
第九回	愛媛大会	平成五年七月一九～二一日	愛媛県護国神社	大宮 四郎	山本 行隆	小川 純生	天翔るみたま
第一〇回	東京大会	平成六年七月二一～二三日	靖国神社	大宮 四郎	山本 行隆	坂 明夫	
第一一回	北海道大会	平成七年八月三～五日	鳥取神社	山本 行隆	鈴木 瑞彦	奥谷 由起子	大禊
第一二回	広島大会	平成八年七月一六～一八日	三瀧荘	山本 行隆	村田 和之	村田 和弘	
第一三回	伊勢大会	平成九年七月一七～一九日	神宮会館	山本 行隆	矢野 憲一	中村 昌司	神路山

大会		開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一四回	京都大会	平成一〇年八月二七～二九日	八坂神社	真弓 常忠	佐古 一冽	嶋田 達久	追憶
第一五回	東京大会	平成一一年九月九～一日	全国神社社会館	宮西 惟道	村田 和之	生寫 經和	神国の教え
第一六回	愛媛大会	平成一二年八月二三～二五日	石鎚神社	十亀 興美	村田 和之	生寫 經和	伊予の雄叫
第一七回	石川大会	平成一三年九月四～六日	白山比咩神社	山崎 宗弘	村田 和之	生寫 經和	白嶺
第一八回	鹿児島大会	平成一四年八月二一～二三日	霧島神宮	高橋 弘平	村田 和之	生寫 經和	肇国の誓ひ
第一九回	愛知大会	平成一五年六月二五～二七日	熱田神宮	小串 和夫	村田 和之	生寫 經和	剣のこころ
第二十回	島根大会	平成一六年七月一三～一五日	出雲大社	千家 尊祐	村田 和之	生寫 經和	国引の集い
第二一回	宮城大会	平成一七年八月二三～二五日	志波彦神社鹽竈神社	宇仁 繁儀	村田 和之	生寫 經和	鹽竈ざくら
第二二回	北海道大会	平成一八年六月二二～二三日	士別神社	佐藤 公聰	村田 和之	生寫 經和	朔北のいぶき
第二三回	奈良大会	平成一九年六月一八～二〇日	石上神宮	森 正光	村田 和之	生寫 經和	布留の鼓動
第二四回	伊勢大会	平成二〇年六月一七～一九日	神宮会館	高城 治延	村田 和之	畠田 明彦	神風のむすび
第二五回	茨城大会	平成二一年六月二四～二六日	茨城県神社庁	塙 東男	村田 和之	畠田 明彦	常陸の祈り
第二六回	山口大会	平成二二年六月二二～二四日	松陰神社	上田 俊成	村田 和之	畠田 明彦	至誠のかがみ
第二七回	沖縄大会	平成二三年六月二一～一四日	波上宮	末安 大孝	村田 和之	畠田 明彦	魂の島から

あとがき

今年三月十一日、国内観測史上最大といわれる三陸宮城県沖を震源とする、マグニチュード9.0という大地震、東北関東各地で群発する地震、岩手を襲った大津波、東京電力福島第一原発の水素爆発放射能漏れと国難ともいふべき最悪事態が発生しました。

未曾有な大震災により沖縄大会開催実施の有無を如何にすべきか検討いたしました、予定通り開催に踏み切りました。六十六年前の六月二十三日牛島満司令官が自決され沖縄戦は終結。今年は六十六年目、昭和天皇様のご巡幸、沖縄は願い叶わず今上陛下が代行された沖縄。一度は全国大会を開催すべく、二三年前より計画を立てていましたが末安沖縄県神社庁庁長の快諾を得て実現、大会々長と基調講演も受け持つて戴きました。会場をお願いした波上宮末安宮司様を始め、職員の皆様方の全面的なご協力で所期の目的も見事に達成。主催者代表として神社本庁より荒井教化課長、普天間宮新垣副庁長とかけつけて戴き花を添えて戴きました。誠にありがたく厚く御礼申し上げます。

沖縄県は日本本土以上の祖先崇拜、自然崇拜を重んじ今に伝えている地域、琉球神道と

いわれる如く琉球王国の教えて信仰心は強く私達が見習う点が多くあったように思います。神の島と仰ぐ宇高島、遙拝所の御嶽と今もその当時の面影がいたる処に残っています。

六月十二日より十四日迄二泊三日間、那覇市の波上宮を会場に四十名の参加者が全国各地より集結、岩手県陸前高田市からも災害見舞の御礼にと駆け付けて下さいました。

「導こう平和に至る惟神の道」を主題に掲げ早朝より深夜に至る迄研鑽に励みました。参加者の皆様方には大東亜戦争の激戦地、沖縄に伝わる琉球独自の信仰、文化を目の当りに見て今後の斯道の発展の為、参考にされ神明奉仕に励まれんことを祈ります。

この度の東日本大震災という恐ろしい体験の中で私達日本民族が近代科学技術文明に酔いしれ自然の偉大な力を軽視し他力本願に甘えていたことに警告と試練に耐える氣力を持つことを教えているように思います。自然崇拜を重んじて来た日本民族に今一度琉球神道に伝わる自然崇拜に気付き目覚め考えてみたいものです。諸兄のご活躍を祈ります。

平成二十三年 七月

第二十七回神道講演全国研修大会

沖縄大会実行委員長

村田和之

講話集 ^{まふい}魂の島から

— 第二十七回 神道講演全国研修大会 沖縄大会 —

発行 平成24年8月1日

編集者 装幀者
— 神道講演全国協議会事務局

印刷所 呉市広白石一—二—三四
製本所 株式会社 ユニックス

発行所 — 神道講演全国協議会

〒六六〇〇四 京都市西京区嵐山宮町三 松尾大社社務所内

TEL (〇七五) 八七一—五〇一六 FAX (〇七五) 八七一—三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えます



